
クリス村

綴何

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリス村

【Nコード】

N0597M

【作者名】

綴何

【あらすじ】

この世の森羅万象を知り、その上の英知を越え、誰にも負けぬ力とその美しさを持ち、時に残酷を、時に慈悲を持つ神……時に己に学ぶ至高の神達

その神の頂点に君臨するのは麗しき二人の女神であった。

でも真面目なお話は一切無い

賢く才色兼備でちょっぴり残酷おちゃめな『クリス』ちゃんと

お馬鹿で武勇に優れた（前期はそうでもない泣き虫）乱暴者の『リ
ン』ちゃんの
涙有り、笑いあり、魔法有り、なんでもありの永いお話でございま
す。ぜひ読んでみてください！

さて、あなたは二人とぶっ飛んだ人生を分かち合えるのでしょうか？

上（前書き）

実在の人物、神話には何の関係もございません。時代も時間も越え
ます。

あまり旅人も通らないような山の中にある、古い小屋のような家から二人の子ども達が元気良く扉を開け放ち、駆け出して行った。

「クリスー！待ってーぐりずううう」

「うるさいな！泣くんじゃない！ノロノロしていると置いていくよリンー！！」

同じ髪の長さと同じ身長、だけど二人は全く違う色の髪をしていた。二人に血のつながりも、親も居ない、物心ついたときから二人は一緒に居て、この山に牧場を営んでいる老夫婦に育てられていたのだった。

「クリスー、リンー遠くに行くんじゃないぞー」

「はい」

おじいさんに言われたことを元気良く返事していつものようにそれぞれの役割を果たしに行く。

「……本当に不思議じゃアねえ」

「お婆さん」

「金色の天使のような気の強い女子のクリス、紫色の小悪魔のよくな泣き虫リン……あの二人は本に不思議な子じゃア」

「そうじゃなあ、ワシらがあのコらを拾ってもう何年経ったかー

……一向に姿が変わらん」

若かった相棒の犬も、もはや老犬になってしまった。もう昔のように羊を追って走り回ることができなくなっていた。

「……お別れが、ちかいの」

「そうじゃな、お婆さん。ワシも昨日夢を見たよ」

そういつて、おじいさんは微笑んだ。

「神様が、あの子らを迎えに来ると仰られておった。綺麗な神様じゃった」

「あの子らはやはり……」

二人は微笑んで杖を掴んだ。

「ええ子じゃ」

「リンちゃん！どうだった？」

「産まれてたよクリス！」

籠いっぱい採れたての野菜を入れたクリスが家畜小屋に顔をのぞかせた。

泥と草だらけになったリンは汗をかいた顔で叫んだ、臨月の近かった牛が丁度今朝方子牛を産んだのだ。

「わーい、やったやったあ！」

「おや、二人とも抱き合っただろうしたのかな？」

「じつちゃん、聞いて！子牛が産まれたの！」

「おお、本当じゃな。」

子牛を舐める親を見てリンは目を細めた。ソレを見たおじいさんはリンの頭を撫でる。

「クリスやあ、いまから野菜洗うんじゃ、手伝ってくれんかねえ？」

「いいよ！じゃあリンちゃん。おじいちゃんをちゃんと手伝うのよ」

「クリスもね」

二人は手を振って別れた。

クリスはおばあちゃんと一緒に畑仕事や家事などを手伝い。

リンはおじいちゃんと一緒に家畜の世話や家畜から取れる綿や乳や卵を回収するお手伝いをしていた。

決して裕福ではない暮らしではあったが、四人は確かに幸せであった。

この時が永遠に続けばいいのにと幼い二人は思っていた……。

上（後書き）

時代の流れがたまによく変わったりします（いまは順調）
性格も変わります。

中

ある日のことであつた。

普段はめつきり人など来ない山に珍しくある徳の高い旅人が訪れた。老夫婦は彼を快く歓迎した。

「おいしい食事をいただくことになりました、ありがとうございます
す」

「いやいや、まったく何も無いところですがどうぞ。おお、紹介しておきましょう。我が子らです」

おじいさんは二人を紹介した。旅人はクリスをみて微笑んだ。

「ああ、なんて良い子なんでしょう。おじいさんこの子はきつと二人に幸福をもたらすでしょう」

クリスは人見知りをする子ではあつたが、外面は良かったのでとりあえず旅人に微笑んだ。

そして、旅人はリンをみて眉を顰めた。

「おじいさん、この子は不吉です。この子からよからぬものを感じます」

「なんて事を言うんだ！」

おじいさんは怒鳴り上げたが、旅人は睨むようにリンをみた。

「おじいさん、この子は……」

カア、カア

「リンちゃんめーっけ」

森の中で、めそめそ泣いているリンをクリスはやっと見つけた。

「もう、やっぱり泣いてる。なーにが『子牛みてる』よ、おじいさんも心配してたよ？あの旅人ももう行っちゃったし」

「…………ぐす、ずず…………ひく…………だって、だってリンが泣いたらクリス『ウザッ』って言うから」

「ウザ!!その根暗根性!!ちよーうざい!!」

「!!!!(ガーン)…………ううう、ううああああああああん」
リンの泣き声は山を木霊した。

「ああ、もう泣くな!!」

クリスはリンの両頬を叩いた。リンはポツカーンと口を開いたまま目をぱちくりさせた。

「リンちゃん好きよ」

「うえ?」

「誰がなんていおうと、リンちゃんが何者であろうと。好きよ」

「ううう、クリス ……!!」

二人は手を繋いで帰っていった。

「ま、私の意志に反しなかったらけどね」

「なんか言った?」

「なーんにも?さ、帰りましょう」

がさ

「……………」

にやり

「おはようクリス」

「おはようリン」

二人は今日も元気良く朝の運動を始めた。

「二人ともおいで」

「はい」

老夫婦に呼ばれ二人は素直に駆け寄った。おばあちゃんの腕にはかごとがあった。

「今日は二人だけでピクニック行ってきなあ」

「え？」

「いつもいい子に働いてるご褒美じゃよ、じいちゃんらが仕事するから気にせんでええ」

「……」

クリスは黙り込んだ、おばあちゃんはそんなクリスの手のひらの上にかごを置いた。

「ああ、ついでに山の山菜も沢山採ってきてくれんかの」

「いいけど……」

クリスの頭をおばあちゃんはそっと優しく撫でた。

「ばあちゃんらのぶんも、楽しんでおいで」

「……はい、いこ！リンちゃん」

「うん」

老夫婦は優しく微笑んだ。

それが、二人の見た愛しい人の最期であった。

「……う、うわあああああああああああ！……！」

どさっ

リンの怒号の叫びと、クリスの絶望の脱力。

二人の目の前で老夫婦は見るも無残な姿で殺害されていた。それだけでなく家も、小屋も、野菜畑も、すべて何もかもが破壊されていた。

「くうん」

「！ポチ」

老犬がよろよるとリンに近づいた。

「くうん」

ペろ、一舐めすると静かに倒れて、二度と動かなくなった。

「ポチ！……うぐ！？」

「リン」

犬を抱いていたリンの身体が浮き、壁にぶつかった。クリスは憎しみの目をもって醜い大人を睨んだ。

「おい、こんな所にチビが居たぜ。殺るか？」

「いや、待てよ。このチビ綺麗な顔してるな」

山賊の一人がクリスの顔を持ち上げた。

「まさかこんな辺鄙な山に人が住んでるなんてな、泣き声が聞こえたんでまさかと思ったが」

「うろうう」

「泣き虫はコイツみたいだな」

リンの頭を男は踏みつけた。

「うづ、リンのせいだ……おばあちゃん達、殺されたの？」

「そうそう、はーははははははー！」

「ちがう！リンちゃんのせいじゃない。悪いのはこの蛆虫どもだよ
ぐい、

「きゃー！」

クリスの金色の髪を男は乱暴に持ち上げた。

「こいつ、女衞に売ったら高そうだな。……連れて行け」

「人を売る気！？」

暴れるクリスを二人かがりで押さえつける。

「クリス！」

「こいつは？」

山賊たちはリンをみてあざ笑った。

「紫の髪の女かあ、いらねえな。いらねえ」

「！！！」

リンの首に刃が突きつけられる。

「死ねよ」

「！！！」

「いーん……！」

下（前書き）

神様を冒読するシーンがこれからたびたびです。

信仰深い方はこの作品自体読まないほうがいいと思います。

神様や信仰自体あんまり無いとか、それでもないという方は続きをドウゾ！

下

「ばき……い!!」

「ぐふっ?!」

リンを抑えていた男が浮いた。

「

骨が折れる音や血が飛び散る音がした。リンが、あの泣き虫のリンが山賊たちを次々と薙ぎ払っていく。クリスは自分を抑えている男の足を狙って思いつきり踏んだ。

「つつ!このガキ!」

「リン」

男から逃げてリンに駆け寄る。リンの目はどこか虚ろであった。

「リン」

もう一度、声をかける。

「……リン!」

今度はクリスも腹が立ってリンのお腹を思いつきり殴った。

「ゴス・お腹を殴ったわりには鈍い音がした。」

「うぐ、……ううう痛いよう」

「あ、良かった。いつものリンちゃんね」

クリスの中でのリンは、リン=泣き虫なのである。(横暴)

「大丈夫大丈夫、思いつきりやったけど、リンちゃん酪農で鍛えてるでしょう?」

でも遠慮なく、決るように殴りました。

「くそ、この……悪魔め!」

そう吐き捨てると山賊は逃げ去っていった。

「どつちがよ!」

クリスは山で採ってきた栗を男達を目がけて投げた。何人かに当たったのを見てクリスは満足げに微笑んだ。どちらかというところのほうが悪魔。

「リンは、ヤツパリ悪魔なんだ……」
「そんなことな……」『そうだ』！」
もうすぐ夕闇に沈む世界を二つの光が明るく照らした。

『我らは、人々を見守る神です』

「……………」

二人はポツカーンと口をあけた。

『そしてお前達の親でもある』

クリスは話しかけてくる神様に向かって栗を投げた。むいでないやつのほう

『ちよ！痛い！痛いんですけど！？栗投げるな！しかも喜ぶな！！』
「くら』

「きゃ、きゃ」

嬉々として投げるクリスを横で止めるリン。

『お前達を天国へ招待しましょう』

「だが断る」

栗を投げられてないほうの神様がさういってクリスはハツキリと断った。

『何故だ！』

「条件があるわ」

『条件？そちらは育ての親をも殺され家畜も殺され畑も家も全てなくしている、生きていく術などないというのに、条件だと？』

『……………聞いてみましょう。言って御覧なさい』

クリスは亡くなっている両親を指差した。

『二人は天国に居るぞ、会いたいのか？』

「会いたいわ、でも私の条件はそんなんじゃないの。今度二人が転生するときには、この上のない幸福を与えて欲しいの」

『……………やはり、お前は賢いですねクリス。しかし我々に人間の人生

を左右する能力は持っていないのです』

「じゃあイヤ」

『でも』

クリスはそっぽ向いた顔を持ち上げた。

『あなた方ならできません。いずれ必ず、しかし人間界に居れば、それは永久に不可能でしょう』

「……リンたちならできるって？どうゆうこと？」

『来れば分かる。来れば、な』

二人は顔を見合わせ、手を繋いだ。

「行くわ」

「リンも、クリスについてく」

二人の神は光をより強くはなった。

『では、あなた方を歓迎します……』

『説明は来てからだ』

二人は新しい世界に足を踏み入れたのであり、結果それが二人の力を知ることができる、ほんの一步に過ぎないことを、二人はまだ知らない。そして、知る由もなかったのであった……。

あれから何年の月日が流れたのだろうか、天界の空気にも慣れ、そこでの暮らしにも順応したクリスは出会った神たちに『天使』の称号を与えられ、天使の通う学校に行っていた。

学校でのクリスの成績は優秀で、教師（もちろん天使）からも一目置かれていた。

「クリスさん」

「はい先生」

クリスは常に外面は良いし、いい笑顔で返事する、だから内心「いまから遊びに行こうとしたんですけど」っと思っただけ。口にも態度にもしない、それがクリスクオリティー

「実は近々大神様がおいでになるの」

「視察ですか」

「それで、上でもクリスさんの知名度は知られていて、ぜひお会いしたいんですって」

メンドクサイと思いつつクリスは微笑んだ。

教師に媚を売っておいて損な事はない。

「私に会いたいだなんて、光栄ですわ。ええ勿論私でよければ」

とか言いつつやっぱりメンドクサイなと思っていた。

と

「大神つてなに？」

「きゃあああああああああああ！悪魔あ！汚らわしい！天使領域に入ってくるなとあちらの悪魔に教わらなかったの！？」

「先生落ち着いてください！リンちゃんおいで」

天界より参上したクリスとリンは神にそれぞれ『天使』と『悪魔』の称号を渡されその領域に分けられたわけであるが、どうしたことからリンは悪魔領域になれずに隙があれば天使領域に入りクリスに会っていた。

ちなみに天使は悪魔が大嫌いらしい、逆も然り。

「なんでリンちゃんこっちにこれるの」

「あの悪魔のババアやなんだもん」

「イヤイヤ、そうじゃなくってね」

悪魔領域から天使領域の境目には二人の男女の神が強い結界を用いて、お互い通れないようにしているはずだが、リンはなぜかほぼ毎回来ることができていた。

本当は来ちゃいけないのだけれど

「なークリス？」

「何」

リンはクリスに連れられて公園のベンチに座った。そしてクリスの作った甘いお菓子を食べながらリンはクリスにさっきと同じ事を聞いた。

「大神ってなんだ」

「神様より上位ってことよ」

リンが口からお菓子を落とした。

「神様より上が居るのか」

「授業で習わなかった？」

知らないというリンは言い切った。それもそうだ、いつも悪魔学校では逃げ回っているのだから、そもそも真面目に授業なんて受けたことすらない。

クリス溜息ついた。

「ちなみにね最高位は『大神おおがみてんまし天魔師』様、その次が『大天師だいてんし』様と

『大魔師だいまし』様、二つあるのは聖君と魔君ね」

「？」

「光と闇に分かれてるって事、悪魔と天使のお偉いさんって考えたら分かる？」

ちっとも理解していないようなのでクリスはこの説明を止めることにした。

馬鹿に何を言ったって無駄と言うことは今までの経験上分かって

いるからだ。そんな労働力の無駄なことはしない。

「次が大神でその最期が『神』今の私達の親だとか言ってる人たちね」

「その言い方酷いな」

白く仙人のような姿をした男が美しく似たような服を着た女性と歩いていた。

ちなみに男はクリスが栗を投げた相手だ。

「ねえ、なんで大神がクリスに会うんだ？」

「それはね、私達が本当の親ではないからですよ」

「知ってる」

ええって驚いたリンに対し、クリスは冷静に返した。

「じゃあ大神様の子どもって事？」

「さあ？我らが頼まれたのは、あなた方を人界から回収及び天界の空気に慣れさせるといりハビリ係りに過ぎないのです」

「ようするに、詳しいことは聞いてないって事だ」

「それにねリンちゃん」

クリスはリンに微笑みかけた。

「この秀麗なクリスちゃんがこんな下級天使の身分で収まるわけ無いでしょ」

「……」

あっはっはと笑うクリス。リンはクリスのくれた空になったお菓子袋の袋を逆さにしていた。

二人の神は苦笑いで二人を撫でた。

今はまだ、流されるだけの少女で居て欲しいと言うのが二神の望みであった。

上(後書き)

神様の強さもピラミット式

「彼女らがあの噂の」

「といますと？」

神は大神と天上界にある神殿でのんびり会話していた。

「噂によればあの二人、私達『大神』よりも上らしい」

「なんと」

「それでは」

大神二人は二人の若い神に羽のような手紙を取り出し見せた。それは『大神天魔師』からの勅命であった。

クリスとリン、何があっても守るように。

「彼女らはまだこの世界を拒絶しておるらしいのじゃ」

「故に彼女らを殺し、力を奪おうと考える不埒者も最上界におるらしい」

「では」

神二人は首を振った。

「我らの役目はもう終わりですね」

「あとは私達にお任せください。私達ももう齢老いました、コレが恐らく最期の仕事になりましょう」

「大神様なら、我らも安心です。どうかお願いいたします」

年老いた大神は笑顔で頷いた。クリスたちを狙うものは少なくとも神以上の力を持つ、もう二人の若い神が二人を隠し守りきることはできないのである。

「一つ聞いてもよろしいですか？」

「ドウゾ」

「あの子達の、親はもしかや大神天魔師様ですか？」

木々が揺れた。

「誰かそこに居るのか」

男神がそういうとボト、天界虫が木から落ちた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ココの天界虫は大きいすなあ」

「ええ、本当に」

虫談話がはじまり、その隙にリンは木からこつそり飛び降り忍者のように素早く走りその場から離れた。あの木に天界虫がいてよかつたとおもいながら。

「あらリンちゃん、そんなに急いでどうしたの」

走っていくリンに足をかけてこけらせたクリスは笑顔で聞いた。

「あちち！お、クリス」

しかしリンも気にしない。

「大変だ、俺たち……」

「クリス、リン」

「うお！？」

突如現れた大神にビックリするリンはシェーのポーズで固まった。
(へえ、大神クラスになれば、移動も翼をださずに一瞬で移動できるのね……)

クリスは笑顔で会釈をした。

「大神様が何か御用でしょうか」

「うむ」

老いた神は温和な空気をまとって微笑んだ。

「もう一回あがるうか」

「はい」

「はい……つてええええ！？」

クリスは既にこの結果なることを予測していたのであった。

なので、あっさりとした答えをしたクリスに驚いたリンは金魚のように口をパクパクしたあと、苦笑いを作ったのである。

リンは一生クリスには敵わないだろうなと思ったからということ

でもある。

神様の上、大神様のところでは、学校という制度は無く、師を自ら探し、術式や魔方陣、武術鍛錬を学ぶのであった。

無論、彼女らは師を探す必要は無いのだから楽なものである。大神様のところでは、まず翼を自由にコントロールすることを学んだ。ここでも悪魔と天使は別れて暮らしていたが、大神様はクリスとリンを常に二人一緒に暮らしていた。

「精霊よ、我名を讃えよ」

そしてこの界ではパートナーに精霊がついた。

精霊族界からやってきた精霊とともに精神ともども鍛えるという方針らしいが……

「クリスーあそびましょう」

「くりすーお菓子作って」

「クリス〜西山に綺麗な花が咲いてるのを見つけたの〜」
気まぐれで幼稚な精霊は中々言うことを聞かない。それどころか勉強の邪魔をするのである。

クリスはそんな妖精に厳しく当たらず、やんわりと諭した。

「コレが終わったら遊びに行きましょう。そうしたらミンナにクッキー焼いてあげるわ」

「わーい」

ち・な・み・に

「うわああ、リンだー逃げろー」

クリスの傍に居た妖精が一気に消え去っていった。

リンは妖精にも嫌われていた。

「リン、何処行つてたの？」

「みんなに度胸比べだっっていわれて刻老山にいった」

「あああの長時間居たら老人になっってしまうといわれる？」

「ならなかったぜ」

しかし服は劣化していた。

(リンを見るに、私達そうとうの力を持っているんじゃないかしら)
クリスはそう考えた。

力があればあるほど自分の見た目も容易に変えることも、別の時空に翼を使わずに一瞬でいくことも可能だ。そして、多少の呪いなら跳ね返すこともできる。

「ねえリンちゃん、何か憑かれてない？」

「別に？」

リンは精霊によく呪まじわれている、しかし最近では全く気にしていないようだ。

昔はあんなに泣き虫だったのに今ではズボラ。

「環境つてだいじなのね」

「ん？」

「今日のおやつはバナナでいい？」

「嫌だよ」

クリスはそういいながらリンにかけられた弱い呪いを抜った。

「で、リン？あんな悪魔に喧嘩売られて百倍返しにしたんだって？」

「ああ、問題ないぜ」

「何が問題ないのか十一文字以内で答えてもらいたいものね」

「売られたから買ったんだ」

本当に十一文字で答えたリンにクリスは溜息ついた。

「だから、言ってるじゃない、今度から喧嘩売られたときには範囲指定して結界張らなきゃ。また大神様にばれてやんわりと亀の上で正座させられるわよ」

「慣れた」

「どんだけ怒られてんのよ」

チヨップだけじゃ痛くないからクリスは持っていたお菓子百選辞書の角をリンの頭にぶつけた。

ぶしゅー

血の噴水が吹く。

「あーらら」

「いやいやお前がやったから」

「治せばいいんでしょ、治れ」

クリスから淡い水色の光が出るとリンの傷は跡形も無く治った。

「今度からお金取るから」

「今回はお前が悪いのに!？」

「劣化した服も直してあげたでしょう」

「横暴!!」

クリスは微笑んだ。

「あのねえ、世の中甘くないのよ?」

「……」

世のシビアさを学んだリンであった。

中（後書き）

神の身分も強さも上になればなるほど強く賢く恐れられる。
下の者にとって不利な制度も多々ある。

下

「ん？」

それは、突然の出来事であった。

どだだだだだ！！！ずざあああ……（滑り込み）

「リンー！！」

バン！

部屋でお昼寝しているとクリスが勢い良く扉を蹴破った。

「ふんが！？」

よだれと寝癖をつけたリンが飛び起きた。

「リン、アンタなんか魔法使った？」

勢い良く来た割にはクリスは冷静にリンを正座させて聞いた。

「魔法？」

ちなみに学校をまともに行かないリンは魔力を練るのもへたくそなので呪文魔法など、小さい精霊が簡単にやってのけることができることもできないのである。

腕っ節だけ強くなっている。

「しらねー」

「そう」

リンは嘘をつかない（馬鹿だから）、だとすると

「あの男は『誰』^{なん}だったのかしら」

「は？男？」

そう、いま巷で騒がれているのは男のリンが現れたと言うことだ。

「リンちゃんが男になったのかと思ったわ」

「なんで？」

「だって、今のままでもじゅーぶん男の子っぽいじゃない！」

「いいきったな」

「それに」

クリスはリンの部屋から出る。

「神様ってそもそも性別無いじゃない」

だから男にも女にもなれる。でもたいていの神様は豊穣の意味をこめて女の神が多い……。

「はぁー男ねえ」

叩き起こされたリンは伸ばすだけ伸ばしたぼさぼさの髪を梳く櫛をさがしながら考える。櫛ではなく鏡を見つける。

「……俺の？」

『今のままでもじゅーぶん男の子っぽいじゃない！』

「……男……？俺が、女、男……ふうーん」

どうでもよくなったリンは櫛を見つけて長い紫色の髪を梳く。

「ま、いいっか」

彼女は悩まない。めんどくさいから

そしてリンが外に出たとたん、ある男と眼が合った。

「え」

「な！」

こっちより、向こうのほうに驚いている。

いやあ、驚いたな……

「本当に俺そっくり」

「も、もう一人の……ボク？」

しかし、そっくりさんはリンより気が弱そうであった。

(もっと早くリンちゃんに会ってたら双子みたいだったのにな)

なんてのん気に考えるクリス。

そして、二人を見比べて一瞬で分かった。

「リンちゃん、その男……リウさんって言ってね。コレは推測だけどその人」

リウって言う男も首をかしげた。

「リンちゃんの一部ね」

ん？一部？誰の？

リンはなよなよした男、リウを見てスッと指を立てた。

「？」

ばっちーん！！

「！！！！」

強力なデコピンを男に喰らわせた。

びゅーん！飛んでいった・・・。

理由はない、ただなんとなく軽く攻撃しただけだ。思ったよりも相手はかなり弱かった。

「？」

リンは不思議そうに首をかしげた。

「で？アレ誰なんだ？」

結論に戻る。精霊の一人が大神様を連れてきた。その場に居たクリス&リン以外はひざまずいた。大神様はぶっ飛んで涙目になっているリウをみてリンを見た。リンは目があったついでに聞いた。

「あれは俺なのか？」

「ええ、正しくはあれはリンの魔力の一部」

「俺の？」

神様は時に己の一部を産み落とすらしい。そして産み落とされたそれは自我を持ち新たな生き物として生きることがあるらしい。

が、しかし

ごくたまに彼の^{リウ}のように一部が自分でオリジナルのところに戻ってくる場合がある。

「へー、で俺はどうしたらいいんだ？」

「アナタ次第ですよ」

生かすも殺すもオリジナル次第リウはよろよろしながら手を振った。

「ボクは、その……あの、なんとなくこの地に来てしまっただけでそんなオリジナルに何かしようとか考えてません」

「だから？」

「つまり、殺さないでって事だっさ」

クリスの補足にうんうんと首を縦にふり肯定を全力で示すリウ。

それを見てリンはうーんと悩んだ挙句

「やだ」

手のひらをかざしリウにかかる重力を自分のほづにコントロールし、傍に寄せた。

「な、なにを!？」

「回収」

ぱっしゅん!空気の裂ける音とリウの悲鳴にならないような声が一瞬だけ聞こえた。

「……ひ」

妖精たちが恐怖で小さくなり、逃げ出した。

「外道だ〜!！」

他の天使たちも罵りながらリンと距離をおいた。

「……」

リンは自分の手のひらを眺めた後、口元をゆがめた。
か!!

黒い光がリンの手から放たれ、山一つ消し去った。

「!」

大神が目を見開いた。

(信じられん、聖山を一個丸まる消し去るとは)

「っもーリンちゃんの馬鹿!あの山ではいい山菜が取れるんだから、消さないで」

「いで」

ぽこつとクリスはリンの頭を殴った後指をパチンつと鳴らした。

ふっ!

さっきまで無かった山が全くの元どうりになった。

「!?!?!??」

大神は目を睜った。
もつと驚いた。

「……ほっほっほ！」

そして笑った。

これはこれは、いやはや困った困った。

「二人とも、ウぬらは私達が思うよりも、強く育ちすぎたようじゃ
の」

クリスとリンは同時にクエスチョンマークを頭に浮かべ同時に小
首をかしげた。「上に、上がってもらうかの」

また、あがるらしい。

二人はうんざりした顔を見せたが、黙って頷いた。次は安定する
といいな。。。

別れ

「大天師様と大魔師様？」

クリスが首を傾げながら聞くと二人は微笑んだ。

「そうそう」

「うわ、これ以上に無い紫髪の似合う女」

リンの頭をわしわし撫でながら姉御肌の女性が良い笑顔で言った。属性で言うなら悪魔らしいけど、なんとというかどちらかというところ、明るいタイプだ。

「なんなんだよ」

リンがわしやわしやしている手を払いのけた。

「おお、反抗期か？」

「いや、誰でもいやだろ」

大魔師の名を、『ルルー』といい、大天師の名を、『ララー』といった。二人は相反する眷属だと言ったのに

ビックリするぐらい仲が本当に良かった。

故に、基本人見知りをするクリスとリンも、表面だけではなく、次第に心の底から打ち解けていったのであった。

「おい、クリス・リンおいで」

「なに？ルルー」

ララーが杖を片手に何か力を溜め込んでいた。光が大地から発せられ杖に凝縮される。

「さあ、行きましょう！！」

行先も言わず何かを発動した。

光が一瞬にして大きく輝き、消え去ったときには四人は見知らぬ土地に居た。

「ココ何処？」

「ココはアメリカだな」

「そうね、アメリカね」

「アメリカってー……」

クリスが二人のお気楽な神様をみた。

「人界だ」

人がクリスたちがもといたときよりも、遙かに時は進んでおり、建物も木でだけでなく、コンクリートでできたものや、馬車ではなく、車に変わっていた。

「学校では聞いていたけど、やはり人界は私達の居る空間とは時間の流れが違うわね」

「壊したら面白そうだ」

「リン」

「嘘だよ」

地に降りると同時に、二人の神の服がドレスからこの土地の人たちが着ている服と同じ服に変わった。クリスとリンもソレにならう。

「くんくん」

リンが犬のように鼻を鳴らす。

「いい匂い」

公園にあるお店の目の前でリンはよだれをたらしてソレを眺めていた。

「リンちゃんヤメイ！」

頭を叩く。

「おやお嬢さんたち、元気だねえ。よかったらお一つドウゾ」

若い夫婦のやっている店だったらしく、二人は同意と善良でホッとドックを二つクリスとリンにあげた。二人はとても良い笑顔になった。

「ありがとう！」

「すみません、お金払います。いくらですか？」

ララーが財布を片手にお店の人に聞けば、お店の人は微笑んで手を振った。

「いいえ御代なんて、こんな素敵な笑顔で食べてもらえるのなら儲けものです」

ルルーとララーも微笑んでお店の人にお礼を言った。

「で、なんで連れてきてくれたの？」

クリスは買ってもらったアイス片手に二人に聞いた。

「うん？いや意味ないけど」

「は」

ララーは魔法で作り出した扇子で自分を仰ぎながら笑った。

「いや、将来大出世するお二人とこうしてデートしたら、永い時の中での自慢話の一つになるうかとおもってね」

「話題づくりのために連れてきたの？」

「ふふ」

ララーはルルーと見合って笑った。

「帰ろうよ」

「うん」

クリスとリンは手を繋いで自分の家である神殿へと帰っていった。

「ねーリン気がついた？」

「気がついた。最初に」

二人は笑顔でお互いの顔を見合った。

「じいちゃんも、ばあちゃんも幸せそうだったな」

「うん、相変わらずさえない人生送ってるみたいだけどね」

因果応報

また、会えますように……。。

別れ（後書き）

正直彼女たちは自分たちが上がった理由を忘れていきます。

「え？マスコット？」

「うん、違う相棒ね」
パートナー

クリスの作ったロールケーキを口に入れながらリンはララーのほうを見上げた。

「私達ぐらいの身分から、まあマスコットというよりは式という使い魔を得ることができるようだよ」

「そうなんだ」

ルルーが白い鍵を取り出した。

「なにそれ？」

クリスが不思議そうにルルーに聞くとルルーは鍵をクルクル指で回しながら微笑んだ。

「へっへっへー、幻獣げんじゅう隠ういんの次元に行くための世界さ」

「次元を飛ぶの？」

「当たり前だろう！じゃなきゃいい奴見つからないって！」

「でもねー手続きはめんどくさいのよ？上に許可貰わなきゃいけないし、あんまり高度な使い魔だと言っこと聞かないしねー」

「でも取りに行くの？」

「うん」

ルルーとララーは二人で同時に頷いた。

「じゃあいこうー！」

「おうー！」

クリスとリンは張り切っている二人を無視してお茶会を続けるのであった。

。。。。

「で、次元を越えてやってきたけど、人間しか居ないじゃん」

「そう見えるか？」

「あ」

一見良く見慣れる大都會の風景だけど、良く見れば人間のどこかには何かが余計についていた。ついていない人も居るけど・

「猫耳」

「尻尾」

「キーワードだけ言うな、怪しいから」

そしてその人たちはミンナごく普通の日常を送っていたが、クリス&リンを見つけると

ぱたん

家の中に引き籠った。

「わーすばらし大歓迎だねー（棒読み）」

「へー超フレンドリーだねー（棒読み）」

がっかりする二人に比べルルとララーはあっはっはと豪快に笑った。

「そりゃ好き好んで人の下につきたい奴は居ないだろうさ！」

「確かに、じゃあどうすんだ？」

「こうする」

びーむ

どっかーん。家一軒丸々破壊

「わー豪快ー」

過ぎるよ、そりゃあみんな隠れますわな

「来たぞ」

「なにが？」

棍棒を片手に腕をならしながら飛んできたのは鎧の武装集団。

「あれらは龍属だから、ドンドン交渉していけー」

「じゃあ各自集めましょうねー！」

ルルーとララーはそういう治安部隊と思われる群れに突っ込んで
いった。

アレは交渉じゃなくて奇襲です。

「どうするよ？」

「ま、期待せずに探してみましよう。居たらいたで役に立つし
二人も行くことにしたのであった。」

上(後書き)

神最強伝説

クリスはある聖域の森の中で鼻歌交じりに歌を歌っていた。その手にはキッチン道具があり、魔法で出した材料類でお菓子を作っていた。

「美味しいお菓子ができるとかな？できたー」

ぼん！と魔法でテーブルとチェアを出すとお菓子を並べていった。「紅茶もぼん」

魔法で一通りの物を用意するとニコ！と天使の微笑みを向けた。「隠れてないでおいでよ、沢山あるよ？」

がささ！森の中から精霊類の獣や翼の生えた人間に近いものなど表れ、テーブルに着いた。

クリスは微笑んだ。

……餌付け作戦第一回目 成功

「さーたつくさんたべてねー」
ちよろいぜ。

……その頃リンは
「……うーん」

とある荒れた砂漠にて唸った。

ココまで来て無数のモンスターに襲われたまでは良かった、でも「弱いなー」

LV100でもLV999でない限り、リンには手ごたえが無い、そもそも彼女の武力に関しては右に出るものは誰も居ないだろう。

「犬系、犬系が欲しいなー」

そう呟くりんに他のモンスターは「じゃあくるなよ」と思った。

ココらへんは【サハラエリア】で土属・虫属しかいない場所。獣がほしいなら森がそこらへんに行かなければいくらこのエリアを回ったって、居るわけが無い。

が

「もう一周するかなー」

リンは馬鹿だから気がつかないのであった。。。

「……………」

帰って欲しい一同であった。

そしてルルーとララーは難しい顔をして二人背中を合わせていた。

「困ったなあララー」

「そうねルルー」

二人は絶対絶命のピンチを迎えていた。

「貴様ら神属が、我らを下僕家畜として扱い始めて幾億年……我ら幻獣族は数が年々減ってきた」

「そういえば上でも問題視されてたよね、なんだっけ？キメラ合成法の解禁だっけ？」

「そうそう、合成すればするほど強くなるから、今めっちゃはやっている」

そして今までの怒りが爆発したと。

「こりゃあたしらの相方召喚しても無駄ね」

「あとで縛る必要があるわな」

二人も魔力を最大限までに放出する。

「貴様ら神属！追い出してくれる！」

「じゃあコッチは支配してやる！！」

魔力と魔力がぶつかる。

「！！！！」

クリスとリンは別々のところにいたが、同時に反応した。

「……あっちか」

クリスは魔法でその場を時空移動の魔法で移動した。
そしてリンは

「あっちか……どうやっていこう」

リンは実は、方向音痴であった。

しゅ！

クリスは魔法を使い一瞬でルルララのところについた。当たり前だが、二人はズタボロで肩で息をしていた。

「ああ、クリス！いいところに」

「え？」

クリスは嫌な予感がして身構えた。

「「後は任せた」」

二人の周りが彗星のような光が飛んだ。つまり、二人はクリスを身代わりに逃げた。

「……って、まさかのログアウト……!？」

そんなバナナー！古い？

攻めてくる自衛隊から距離を置き、クリアな結界を張り守りに徹することにした。クリスは魔法をベースに戦うのだけど、最近ちょっとぴり攻撃魔法の練習さぼり気味なお年頃

「結界の強度には自信があるからいいけど、どうせなら魔法でどっかーんってぶっ飛ばしたかったなあ〜ふう」

風に飛ぶちりのようにやられる敵の図をやりたかった・

(帰ったら練習しよつと)

まあ、そんなことより

魔力をチャージして一気に相手にぶつけてもいいけど、そんなの
疲れるし何よりメンドクサイ。魔力はいつでも温存しときたいもん
だしね

「死ね!!」

かんかんに怒っている人たちに向けて使い魔を使うってのは・
酷いかしら?

・・となると

「うーん、気から察するにまだまだ遠い所か、まーったく何処行っ
てるのかしらりんちゃん」

クリスは結界を支えている手じゃないほうを持ち上げた。

「出でよ、リン」

指をパチンつと鳴らした。

「うお」

クリスの結界外にリンはオチた。

「むう、新しい仲間を呼んだのか!」

「貴様も死ね!」

敵がリンに無数もの槍を投げつけた。

・・が

「ん?」

リンは攻撃的な魔力を一瞬だけ解放した。槍が四方八方に飛んで
いく。

「な!」

敵がたじろむ。

「もー馬鹿!来るの遅いどころかこのクリスちゃんの手を煩わせる
つて何!」

軽い魔法でリンの頭上にたらいを落とす。

「ごあいん!」いで!」

普通に当たった。

「いってえ！いって！？っていうかクリスは何様だ！」

「クリス様よ」

リンは聞こえないふりをして沢山いる敵を見回した。

「こいつらは？」

「ルルララが怒らせるだけ怒らせて逃げやがったの」

「へー」

クリスは結界を消し、空中から大地に降り立った。

「やることわかってるわよね？リン」

「もっちのろん」

二人の魔力が増幅する。

この二人の最も得意とする戦闘隊形はダブルアタック。

「打撃・魔法どちらで殺られたい？」

二人の女が笑った。

中（後書き）

今のところクリスとリンの姿は推定（人間年齢）12、13ぐらい。

下

町の一画全体すべて制覇を果たした二人

「昔の契約によると、戦って勝ったら幻獣界のものの自分の配下においていいんだってさ」

「ほー」

つまり自動的に二人の支配下となったわけだ、クリスとリンの成約の紋が魔物の身体に現れ消えた。契約はなされたようだ。悔しそうに唸る

「あー別に悔しがなくてもいいって、俺どうせ使い魔とか使わないだろうし」

リンがそういうと逆に悔しそう泣き出した。

(めんどっちな)

「別に解約してあげてもいいわよ」

「クリス？」

あの使える物はもつとけ方針のクリスがあっさりそう言った。クリスに考えがあるのは分かるが、何を考えているのかはさっぱり分からないリン

頭いっばいにクエスチョンマークを浮かべる。

「ど、同情など」

「そんな、全く同情なんかじゃないって」

クリスは横に手を振りながら契約解消の紋を浮かべた。

「ふーん？クリスがするなら俺も」

リンも紋を浮かべた。

そしてまた新たに仲間を捕獲するべく歩いていく。リンはクリスの横で歩いた。

「なんで解約したんだ？しかも全部」

「何でだと思っ？」

質問返しされてリンは黙った。心の中で分かるわけがないと考えていた。

「ヒント、場所よ」

「・・・ますます分からん」

下級町から貴族町に移動する。

町並みも下よりも落ち着いていた。

「てか俺ら帰りどうするよー？ルルモララも帰っちゃったんだろう」

「ログアウトね」

「え？」

「大丈夫よー回来たところなら私もう座標わかったから。いつでも移動できるわよ」

「お前って天才だよー」

わー、と走り回る子ども達。

どうやらこの町は人に対し余裕の態度を示していた。

「さて、やりますか」

笑顔でクリスは歩いていった。

「お？置いていかれた」

リンはあまり困ってない口調で言った。仕方ないのでリンも歩いて探す。クリスよりもあまり仲間探しに乗り気でないリンはダラダラと町を探索した。

「ん？」

この世界でもあるらしい、いじめ

一人の少女を囲んでみんなで暴行を繰り返していた。

人間界と違うのはその苛め方が身体を使ったものじゃなく時折気孔弾みたいなん放ったりするもんだから、リンは物珍しく眺めてしまった。

故に

「何だお前」

「人間が何かようかよ」

リンはふと思った。自分は神の地位に一応いるらしいが、果たして人間なのだろうか。でも人型は全部人間と呼ぶって誰か言ってた気がするからまあいつか。

「無視かよ！」

口から炎のボールを吐き出してリンに攻撃を仕掛けたが、リンは片手で跳ね返した。

ちなみにはぼ無意識に。

「う、うわあああ！人間じゃないー」

逃げていった魔物の子たちを見ながらリンは思った。

あれ？人間と人型って別物？てか神扱いなし？

「はあー」

頭をぽりぽりとかく。

(まあいつか)

歩いていこうとすると、誰かが抱きついてきたのでリンは倒れた。その拍子に頭を打つ

「あの、ワタクシのご主人様になってくださいませんか！」

「はああ？」

見れば先ほど苛められていた女の子であった。水色の長い髪っただけで特にオプションのついているようには見えない。ぶっちゃけ弱そうだ。

「……」

つい今しがたできたばかりのタンコブを撫でる。

「駄目ですか？そうですよ、ごめんなさい」

ずいぶんと諦めるの早いなこの子。雑魚なのか？

「んーまあいつか？俺はリンお前は？」

少女の顔が明るくなった。

「名前は貴女がお決めください」

「えー」

リンは少女の顔を見た。期待に瞳を輝かせている。俺ネーミングセンスないんだけどな・・・。

「じゃ、とりあえず人型モードといてくれる？」

「はい！」

少女の姿が変わり、まだ幼い幸せの青い鳥が姿を現した。孔雀のように尻尾がいよゝうに長い

リンは頭を捻った。

「あー（めんどくせえ）鳥だからバードでいいや」

鳥、改めバードにリンの契約の紋が表れる。

「あら、リンちゃんも契約すんだ？」

「お、クリス？」

の横には狐やら犬やら良く分からないけど、まだ幼いが確実に強くなるだろうなあっていう感じの仲間がいた。

「・・・」

「何？もう帰るけど？」

リンは小さく溜息ついた。

俺が欲しいもの、クリスが持ってたなあ

ぱたぱた隣で健気に飛んでついて来る仲間には言えないけどね。クリスの移動魔法に身をゆだねながらリンは思ったのであった

別れ

「ララー」

「何？ルルー」

「あの二人に注意だしとけー今、『見透かし新聞』で一面を飾っているんだけどさ」
・・・。

深い山奥でマイナスイオンが魔力によって出された風によって吹き飛ばされていた。

「え？何？なんつていった？」

魔力チャージ最短記録を練習しているクリスには、遠くで何か叫んでいるララーの声が聞こえない。急ぎのようなのでクリスは仕方なく今までチャージしていた魔力を回収した。

くだらないことだったら実験生物にしてくれる・・・。

「なんなのよ」

「一瞬殺気を感じたけれど、まあいいわ」

クリスは魔法でベンチを出して座った。

「コレ読みなさい」

「『見透かし新聞』？ヤな名前」

クリスは大きくのせられた一面に目を通した。

「……『大神天魔師の御子息であり、天界一の極悪人のペジ氏長い囚人生活から解放』？」

ペジ？・・・タリアン？

「誰それ？」

「昔天界で大騒ぎになった大悪党でね？悪魔も天使も関係ない、使い魔も妖精も何もかも、あろう事か神殿まで破壊したのよ、彼のもつ魔力量は膨大なものなの」

「あらそー」

「……『あらそー』ってクリス怖いのよ？」

「あらそー」

だって、私には関係ないもん

「ねえクリス、リンは？あの子にも言わなければならぬんだけど」

「知らない、呼びましょうか？」

「ええ、頼むわ」

クリスは山々のほうを向いて

「リン」

と呼んだ。

「聞こえないでしょうよ」

「呼んだ？」

「来たし！？」

リンにも新聞読ませる。

「大神天魔師？じゃあこの息子っての強いつてことか？」

「そうね、そうなるわ。でも馬鹿そうよ」

「ふーん」

ずどどどおおおん！！

真つ黒の雷で大きいのが一つおちた。

「誰？」

クリスは結界を張りながら聞いた。

艶かしい服装に漂うお化粧の匂い、ショートな髪の毛から見える

その顔は……

「「厚化粧ババア！！！！？」」

「誰が婆あじゃあ！！！」

だってねえと二人は顔を合わせる。

「アク様」

ララーが頭を下げた。ブオツと風が舞うとルルーも現れ跪いてとある書簡を厚化粧女に渡した。

「うむ」

「何あれ？」

「さあ？」

「コレか？コレはねー」

アクがじゃーんと書簡を二人に見せた。

『任務全う書』

。。。。。

「まさか？」

「そうそのまさか」

二人はルルーとララーをみた。

「楽しかったわよ？」

「いつでも遊びに来い」

「どうやらいきなりお別れらしい。次は最高位 大神天魔師だ
。。。別にいいけど、もう少しフラグ立てようよ！」

最上天界は雲の上に住んでいた。大地が雲、雲が大地・リンは雲の下がどうなっているのかと気になり穴を掘り始めた。

「ココがアタシ『アク・マウジー』と『クスリ』が統治している国、『エデン』さ」

「へー、でも私ならもつといい感じに統治できるけど？」

クリスが自信満々に言うときアクはわらった。

「あんたらは継ぐことになるさ、なぜなら」

「うわああああああああ」

リンの悲鳴があがった。

「リン！？……馬鹿？」

雲を彫りすぎて落ちそうになっていた。っていうか、水じゃない犬神家？アクが魔法で持ち上げた。

「はぁー聞いてた以上に阿呆だな」

「俺尊になるぐらいアホなの！？」

リンはシヨックを受けたらしく「クリスー」とクリスに縋りよった。

「事実でしょう。」

「ガーン」

「で？アク、聞いていい？拒否権は無いけど」

「ほう？」

クリスはアクを真っ直ぐと見据えた。

「もういい加減移動は嫌なの。答えて私達の居場所はここなの？」

「さあ？居場所ってのは自分で作るもんさ」

「そういう格言的なこと聞いてないんだけど？」

「コオオオ、光の刃が光る。」

アクは冷や汗を拭う。

「あらあら、アクちゃんお迎えも満足にできないの？」

「クスリ」

金色の長い髪が大地につくつかつかないかのところまで伸びている。まるで女神、・・いや女神だけだ。

「愛と美と豊穣と感情を司る、光の巫女です」

「ちなみにあたしは闇の巫女だよ」

「うん、つつこみたいことは色々あるけど、今は一つにするわ。巫女ってなに？」

「まあまあ、話は神殿について、椅子に座ってからにしましょう」

リンのお腹もなる

「小腹も空いたしね？」

指をパチンつとならすと一瞬で神殿に移動した。

「あなた達は私達の子ということになるわ」

「なる？」

「ええ、知っていて？人界にもあるように私達にも孤児院と言うものがあるの、長い人生を生き抜く中で親の無い神はやさぐれて、とんでもない邪神になりやすいから」

「ふーん」

羽の生えた女官に運ばれてきた料理にリンは手を出した。

「孤児院にいる子ども達はみーんなどんな形しているか知っています？」

「いいえ」

「卵よ」

ゆで卵を丸呑みにしたリンが目丸くした。

「親が子を生んでも育てられない場合、保存カプセルとして卵に子どもを閉じ込めるの、保存カプセルに入れられた子どもはまず自分の力では孵られないわ」

「へー、それで天使って羽があるんだ」

「リンちゃん、羽は空を飛ぶためのオプションよ・・・で？」

クリスはクスリを見据えた。

「じゃあ私達は孤児院の卵から貴女らに回収されて産まれて、途中放棄されたってこと？」

「そうよ、少し違うけれど大体そう」

あっさりクスリは言った。

「でも放棄したわけじゃないわ、必要だからそうしたのよ」
「……………」

優雅に紅茶を飲みながらクスリは微笑んだ。

「貴女達はまだ若い、だから・今はまだ学びなさい」

有無を言わせぬ微笑にクリスは下克上するものの笑みを浮かべた。
「そうするわ」

リンとアクだけ、食事に夢中だった。

上(後書き)

あれー？クリスは天使なのにーすっかり小悪魔(！)

「クリス」

「リン。どこの学校に移動しても聖域にくるわね」

「だってさ暇なんだよ魔域の学校、戦っただけだぜ？」

「っていつても勉強嫌いなくせに」

リンはにかつと笑った。凶星らしい。ていうかどんな状況にあつてもリンはクリスから離れない。ここまできると最早リンはクリスの犬と化していた。

クリスは魔法で前回作っておいたお菓子をリンに恵んだ。

「おや、意地汚い子犬がまたやってきたのですか？」

「うげ、白蛇女」

「誰がですか！！」

「ヴァニラ・・・」

クリスがヴァニラという少女を止めた。

彼女はクリスと同じクラスメイトで上級貴族生まれ、見た目も淑女として申し分ない、白銀の髪をポニーにまとめていてすっきりした面持ちが見える。

リンは正直ヴァニラが怖い。一度怒らせて氷付けにされたからだ。

「雪女」

「何か言いましたかリンさん」

「いいや？」

怖い怖い

「リン、ヴァニラは前回上からの認定により『氷の巫女』になったから、ちなみに私は勿論『光の巫女』よ、やっとクスリが止めたの」「へー」

「リンまってえなあ〜」

「あ、ラゴウ」

クセツケの強い金色の髪の毛を揺らしながらラゴウという少女は

現れた。どちらかと言うとリンと同じ闇属性だ。

「あら、ラゴウさん」

「げ、ヴァニラ」

「どうして闇属性はヴァニラに会うと『げっ』っていいのかしら」

「しつこいんだもん」

「何ですって」

氷の粒子がヴァニラの周りにも出現する。

「ま、まあまあ」

「そういえばリンも『闇の巫女』になったんでしょう？ラゴウは『雷の巫女』よね」

「そうやでー」

ヴェニラはえ？って嫌そうな声を上げた。

「神聖な役を貴女に勤まるとも思えませんが」

「ワイもそう思う」

「おいおい、まあラゴウもヴァニラもいいじゃないの、私たちがムなんだから」

「この天界は雲の上だから四季が無い。その四季を作るために巫女が選ばれる・誰一人欠けてはならない、分かっていますよ」

不満げにヴァニラは言った。クリスは「ならいいの」と微笑んだ。

「何人いるんだっけ？」

「12人だっただけ？」

「覚えておきなさいなそれぐらい！」

「ごめんごめん」

四人は仲良く歩いていると、突如クリスの影から獣が現れた。

「！？」

「クグリ？」

クリスの使い魔が勝手に現れると言うことは

ジャキン！

四人は武器を構えた。敵が近くにいるということだろう。

「……………」

とくに怪しい気配は無い。

「クグリ・・・」

クリスはポツリと名を呼んだ。

「襲え」

クグリが飛んだ。

「うきやあああああゝ」

か弱い悲鳴が上がった。

「……!?!」

「まさか、お前は・・・!!」

・・・誰？

「痛い、痛いです・・・やめてクリスちゃん」

「だ、だれだ？クリスの知り合いか」

「知らない」

藍色のショートヘアを瞳の涙でぬらしながら弱げな、しかし悩ましげな肉体の女性は『お良しになって』ポーズをしていた。

「本当に、誰？」

「分からないのも、無理ないですわ」

クグリがクリスの横に戻ると、彼女は立ち上がりぽんぽんと服についた砂を払った。

「私は、魔界と地獄を支配する魔王の妻サウジーナといいます」

「・・・」

クリスとリンはお互いの顔を見て、首をふり、ヴェニラとラゴウをみた。もちろんラゴウは肩をすくめたが、秀才のヴェニラは自信なさげにポツリといった。

「アク・サウジーナ・インプ・ラー？」

「ええ、そうです」

「名前長いな」

「そうゆうものよ」

「っていうか、アク？・アク？・アク？アクって

「アクってアク・マウジー？」

「あの厚化粧おばさん？」

「アークちゃん見つけ〜！」

「クスリが出てきた。」

「びく！サウジーナの目が恐怖に染まった。」

「く、クスリちゃん」

「私の名前呼ばないでって言うてるでしょ サ・ウ・ジー・ナ！」

「クスリは片手からスゴイ大量の殺気のこもった魔力を放出させながら笑顔で彼女の名前を言った。アクの顔がひきつる。」

「ご、ごめんねクスリちゃん・・・」

「えい」

「攻撃魔法。どっかーん！アクが直撃した。」

「はらひれほら〜」

「目を回しているサウジーナの顔をクスリは平手ではたき、目を覚まさせる。」

「は」

「目を覚ましたサウジーナにクスリは不思議な色をしたコンパクトを見えた。」

「い、いや・・・嫌なのに・・・ああ」

「サウジーナはコンパクトを手に取り、スゴイ勢いで化粧を始めた。」

「・・・・・・・・・・」

「リンたちは黙って成り行きを見守る。なぜなら何処から突っ込めばいいか分からなかったから・・・」

「ふっかぁーっ！」

「もーアクちゃんったら、油断しすぎ〜」

「いやぁー寝てると思ったんだけどねー」

「クリスはハリセンをアクに投げつけた。」

「痛い!？」

「さっきのなんだったの？」

「ああ、サウジーナのことかい？」

それ以外に何がある。

「アレはねーこのからだの本体さ」

「へー、へ？」

リンは間抜けな声を上げた。

「本体？」

「あたしの本体はコレさ」

あの不思議な色をしたコンパクトを取り出した。

「あたしはコレに取り付いていた淫魔の精霊なのよ、もともと雑魚だったんだけど、サウジーナに隙があつて取り込んでやったら、こいつ強い魔力は持つてるのに意思が弱いからずっと居座つてやってんの」

笑顔でアクはそう語る。

クリスはクスリを見た。

「幼馴染じゃないの？クスリ力なら追い出せるでしょう？」

「楽勝よ」

勿論といわんばかりの返事。

「でも、サウジーナなんて嫌いだわ、いつもウジウジウジウジ・悪魔系ならアクちゃんぐらい行動的じゃないと、ねーアクちゃん？」
「ずっといたからアタシ自身ランク上がってるんだけど。さすがに化粧を流されると素にもどっちまうんだよ」

それでさっきすっぴん美人だったのか。

「なんだかサウジーナがかわいそうになつてきた四人。同情はするけど助ける気はない。」

「アクちゃんデート行こう」

「いいけどさ、何処行く？餡蜜屋？」

「ううん、囚人狩」

「「性悪!!!」」

コレではドッチが悪でドッチが聖か分からないなって思った四人であった。

下

「見つけたぜ・・くく、クククク！ハーハツハツハ！！」

エデンと呼ばれるそこには、二人の支配者が統治しており、それを象徴するかのように月と太陽が同時に存在していた。

「ん？」

「どうしたのリン？」

今日は魔学校と聖学校と合同で、校外授業を行っていた。地形などを利用した戦い方の授業だ。

「いや、なんか気配を感じた」

「そりゃーねえ」

クリスは扇子で顔を仰ぎながら言った。

「ここ、ジャングル区域だもんねー」

実習地に選ばれたのは『ジャングル』であった。

「ゲリラじゃあるまいし、ジャングルで戦うことなんてないってー

の

「わーい」

「ラゴウだけよねー喜んでるのって。見てリン、ヴァニラなんて」

汗ダラダラ滝のように流して目も虚ろ白雪のような肌が真っ青になっ
ていて、いまにも倒れそうな勢いである。二人は冷や汗をかいた。

「大丈夫？ヴェニラ・氷属性に火属性の土地はきついでしょ？」

「なんのこのしき、これしきで根を上げていては氷の巫女など務まり
りませんわ！」

素晴しき根性。

「でもヴァニラ、見苦しいわよ」

クリスの痛恨の一撃でヴァニラは沈黙した。ラゴウとリンは黙ってクリスを見た。

「・・・なによ」

「べつに」

もう駄目、と呟いているヴェニラをみてクリスは溜息を漏らした。
「仕方ないわねー。ホラ」

クリスが指をくるっと回したらヴァニラの顔色がよくなった。

「ヴァニラだけ、魔法で涼しくしといたわ、あと回復もね」

「さすがクリスさん、暑すぎず、寒すぎず、適温ですわ。このぐら
い調節できるのは素晴らしい」

「・・・ヴァニラの言い方って、どこか教師じみてるのよねー」

「そうでしょうか？」

ラゴウがニカツと笑った。

「っていうか、おばはんぼいんやなー」

「な、なんですって!!!!」

氷の矢が降り注ぐ、ラゴウは泣きながら逃げた。

「・・・バード！」

リンはバードを呼び出すと空に向けてバードは風を吹かせた。風
が刃に変わる。

キーン！

刃が跳ね返された。

「やっぱり、誰かいたわねリン」

「ああ、・・・誰だ？」

暗闇から現れたのは、ツンツン頭で背の低い男。

にやつと笑うと魔力を一気に放出した。他の人は魔力に気がつき
悲鳴をあげた。

「きゃあああ！極悪王子ペジ様だわあ！」

「逃げるー殺される!!!!」

みんな逃げていった。

クリスと、ラゴウ・ヴェニラを覗いては。

「ペジ？聞いたことあるなー」

「ああ、あれよリン、アクの息子で囚人だったって奴」

「なんかようつ？」

リンは恐れもせずペジを見て聞いた。

「ナンのようだと？」

ペジは魔力をリンに向けて思いっきり放った。周りにいた三人は素早く飛びのいた。

「リン！」

ラゴウがリンの名を呼ぶ。

煙が濛々たちこめる。

「俺がエデンのヤミを支配するに相応しい、後からやって来た貴様になんぞ、くれてやるものか！！」

「典型的なもんね」

クリスが呆れた声を出した。

「貴様を殺ったあと、アクも殺す！はーっはっはっは」

大笑いを始めたペジを三人は呆れた顔で見合った。

「アクって、どっちのアクなんだ？」

「！！??？」

けむりが風に完全に流れていく。

「馬鹿な！？」

「馬鹿なのはあんたよ」

クリスは魔法でペジを地面に叩き落とした。

「あんたとリンじゃあ差があるってことぐらいも分からないなんて、高が知れてるわ」

ペジは怒り狂った目でクリスを見た。

「おい」

リンはペジの頭を踏んだ。

「クリスはスカートなんだから下から見上げんな」

「大丈夫よ、中は真っ暗っていう魔法かけてるから見えないわ」

「どんな会話しているんです！はしたない」

クリスとリンはお互い顔を見合わせた。

「さあってと」

「どつする？」

「決まっています」

「反撃やな」

ペジ様ピンチ！

そしてフルボッコ

「で？」

リンは魔法で出したモアイの像の下に居る、ペジを見下した

「何しにきたって？」

「おのれ、糞がー！この俺様を何だと思ってるんだ！！王子だぞお

お！」

「はーオッサンがなに言ってるんだろうな」

リンは指を立てると空からもう一つモアイが落ちてきた。

「ぐは！」

クリスは飽きたらしく大きな欠伸を一つしてクグリを召喚した。

「帰る」

「おーい、まってくれよー」

「い・や。雑魚ばっか見ててもつまんない」

「ザ、雑魚だとお！魔界のプリンスであるこの俺を雑魚扱いだとお

お！」

「あー、もうっさい」

リンはもういっこ追加した。

「リンさん」

「何ヴァニラ」

「警察を呼んでおきましたから、モアイを消しなさい」

「あ、無理」

リンは手を振った。

「出しても消せない、消しても出せない」

「・・クリスさん、この方は何を言っているんでしょ^{アホ}うか」

「両極端なのよリンちゃんは」

クリスは指を鳴らして全部のモアイを消して、代わりに雷の檻を

作って縛った。

警察隊がやってきて連行する。

「ご協力に感謝します!」

警察の一人がそういって頭を下げて走って言った。

「さてと」

クリスは手のひらに魔力を集め、練り、ある場所に向けて攻撃した。

どっかーん

「うぎゃ!」

ほと、真つ黒焦げのアクが落ちてきた。そしてあとから愉快そうな顔をしたクスリが微笑みながら出現した。全く

「面白いことしてくれるじゃない?」

「あら?何のことかしら」

エデンを支配しているこの二人の目から、逃げられるはずが無いのだ。たかがアクの息子が

「残念だけど、私らの実力を量るにはあの男には荷が重かったよね」

「そうね」

「認めてんじゃねえか!」

「やはり貴女達は最強だわ」

リンの突込みを軽やかに無視。

「貴女達を、エデンの跡継ぎとして認めましょう」

「よかったな!」

わー

「すごいじゃないですかクリスさん、最上クラスのエデンの支配者だなんて、これ以上の光栄なことはありませんよ!」?

「リンすごいんやなー」

クリスの目が、きつらーんと光った。

「いらナイわ」

・え？

みんなの目が丸くなる。

「いらないうっていったの、他人が用意したもんなんて、くだらない」

「伝統って言うのよ」

「どうでもいい、私が欲しいのは私が制覇した世界だけ」

何様神様クリスマス様発言。

「じゃあどうするの？」

「私は私で、村でも作るわ」

「村?!」

目をもう一度丸くする。

「私の村、クリスマス村を作るの！行こ！リンちゃん」

「ん？うん」

内容の良く理解していないリンを連れてクリスマスは歩いていった。

ステップ1

「ええーつと・・・なんだ？うーんあれはコレの代理にして、コレは・あれでいいわ」

クリスは『世界の理』図鑑5/10を片手にいろんな粉やら固まりやら魔法やらを雲の上にかけていた。

クリスの地盤は雲にえらび、周りの空間は宇宙の空に置いた。

「この状態だと、神クラス以外は生きられないから」

雲の上に半円型の結界をはり、中を魔法や神気や神具など、いろんなものを入れていく。徐々に、しかし確実にそれはできてきた。

「できたー！！」

何も無い土地だが、ちゃんと大地で、澄み渡った空だけが、ちゃんと空気が澄み渡っている。クリスは満足げに微笑んだ。

「あら、初めてにしては上出来じゃない」

「クスリ・・・」

クリスは後ろを見た。扇子で顔を仰ぎ優雅に微笑むクスリはクリスの作った土地をみて賞賛した。

「もうこれで、貴女は誰も否定することのない、立派な神ね。貴女に称号を渡しましょう」

「称号？」

「ええ、『月の女神』の称号を渡しましょう」

クリス村に月が浮いた。クリスが月の象徴になったからだ。しゅっ、空気の切れる音がした。

「おお、クリス！できたのか！」

「あ、リン」

泥だらけのリンは片手に大きな骨を持っていた。

・・・何故？

「いいなーって思ってた土地にさ、でっかい魔物がいたから倒して

きた。おお、ここいいな。何を倒したんだ？」

「リンじゃあるまいし、倒してないわよ」

「おおー月が浮いてんなーすごー、あれも魔法か？」

「あれは違うわよ、魔法で出せても継続できないわよ、膨大な魔力使うもん」

クスリは村をみて

「これじゃ永遠に夜ねクリスマス」

と微笑んだ。分かってて称号渡しやがったな・・・。

「ふん、魔法で『朝』を作れば問題ないわ」

「おれんとこは・・・夜来ないんだけど・・・まあいつか」

「・・・よくない、よくない」

「とりあえず俺は俺の村ができた、俺の村の名をリンとつけよう」

「人のこといえないけど、まんまね」

「じゃー住民確保しに行こうぜ！」

「そうね、じゃクスリ、何人かのエデンに入るはずの魂貰うわよ」

「構わないわ、サウジーナの夫がなにかいいそうだけどね」

「サウジーナの夫は魔王、もしくは閻魔と呼ばれるもので、サウジーナを溺愛しているらしいが、雑で品のないアク・マウジーは嫌いらしく、本来アクの仕事と思われるものはすべて閻魔が勝手に行っている。アク的には願ったりだ。」

「そういえばさクスリ」

「何かしらリン」

「お前等ってできてるのか？」

クスリがハリセンでリンの頭を叩いた。

「いってー!!」

「リン」

「？」

クスリはニコツと微笑んだ。

「神様には性別なんて無いのよ?」

だから?

そう突っ込めなかったリンであった。

ステップ1（後書き）

そしてココからがクリスとリンの伝説のハジマリ・・・ます？

ステップ2

「現世は発展してるねー、パソコン・ケータイ・車・マンション・まあざっくり言うなら機械が」

「俺らには必要の全く無いものだな」

現代の服を着た二人は通行人の目を留めるのに十分だった。

「あとう、すみません」

「はい？」

クリスは呼び止められ振り向く、スーツを着た男性がクリスの営業スマイルをみて頬を赤く染めた。

「も、もしよろしければ、モデルとかに興味ありませんか？」

男は名刺を取り出しクリスに渡した。

「モデル・・・」

横からリンはクリスの手にある名刺を見て、投げ捨てた。

「ちよつと、君！人の名刺を！？」

「あの、ごめんなさい、そういうのに興味ないんで」

「そういわず・・・」

「おーい、彼女困ってんじゃーん？あつちいつてくれる？」

「ひ」

見るからに柄の悪そうなチャラチャラの茶髪パツキン男が何人か現れ、スカウトマンを追い払った。周りの人も若干離れた。

「ね、彼女大丈夫？」

「まあ」

「よかつたらさ、俺らといいトコいかねー？ま、お礼のかわりつつーの？」

「私、やることあるんで」

「そういわず」

男の一人がクリスの手を掴もうとしたが、その前に別の手が男を掴んだ。

てソレと入れ違いに警察がやってきた。

「君か、ここで騒いでいるって奴は」

「俺???だって」

「違うんです、おまわりさん」

何かいいそうになつたリンの足を踏んでクリスは前に出た。

「この人は私のために戦ってくれたんです。許してください」

うるうる、クリスの潤目に負けて警察は頬を染めたまま「次は気をつけるように」とだけ言つて歩いていった。

「目立つのも問題ね」

「そうだな」

涙目の二人は頷いた。そしてクリスは指を鳴らした。

「何したんだ?」

「自分を目立たなくしただけよ」

何事も無く歩き出した人間と一緒に二人も歩き出した。

「さ、住民を探しましょう。きっと私達なら分かるはずよ」

「なにが?」

「選ばれし者つてことね」

美しい金髪をなびかせながらクリスは妖艶に微笑んだ。

ステップ2（後書き）

必然は強制実行。

運命？なにそれ美味しいの？

ステップ3

「なあクリス、住民さがすつたつたつてさ、探したところで死ななきや上いけないじゃねーか」

「いけないことも無いわよ、私らが作った空間は、天国でも地獄でも現世でもない、全く新しい空間だもん。どんな奴でも私が許可したら生きれるわ」

「ほー」

いろんな車がある建物内で行ったり来たりしていた。リンはその建物を見てクリスを見た。

「じゃあなんで病院きたんだ」

生も死も取り扱っている場所、それは病院だ。

「あらリン悪魔のくせに知らないの？」

「？」

クリスは小さく笑った。

「ここには希望も絶望も、心の清らかなものもいる、絶好の良好な住民に会えるチャンスなのよ」

「へー、ん？」

リンの手には病院の位置を示された紙を渡された。

「・・・」

「ココよろしくね、リン」

「いや、俺は俺で」

「手伝ってくれたら、ケーキ焼いたげる、ホールプレゼント」

「しっかたねーなああ」

単純。クリスはにやりとわらった。

「まともなの選んでね」

「悪魔は人を見る目があるんだぜ！」

「頼りになるなる〜ってことで、じゃ」

「え？ココするんじゃないのクリス」

どこかに行こうとしたクリスの腕を掴む。

「私は異世界に飛ぶのよ、他のところを回るの」

「俺は居残りですか!？」

「そうよ？」

クリスは魔法で一瞬で消えた。リンは溜息を残して病院に入ってしまった。

ある世界にクリスは降り立った。

ざざーんざーん

「・・・海、どんな世界かな」

うおうおうおーなんだか変な歌声が聞こえる。

「？」

そちらのほうを向けば大きな海賊船が見えた。クリスはうるさい海賊船に降り立った。どうやら勝ち戦でもしたらしく黄金の宝を目の前に飲めや歌えやの大騒ぎをしていた。

「お？」

そのなかで忙しそうに走り回る少年がいた。赤髪のクセツケの汚い少年。

クリスは話しかけることにした。

「ねえ君」

「わ!？何もんだお前!海軍か!？」

「違う違う!私のことなんてどうでもいいからさ、あなたのこと教えてよ」

「俺のこと？」

「エース!!まだか!酒はあ!!」

「今いくつて!なんだか良く分からないけど、ココの連中に見つかる前に消えたほうがいい」

そう忠告を残して去っていった少年を見てクリスは微笑んだ。さ

つそく見つけた住民に歓喜しながら。

「おい、あれをみるお！」

他の海賊が指差したほうをクリスは覗くと、他の海賊船が見えた。恐らくココらへんを縄張りとしている船らしく、既に戦闘態勢を整えており、先制攻撃を仕掛けてきた。この海賊船は無防備に直撃した。

「弾だ！弾をつめる！」

「はい！」

「あ、ちよいとエース君」

「今いそがしんだよ！？」

「向こうの船、もう一つ後ろにあるけど？」

エースは後ろを向いて走り出した。

「かしらア！後ろ後ろお」

クリスは自分の位置を船から天空へと移動した。

エース君のいる船、負けたな・

前と後ろ両方から攻撃を喰らい、船は沈み始めた、にもかかわらず攻撃はいまだある。

「あーららあ」

向こうの海賊は殺戮と戦いのみに興味あるらしく、お宝に興味は無いようだ。

「あそこらへん船の残骸多そうね・」

死霊の怨念がクリスを不愉快にさせる。

「そうね、ちよつとリン」

クリスはリンを召喚させた。

「おう、俺一応最高位クラスだからさほいほい召喚スルの止めてくんない？安売りみたいだからさ」

「五月蠅い。リンほら魂」

「おお、すごいなこりゃ」

リンは嬉々として笑った。

「うっとおしいから消してよ」

「あいつらかゝまあ待て待て・・・遊んでから」

リンは自分の気の一部を海のそこに飛ばした。ソレを見たクリスは嫌なものを見る目で結界を張った。

ぼこぼこぼこ・・・

ざばあ！死者が顔を出した。骨と化した者、まだ肉片の残るもの、さまざまなのが陸にさがり恨みの者とへと歩いていく。どちらの者ともわからない悲鳴が上がる。

「あひゃひゃひゃ！ばっかでー」

「リン」

クリスはリンの頭を殴った。

「あで、なんだよ」

「アレ、アレ持ってきてあの死体たちが持つてるの」

さっきの戦いで死んでしまった海賊達が山となり、ひとりの少年を海から引き上げていた。リンは魔法で少年を掴んだ。

「これ？」

「それ」

「人を物扱いすんな！」

「あ、意識あつた？」

エースは涙をぼろぼろながしながら下を見た。

「みんなあ・・・」

「大丈夫、彼らは地獄逝きだけど、人一人助けた善行の分は、よくしてもらえるわ」

「閻魔甘いからな」

リンは欠伸を一つすると消えた。次のところに向かったらしい。

「じゃあ君は私の村人第一号ね」

「俺許可した覚えないけど！？」

「どうせココで放置したって死ぬでしょう？結局一緒だって」

「・・・」

クリスは笑顔で止まった。

「なんなら今ココで死なせましょうか？」

浮遊魔法が一瞬途切れる。

「うわあああああ？！鬼がいる」

「天使だっつの」

「わかったよ、いくよ何処でも行けばいいんだろ！？」

「大丈夫大丈夫そのうち『良かったなあー』って思う日が来るから」

「本当かよ」

「もちろん」

クリスの笑みにエースはしぶしぶうなづいた。

こうして第一号を捕獲したのであった

ステップ3（後書き）

彼はクリス村での突っ込み役と成長します

ステップ4

「エリンさん、今日はなんの本読んでるの？」

「クトウルフ神話よ」

病室の中で少女は本から目を話さずに愛想をふりまく看護婦にそう簡単に答えた。エリン・ソーは10歳の頃に医者に不治の病になつてしていると宣告され、それからずっと病院の住民と化していた。

「く？クフルフ？」

「クトウルフ神話、知らないのも無理ないわね。ラヴクラフトが創作した数十篇の小説や詩を他の偉人が色々足してできた話よ、この根底に到底普通の人間には理解し得ない、できない存在への『宇宙的恐怖』があるのよ」

「へ？へえ？」

「つまり、架空の神様の話よ、私は神の存在や宇宙の可能性について知りたいの」

看護婦はクエスチョンマークを浮かべて出て行ったのを見てエリンは扉に向けて本を投げた。

「なによこんな本渡して！」

彼女の両親は有名な大学の教師であった。両親は気を利かせてなのかどうか分からないが、彼女の暇にならないように本をよく届け てくれたが、彼女には面白くないものであった。

花の16歳、まだまだ遊びたい盛りなのに

「つまらないわ」

「確かにつまらない」

エリンは顔を上げた。

「病院つてのは静かで時が緩やかに流れている。病院つて現実とは少しずれた緩やかな時間軸にいるって知ってた？」

「誰!？」

四階の窓からぺらぺら喋る女は紫色の髪と瞳をしており、獰猛な

獣のような笑みを浮かべた。

「おい、ナスコール押そうとするなよ」

「きゃ」

ナスコールが浮いた。

「なあ、お前世界が見たいんだろ」

「だ、だから何？見せてくれるとでも？」

「うん」

紫の人は微笑む。

「自己紹介がまだだったな俺はリン」

「エリン」

リンは深く笑った。

「よし、じゃあお前クリスマス村の住民な！」

「クリスマス村？」

「そうだ、俺の村でもいいけどね」

「どっちでもいいいわ、でも・・・私」

「OKじゃあ今すぐ行こう」

「え？」

リンは指を鳴らした。

エリンの風景が変わった。

広くスカスカの家が並ぶ土地だった。つまり、何も無い地味な広

大なところ・・・ココが世界？

「あ、りーん、もういいからね」

「おう、よかったなエリンお前で最後だ」

全く普通の家とは違う不思議な形の家がたくさん並んでいた、

ケーキの形をした家やサッカーボールの形をした家、ある家は炎を

模った家もあった。

「ワンダー・・・」

「ココはクリスマス村、ちなみに村長のクリスマスね」

綺麗な少女が現れた、金色のウェーブのかかった髪に滑らかな物腰が上品さを醸し出していた。

「不思議ね、朝なのにあんなにはつきり月が浮いてる」

「私が月の女神で光の巫女だからよ」

クリスはにっこりと笑った。

「どんな家に住みたい？場所は？はい地図」

そんなに広くないことが地図から分かる。

「じゃあ広場の斜めマスの上に・・・あの」

「分かったわ、本屋ね」

「何も言っていない!？」

「分かるわよ」

クリスは不敵に微笑んだ。

「だってクリスちゃんだもの」

・・・分からない。

「家の形さ、本の形にしたら？面白いじゃん」

「リンナイス、じゃあそういうことで」

「え、嫌私は普通のでいいんだけど」

「『いいの私（俺）が面白いから』」

ココの家の形は、実は二人で勝手に決めてる？

エリンは不安よりもこれからの先の希望で笑ってしまった。もしかしたら私の天職になるかもね？

ステップ5

「ふんふんふーん」

「えっと『村長』さん機嫌いいですね」

「あ、エリン」

クリスはいい笑顔で妖精宜しく幅広い土地に成分不明の魔法の粉を振りまいていた。エリンは庭の木の下で腰掛けたままその様子を眺めていたが、カレコレずっと魔法の粉をふりまいていた。

「ほらココの土壌がそもそも雲だから、ちゃんと土になるように魔法で雲そのものの成分を変えてるの、1000メートルまでは土ね」

魔法の粉をかけるのを止めるとそれまでただの土が畑のような掘り返されたふかもこの大地になった。

「あの村長さん」

「クリスでいいわよ」

「じゃ、クリス・わざわぎ雲を土にしないと本物の土を持ってきたらいいのでは？」

「出来ないこともないけど、重いじゃない」

この人っていうかこの神様の定義はいまいち良く分かりません。

「っていうかぶっちゃけ雲の上に住むっていう馬鹿らしいのをやってみたかった」

自分で馬鹿らしいって言っちゃってます。

「・・・！」

クリスは手を広げた。

ぼおおおおおおおおおおおおおおおおん！！黒い煙がクリス村の結界外を真っ黒に覆いつくした、一足早いクリス村に『夜』がきた。

「リンね・・・リン」

指を鳴らすと目の前に画面が浮かんだ。

「おおデジタル」

向こうのほうではどうやら阿鼻叫喚となっていた。まだ爆発が起きているし。

「リン！！！」

反応の無いリンの名を叫ぶ。

『ひゃ！？ああクリス』

「『ああ、クリス』じゃないわよ、なにしての？ものごとっつ被害受けてただけど？訴えたら賠償金くれるわけ？」

『やだよ』

「この次第によっちゃあ全力で報復したあと貰うわよ」

「クリス・・・がめつい」

『分かった、分かった風の流れかえればいい話じゃねーか』

「つてか、リンなにしてんの？」

向こうのほうでは爆発音が酷い、リンの笑い声だけが響く。

『わかんない』

「なんで分からないの？もーちょっとコツチきなさい」

クリスは手を叩くと上からリンが落ちてきた。

「ぶふ！？」

器用に顔面から落ちてきた。リンの姿までも真っ黒で砂だらけだった。

「リン説明してもらいましょうか？」

「説明って？」

怒りの笑顔を作ったままクリスはリンにまだまだ接続中の画面をみせる。

「ああそうそう、実はなく、『ゴールドダッシュ』ならぬ『命がけダ

ッシュ』」

「前のくだけり関係ないじゃない」

リンは玩具で満足した子どもの笑みを浮かべた。

「もしかしたらいざって時に『兵士』がいるかもしれないだろう？だから鍛えてたんだ」

「それがどうしてこうなるのよ!?!」
「さあ?」

また再び爆発音が聞こえた。ずももももも・

「リン」

モニターを見ながらクリスは頭を押さえた。

「崩壊してるけど?あんたの村」
「ん?」

リン村まさかの崩壊。

「惑星が崩壊するってこういうことなんですね」
エリンはまた一つ学んだ。

完成

「クリス、移住させて」

「ええ？・・・いいけどなんで枕もってんのよ」

夜一人で眠れない子ども宜しくリンは枕を持ってクリスの前に現れた。

まあしかし物凄く嫌そうな許可が下りたのでリンは暴れまわっていた住民も、かなり体力を削らせてから連れてきた。今は疲れている顔だが屈強な男や狡猾そうな女ばかり、まさしく鍛え抜かれた英兵達・・・

「っていうかリン、本気で何を目指してたの？」

「ん？」

のほほんとしたクリス村に少し緊張が入った、クリスは溜息をついた。

ま、善良だけの世界じゃ、何の面白みもないからいいかな

「そうね、自己紹介しよう。リン村人呼んで」

「あいさー」

クリスたちの家は広場の目の前にあるので、二人は家についている広いベランダに出で、村人が来るのを待った。

ある程度集まったのでクリスは椅子から立った。

「村長クリス！一応副村長リン」

村長に副とかあるのかという突っ込みに大してはスルーな方向で。

「今日はこのクリス村の法律について説明するよ」

ぼん、っとクリスの頭の上に大きな巻物が広がった状態で説明を始めた。

「まず、第一条！『村長の命令に逆らうべからず』逆らったらその場で処刑！」

のどかな村からのいきなり絶対主義が発生。

「第二条！」「この村の空間に慣れなくなった場合強制退場」ちなみにじわじわとここの重力足していつてるからそろそろ足に来ると思うわ。立てれなくなったら退場」

「何の拷問?!」

「第三条！」「イベントには絶対参加すること」

「イベント?」

「これから考えるわ」

いかにも自由横暴なクリスらしい。

「ん?なあクリス」

「何リン」

「月と太陽と一緒に浮いてるぞ」

「おお」

太陽の神リンと月の神クリスが全く同じ力の力量で相反するものだから存在するらしいが、詳しいことは二人にも分からない。

「今は昼か?」

「第四条」裁判の判決は村長がすべて判定する」いいわね、あと言つとくけど私のモットーはとりあえず「喧嘩ぶちめす両成敗」だから」

村人は頭をかきながら顔を見合った。自分達にはこの法律苦しいような気がすると思っただからだ。

「第五条」以上の事柄を守るなら、何をしてもいい」

「結局何処からどこまででありなんだ?」

村人Aが聞くとクリスは微笑んだ。

「来る物拒まず、去るもの追わず、何処へでも行ってもいいってこと。クリスの名の下にクリス村の者は何処にでも遊びに行ってもいいわよ。天国から地獄に」

「へー」

リンは巻物を閉じた。

「今はコレで以上かな」

クリスはまアまア満足した顔で頷いた。そしてクリスとリンは何も無い空間を同時に見た。

「なんかよう？クスリ・アク」

村人が悲鳴をあげた。

何も無い空間から産み落とされるように二人が現れたからだ。

「もう、結界が強いから気持悪い登場になったじゃないさ」

「平気さ、アクは前からキモイもん」

「失礼ね！地獄界では大人気なんだよこれでも！」

「でもそれはサウジーナの方でアクちゃんは嫌われ者だけどね」

「クスリイ・・・」

「どうでもいい」

クスリはスパツと言いつつ放った。

「いい加減私の村を覗き見するのやめてって上にも伝えてくれない？」

「そういうわけにもいかないわ」

クスリもスパツと言いつつ切った。

「賢い貴女ですもの気がつかないわけじゃないでしょう？・・・貴方達がエデンの支配者を拒否したと言うことは、我々の正当な後継者が居ないということなのよ？貴方達が拒絶したことによって困るのはクスリの目がカツツと開いた。

「私なのよ！！！！」

「知らんがな」

クスリは心底どうでも良さそうにいった。

「上から厭味を聞くのは私だけなのよ」

「だから知らんがな」

何故って？アクは所詮インプだからさ

「ってことであたしや考えたのさ！！！！」

「アクが？」

アクならつまらない事を言いそうだ。

「THEお見合いっだあ！！！！」

やっぱりくだらなかつた。

「たるー」

リンはひらひらのシルク製のシンプルかつ麗しいチャイナ風ドレスを着ていた。装飾はすべて人間の貧乏な子ども達に提供しました。

「リン！お前ねえ！なんで宝石一個もつけてないんだよ」

「アク！俺に近寄るな」

「？」

リンは鼻をつまんだ。

「香水くっつきさい」

アクは化粧品に取り付いているからお化粧していないと憑依できないのである、でも香水はただの趣味。ちなみにリンは五感がいいためアクを拒絶。

「おいーさっさと終わらせろよ」

「まだはじまっても無いよ！！」

「てかクリスはー？」

「無視かい？！」

リンはめんどくさいものを見るような目でアクを見た後、近くにあった水コップを掴んでアクの顔を目がけて被せた。

「きゃああああああ！！」

か弱い悲鳴が上がり人々が振り向く。

「大丈夫ですか！？」

素のアクは可愛いので男が寄り付く。

「あ、あああの」

どもってる。素のアクはか弱い少女のような淑女らしい、きている服が過激だけど顔が可憐なので男は気にしないらしい。

リンは無視してあるいていく。

どん

「て」

「失礼。大丈夫ですか？」

「うん、へーきへーき、んじゃ」

「ああ待ってください。あなたリン様でしょう？」

リンは振り返ってまじまじと男を見た。オールバックで髪のが
ーい、スラツとした男だった。

なーんだあ？狐みたいなヤツ（リンの感想）

「はじめまして、アル・バーニと申します」

「……」

「……？」

「何処にウサギ耳あるんだ？」

「それはバーニ・ガールかと」

「バニ男だっているぜ」

アル・バーニは表面上だけニコツと笑った。内心怒ってるだろう
なー（リンの感想）

「で、なんか用？」

「ああ、そうでした。リン様とクリス様の噂は良くこの耳に届いて
おりました」

「へー」

「はい、それでこんな噂を聞きました」

小声になったアル・バーニに耳を近寄せる。

「何でもお二人は『世界の理の書』1/10と5/10を持って
ると聞きました」

「あーうん、まあな」

アル・バーニがにやりと笑った。

「どうかよろしければその本少しお貸し願えませんかしょうか」
「無理」

リンは即答した。

「あの本は半端なヤツが読んだら脳がドロドロに溶けて目玉が飛び

出て耳と目と鼻から血が流れるぞ？俺は実際にそうだったやつを見たぞ。良くてイカレ死にだ」

アル・バーニはコロコロと笑った。

「私は大丈夫な自信がございますのご安心を。昔『世界新書』を読みきったことがあります」

「へー、俺はそんなの読んだこと無いから知らん」

リンは中々首をたてに振らない。

「まあそこを」

「リン？」

「わああ？クリス？」

綺麗なドレスを完璧に着こなし、付けたる宝石は真珠のネックレスだけなのに、清らかな淑女のように十分に美しさをかもしだし、その優雅さは王族のような高貴さを表すかのようだった。

「馬鹿ね、私以外に誰がいるのよ？」

「そうだね、いやー化けたな」

「化けたとかゆるいな」

勿論二人狙いだった男が見過ごすわけも無く、すぐにクリスの姿が見えなくなるようにクリスは男の群れに囲まれた。

リンは逆に追い出された。

「わあーっ」

くるくる、べしゃ・まさか床に倒れる日が来るなんて。

「さすが美の女神綺麗よねー」

「あ、クスリ」

リンは鼻を押さえながら立ち上がった。

「てかクリスが美の女神ってはじめに聞いたぞ」

「今譲渡したもの」

「・・・」

クスリ、クリスの母らしく自由人。

「それにしても予想外なのは、男達が近づきすぎてクリスにはどれ
も同じ顔にしか見えてないことでしょうよ」

「てかあれじゃ野菜畑だろ」

いろんなサイズの男も居たもんだ。

とりあえずの結果は

「今回は失敗ね」

「何回する気だよ」

中

「ふー、コレで何回目かしら？」

長椅子に横になりながらクリスは溜息ついた。今回のことで一番被害を受けているのはクリスだった。クスリにばれないように微力な結界で自分を纏う。

天界出身だろうが男は男。顔が美しくたって中身は獣。そんなもののクリスは好きにはなれなかった。だから時折あまりにうっとおしいときは殺気を立てたりした。

しかし煩惱の塊の脳内では殺気にすら気がつかないようだ。

「逃げちゃおうかな」

「いけませんよクリスさん」

「あら、いたのヴァニラ」

ちやらちやら着飾られた此方とは違いヴァニラはいつもといたって変わらない姿だ。ま、いつも軽いドレスを着ているけど・・・

「そろそろ貴女が逃げ出す頃だと思いましてね」

「あらあく誰に頼まれたの？」

「いえいえそんな、自分の意思ですよ・・・貴女は世界の頂点に立つお方だからこそ、貴女には永遠の伴侶が必要なはずですわ」

「いらねーし」

「クリス！」

ヴァニラに怒られてクリスは溜息を大げさについて天井を見た。無駄に豪華なシャンデリアがキラキラと光り輝いている。

「ラゴウも来たみたいね」

「ええ」

ラゴウが移動するといつも空が闇に覆われ雷が轟き落ちる。

「窓開けてヴァニラ」

「・・・悪趣味」

ヴァニラが窓を開けると同時に、雷に感電しながら落ちていくラ

ゴウが見えた。ラゴウは雷の巫女・女神であるが。まったく能力が大きすぎて感電して落ちていくのだ。

「あれでケロリとしてるんだからすごいわよね」

「すごくなど、ただの馬鹿なのですよ」

ヴァニラは溜息つくくとクリスの頭の飾りが落ちそうになっているのでそれを直す。

「さあ、もうパーティに参加なさい」

「はいはい・・・」

立ち上がり階段を下っていくと何人もの男が寄ってくる。

目はハートを秘めていて・・・

正直

「キモイ」

「なにかいいましたか？美しい人」

「いいえ何も？（語尾みたいに白々しい）」

「可憐な貴女の瞳に私がうつることをお許しください」

「お世辞は止して（許可しないって言ったら失せてくれるの？）」

「ああ、貴女の隣に立つに相応しいのは私しかおりません」

「あら（その自信はどこからくるのよナス顔）」

その様子を遠くから眺めるラゴウとヴァニラ

「クリスマス随分なことと思うとるな」

「ま、分からなくはありますが」

ヴァニラやラゴウの二人はまだ知らなかった。

自分達にもこの火の粉がかかることを・・・

「わんつうとるりゃああああああああああ」

「なんでパートナー殴るわけ」

ダンスの練習中

リンは社交ダンスを踊ったことが無いというので練習を始めたのだが、あるうことが練習をするたびに練習の先生を投げ飛ばしてい

った。

アクは頭を押さえた。

「こんどの社交パーティーはそこいらの貴族とは違うんだよ、王族レベルなんだよ！もつと言えはお前等のお婆様が来るんだよ！！！」

「だれ？」

「大婆様！」

クリスはダンス広場の階段の一番上に座っていたが、大婆に興味を引かれて手すりですり降りてきた。

「つまり、クスリの母ね」

「そう、私の母の母も、その母も来るわ」

「・・・ひい婆様？」

クリスの疑問にクスリは複雑そうな顔をした。

「そうよ、私達はこれといったことが無ければ基本不老不死なのだから、驚くようなことでもないでしょう？」

「まあ、そうだけど・・・社交パーティーになんで来るわけ？」

「決まっているじゃない。貴方達を見によ」

「だからこそ、リンにはダンスを・・・っていない！？」

リン逃亡。

「ラゴウ捕獲して来い」

「ほいなく」

ぴっしーあん

雷がラゴウを攫っていった。そして、ラゴウのいた場所に焦げ目がついていた。

「・・・たく」

「ダンス如きで逃げるなんて、リンさんもまだまだですね」

「あら、ヴァニラ運動神経悪いと思ってたけど、ヴァニラは踊れるの？」

「勿論」

ヴァニラは胸を張った。

「踊れませんわ」

「……」

踊れんのかい……。

「ヴァニラって……」

「なんです？」

クリスは言いかけた言葉を切った。

「なんでもない、さあーて私もリン探しに〜」

「アナタは別のことをしてもらおうよ」

がし、クスリに首もとを掴まれる。

「な、なに？」

クスリはにつこりと微笑んだ。

「賢いアナタだもの……一日で覚えれるわよね？著名人の名前」

「ちなみに何人ぐらい？」

「10000」

魔法を使つて逃げようとしたクリスより先に魔法を展開して逃げられなくする。

「いやー！何人来るのよ!？」

「クリスさん知恵の女神の称号も近々手に入れなされると聞きました
が？」

「それとこれとは関係ないでしょヴァニラ！」

「ああ、そうそうヴァニラ」

「はい、クスリ様」

クスリはクリスを掴んだままに「つこりと微笑んだ。

「アナタはその著名人の子と友人関係、メディア、家系図について
一通り知っておきなさい」

「は？」

氷の女神が固まった。

「大まかなことはクリスが覚え、細部はアナタが覚えるのよ」

「は、え、いえ、それは……」

「主役はクリス。サポーターはヴァニラ……いいわね」

偉い人の圧倒的な圧力に屈したヴァニラは泣きそうな顔で「はい、

心得ました」と蚊の鳴くような声で言った。首根っこを掴まれたクリスは心の中で手を合わせた。

どんまいヴァニラ

「さあ、リンとラゴウも同じように指示しなければね！ね！アークちゃん」

どんまい私ら さっそく火の粉がかかりました。

「クリス！リン！何処へいったんですか！？クーリス！リン」
ヴァニラはいつも悠然とした淑女であったが、いまは鬼のような顔で二人の名前を叫んでいた、そんなヴァニラに首を掴まれたラゴウは真つ赤な顔したヴァニラとは正反対、真つ青になっていた。むしろ青より白？

「たく、あのお二人ときたら！私が血反吐を吐きながら皆様の血脈勲章伝統をすべて完璧に覚えたというのに、本番直前になったとたん姿をくらませるだなんて！！許せません！ぜつったい捕獲します」

「そーんなにあつくなっても見つけられへんで」

ラゴウは息も絶え絶えな状態で何とかそういった。

きききー！！！！

ヴァニラはやっと止まった。

「そうでした。あつくなくてはいけませんね・・・私は堂々と静かにそして厳かに生きなければ」

「なんとというか、その物言いうちの干物ばあーさんと同じ言い方や」
カツチン

ラゴウアイスの出来上がり。

そんな様子を身ながら、二人の女神はこそこそと移動を始めた。

「やばい、ヴァニラがガチギレだ」

「ヴァニラ切れるとそこらじゅう氷付けにするからねー『雪女伝説』怖い方の噂を作ったのは彼女だものね・・・」

二人はできるだけ気配を消してコソコソと移動を始めた。

「そもそもクスリの言うこと聞くなんて、私らしくなかったわ」

「だな、こんなふざけたお遊びおりゃ〜もううんざりだ」

こそこそ、こそこそ

「とつとと村にずらかるわよ」

「そうはいかないよ」

目の前には仁王立ちになっているアクがいた。

「私の敵じゃないわね」

クリスは魔法でアクの頭上に水を被せた。

「甘い」

アクが結界を張った。

「!?!」

クリスは急いで立ち上がってリンの首を掴んで一気に後退した。

「アク如きに私の魔法をかわせるわけが無いわ・・・何者!」

「ふっふっふ・・・って、私はそんな雑魚じゃない!!」

アクは黒炎を纏うと二人に迫った。

「パーティまで気絶してもらおうよ!」

「断る!」

「ぐふ」

リンの長い足がアクの腹に直撃した。

「あー、アク・・・あんたって集中しないと駄目なタイプなのね」

「魔法に集中してたってことか・・・アホな」

シュン!

誰かがあわられた。

「!?!?!」

クスリに、明治時代風の女学生の服を着た女性や、巫女さん風服を着た女性がいた。

「ほお、こいつらか」

「中々元気どすねえ」

クスリはにこりと微笑んだ。

「クリス・リン、挨拶なさい。私達の先代目・・・私の母ユリアーナにサウジーナの母リリーよ」

「はじめまして、私達をずっと隠れて盗み見していたのは貴女達?」

「あら、盗み見やなんて・・・人聞きの悪い言い方。監視です」

「で、お前等エデンの執権を拒否したらしいな・・・アク」

お腹を蹴られて倒れているアクの首根っこを掴んで持ち上げた。
アクは目が覚めると顔を真っ青にさせた。

「あ、り、リリー様じゃあないですかあゝ」

「そうだ、で・お前は何しているそんなところで」

「え、えーと」

「アクちゃんのことはどうでもいいの」

クスリは怒ったようにリリーからアクを取り返した。

「大事なのはクリスたちがエデンを拒否したことでしょう」

「そうどすな、でも、そんなに大事なことはないどすえ」

ユリアーナは微笑むとクリスの頭を撫でた。

「エデンは所詮人界に輪廻するまでの霊どもと、そして我ら家臣共の借り住まいどすから・私達が管理するまでもない」

「そういうわけにも行くまい、支配者がいなければ秩序は守れん」

「まーま」

リンはいい笑顔で笑った。

「後はそちらさんで任せた。俺らは帰るからさ」

「そういうわけには行きませんよリンさん」

「げ、ヴァニラ」

怒りを越した青い炎がメラメラと燃えていた。

「て、てへ」

氷の炎が二人を襲った。

「「きやあー!?!」」

氷付けになった二人を見ながらリリーは溜息をついた。

「・お前達がエデンを支配したくないというのなら、致し方あるまい」

「ん?」

「今はお前達の好きにするがいい」

リリーはそういうと着物の袖から長い巻物を取り出した。

「ただし、『契約』はしてもらうぞ、今は自由にしてやるがいずれエデンを統べると約束しろ」

「いやよ」

氷付けにされたはずのクリスの指がなると、一気に高温の炎が燃え上がり氷もろとも巻物も燃やし消し炭となった。

「何故、私達がそちらの言うことを聞かなきゃならないわけ？」

「・・・なんだと」

クリスはフンツとそっぽを向いた。

「私、指図されるの嫌いな。そもそもエデンを統べるつもりで私達はココまで来たんじゃないわ」

「今まで散々お前等が俺らの先を決めてきたんだ」

二人は偉大な先代たちを睨んだ。

「今度は自分達の好きにさせてもらう！」

揺ぎ無い意思に、強い拒絶のこもった殺気を受けた先代たちは怯んだ。

古き時代に生きし者ほど強く、誰よりも経験や知識があり・・・決して若造などに引けをとったりなどしないのに・・・怯んだ。その事実がおもしろい

「あはっあはははっはっは！！」

ユリアー又は高笑いをした後リリーの肩に手を添えた。

「面白いどすなりリー？ふふ・・・いいじゃないどすか、好きにやらせたらええんですよ」

「ユリアー!？」

「お二人とも、よう聞きなさい」

「何だ？」

「エデンの執権はお前達に譲渡します」

二人はクエスチョンマークを浮かべた。

「だから、いらねーってば」

「まあ最期までお聞き、エデンの執行権力を持っておくだけでいいんどす」

「つまり、私達に権力をくれる上に自由にしてくれってわけ？」

「そう」

リンは顎に手を当てて首をかしげた。

「そりゃ、いい案だけど・・・それでいいのか？」

「いいわけあるか！」

「リリー・・・いいんです、そうでもしないとエデン受け取ってくれ
んのでしょ？私らはクスリたちの後継者を決めておきたかったんで
す。アクはこうなつてしまったし・・・上としては頼りない」

「あはは」

「なんだ、アクのせいじゃない」

「クスリもなんだかんだゆうて、遊び呆けてばかりいるし」

「だって、アクちゃんが仕事する権利無いからって私にはつかしこ
とに追われて・・・馬鹿みたいじゃない？」

「そんなこんなやから、二人に任せたかったんよ」

「アホらしいわね」

クスリは頭を押さえた。

「大げさに事を進めてきたわりには、内容ぺらっぺらの薄い紙だっ
たってわけか」

「うわぁ・・・俺らの人生つて・・・」

二人は肩を落とした。

「あら、舐められたものね〜私達の身分は色々大変なのよ？殺され
て吸収されることもあるんだから・・・ま、サウジーナみたいな気の
弱い子しかそうならないけど」

クスリはサウジーナがよほど嫌いらしい。

「ペジみたいな件もあるしね」

「ああ、忘れてたあの雑魚ね」

今もまた再び獄中にいるらしい・・・どうでもいいけど

「あ、じゃあさ」

リンは先代を見た。

「もうパーティーでなくていい？」

「はい？」

え、駄目なの？

「大事な子孫繁栄のためよ、出会いは大事にしなきゃ」

「この後もあうんだから早く戻らなきゃね」

クリスはリンの横腹をつついた。

「逃げるわよ」

「了解」

二人のパーティはまだまだ続きそうであった・・・。

ある日のことだった。

「ねー、リンちゃん」

「あ?」

最近、クリス村につれてきた子どもたちがリンの家の周りをうちよるする。その理由は多分リンが牧場を営んでいるからだと思われる。

「卵ちよーだい」

「ほい」

「リンちゃんってねー、悪魔なんだよね」

「おう」

少女の一人、名をリリカという少女はエリンの図書館で借りた本を広げた。人間の作った神話の挿絵の部分で、魔王ルシファーがっつていた。

「リンちゃんも、黒い羽とヤギみたいな角はえるの?」

「はやそうと思えばはやせるし、ヤギにもなれるけど?」

「そうじゃなーいー」

リンは本の絵を見ながら頭をかいた。

「あのね、悪魔と天使はもとは同じものなんだって知ってたか?」

「えー?嘘だー」

「嘘じゃねーし、悪魔も天使ももとは同じ魂の塊で、その魂が自分の身体を構成するものとして必要なエネルギーを吸収する。そのエネルギーのもとが違うから天使と悪魔ってわかれちまうんだ」

「???」

こどもたちは頭の上に一杯のクエスチョンマークを浮かべた。

さっぱりという顔

「・・・」

リンもタオルで汗を拭いながら困った顔をした。

「おりゃー賢くないんで・賢い人に聞いてください」

「図書のおねーさんも知らないって言った」

「その図書のおねーさまよりも賢い人がこの村にいるだろう」

「・・・リンじゃないよね」

「失礼な、そうだけど」

子ども達の視線が自然とリンの家の隣に移った。

隣の家は農業やガーデニングなど、植物を育てることに秀でてい
る人が住んでいた。

「いってこい」

子ども達はお礼もいわずに走っていった。

「リン様？お食事の用意ができましたよ？あら、こどもたち、いそ
いでどちらに？」

「知恵の女神のもとにさ、さーてと、バード！飯飯」

お昼の用意を済ませたクリスはエプロンを取るとテーブルに並べ
た。

今日はバードが作ると思っていたからリンの分を作る必要は無い。

あの大食いは身体が細いわりには大食いだからいつも作るのは大量
でめんどくさい

今日は楽でいい

「クリスちゃん」

「ん？」

一度手に持ったお箸を机の上において扉を開けた。そこには子ど
もたちが居た。

「あら、リリカにトーマ、リコリスにネルにマキャベルじゃない、
どうかした？」

「・・・」

「？」

「イー匂い」

子ども達のお腹がグーッと鳴った。

「お昼食べてこなかったの？」

「クリスちゃんに聞きたいことあったから」

「へー・・しょうがないな」

クリスはもう一度エプロンを手に取ると料理を始めた。ものの数分で作ったお料理は輝いて見えた。

「さすがクリスちゃん」

子ども達はいただきますというと、綺麗に残さず平らげた。

クリスも満足

「で？聞きたいことって？」

「うん、リンちゃんがね・・なんだっけ」

「もう、トーマったら！悪魔と天使の魂のエネルギーの違いがどうたらって」

「ほう、それで？何が聞きたいのかしら」

「天使と悪魔が同じってなんで？でも違うつて何がー？」

クリスは子どもが何を言っているのか分からないけど、とりあえず天使と悪魔について知りたいのだからうことを察した。

「えーとね、つまり悪魔は人間の『悪い意思』を食べるの」

「悪い意思？」

「そう、殺してやろうとか苛めてやろうみたいなの」

「へー」

「で、逆に天使は『良い意思』を食べて返還するの」

「返還するの？どうして？ゲロツちゃうの？！」

「違うわ！良い意思って言うのはつまり、美味しい料理なのよ、ソレを食べたら幸せでしょう」

「うん、さっきのクリスの料理美味しくて私幸せだった」

子どもの素直な感想にクリスは微笑む。

「そういうことよ、つまりお腹をすかせた人がいるとするわよ？」

「うん」

お腹をすかせた人、まあ仮にAさんとTさんが居るとする。

Aさんは居酒屋に行つて強いお酒や脂っこい肉ををバンバン食べ

まくる。

逆にTさんは高級レストランに行って美味しい料理を食べる。

「そうになると、Aさんはベロンベロンに酔っ払って暴れだす。これが悪魔ね」

「悪魔は酔っ払いなの？」

「違うの、良いことと悪いことの区別がついているけど、自分の本能に素直ってこと」

「Tさんって天使？」

「そう、美味しいものを食べて幸せになったらお店の人にチップを渡す。まあ天使はチップ代わりに幸せや奇跡と呼ばれるものを渡すだけだね」

「へーそうなんだー」

こどもたちは納得した様子で満足したらしい。

「悪魔が酔っ払いと同等に扱われた・・・」

「ん？リンいたの？」

「居酒屋の何が悪い」

「例えよ」

「うわーん」

泣いているわりには、リンは楽しそうだった。

上（後書き）

楽しければーいーんですbYリン

「リンちゃん？」

子ども達は今日もリンのところに顔を出したが、当の本人が居ない
「牛のところにもいなかった」

「鶏のトコモ」

「リンちゃん」

子ども達の声に反応したクリスが様子を見に来た。

「どうしたの？」

「リンちゃんいないよー？」

「え？いるじゃない」

「どこにー？」

クリスはある一匹の黒ヤギを指差した。

「ヤギ？」

クリスは懐からお菓子を取り出すと目の前でちらつかせた。
びゅん！！

ヤギがクリスにすごい勢いで飛びついてきた。

「ヤギになんかあげないわよ」

クリスのその言葉を聞いたヤギが急に、ぼん！っと大きな犬にな
った。これ以上に無いぐらい尻尾を振っていた。

「リン？」

子ども達が不思議そうに名前を呼ぶと、犬がぼふ！つともとの姿
に戻った。が、尻尾はそのままだ。

「はい」

お菓子を手に入れご満悦らしく良い笑顔で食べていた。

「リンちゃんなんでヤギになったの？！」

「ん？いやあクロヤギさんになりたくて」

「嘘ばかり、子ども達の世話に飽きたからでしょ・・・たく」

リンはてへっと舌を出した。

「そうそう、天使って意外と一度自分でこつって決めたら、最期まで遣り通さないと気がすまないのよ？私とかお菓子に今はまっつて、たくさんレパートリー覚えたわ」

「それは良いことだ」

手を出しながらリンは言った。

「今日はそれだけよ」

残念そうに手を引つ込めた。

「悪魔は違うのー？」

「そうだな、悪魔は凝ったものでもすぐに飽きるからな、飽きたら二度としないな」

「へー」

逆を言えば飽きなれば恐ろしいほど続くのだけど・・・。

「でもでも！リンは大丈夫」

子ども達は自信満々に頷いた。

「あ？」

さー子ども達がお菓子を取り出した。

「リンちゃん！あーそーぼ」

「おう、いいぜ」

・・・情けないリンは無視して、クリスは農作業をしに自分の家に帰っていった。

さすがクリス村の子ども達、観察力にたけている・・・っていうかリンが単純すぎるだけであつた・・・。

下(前書き)

歴史物が好きな人はココの章をとばしてください。

下

「クリス遊びに行こうぜ」

「どこに？」

「人界」

「はいはい」

クリスは先ほど摘んだばかりの花束を魔法で凝縮するとそこから垂れ落ちる汁をビンの中に閉じ込めて蓋をした。

「さ、行きましようか？」

「おう」

クリス村を出て人界へと降り立つ

「あら？時代ずれたわ」

「江戸か戦国か？」

頭にちよんまげつけた男が堂々たる風格で歩いていた。

「じゃあ私達も」

町娘の格好に変わると歩き出す。

「お団子でも食ってくか？」

「じゃあ私みたらし、リンのおごりで」

「まじか！」

お茶屋に入るとガッツシャーン！と机がひっくり返った。

「ちやぶ台じゃないわよ」

「分かってるだろ、んな事しかもそのネタ後世だし」

悲鳴が上がる、ぼさぼさヘアーのきつたなーい侍が刀を振り回していた。

「下級侍だと馬鹿にしゃがって！お前だって下級じゃねーか！ああ！？」

「貴様と同じにするな！我が家紋はお前のところのように色あせておらぬ故になー！！」

「なんだときっさつまああああああ」

悲鳴が上がり、人々は逃げ惑う

「ん？」

クリスは逃げていく人々を見ていたから気がつかなかった。・
剣の刃が自身に向かっていることを

「お嬢ちゃんあぶねえ！」

「きゃああああああ」

・・ドス

「おげ・・・え・・・えう」

ドサ・・腹に一瞬でもぐりこまれ内蔵を打撃された侍は反吐を吐いて倒れた。

「だ、誰だオヌシ」

リンはにっこりと微笑むともう一人の侍の顔を平手で二回叩いた。そして二人の侍の首根っこを掴むと投げ飛ばした。

「おおお」

歓声上がる

「おっちゃん、みたらしとお茶、二個づつ！」

「へ？へ、へえ」

「リン」

クリスはリンの耳を掴むと引っ張った。

「ただだ！？何？」

「ずらかるわよ」

「なんで？」

クリスは目を流した。その先の遠くには白い馬に乗ったお奉行様が
がいた。

「ね」

「なあある」

二人はお偉いさんに背を向けた。

「ずらかるう」

・
・

リンは本当に忍者として動き回る、織田のために・・・。
クリスは暇なので万千代と呼ばれる少年の育成を携わった。

「いい万ちゃん、事を急いでは必ず失敗する、一番賢いのはしか
と周りを確認し、情報を集め、判断することが大事よ？」

「わかりました・・・あ！」

目をキラキラとさせたので、何だろうと顔を上げれば、そこにホ
トトギスが一匹いた。

「可愛いねー」

「なかぬかなあ？」

「そうねー鳴かないかしら」

しかし一向に鳴く気配が無い。クリスはお茶を飲みながら待つて
いるが、子どもである万千代はそわそわとした。

「まだかのう」

「そうねえ、でもね万ちゃん『鳴かぬなら、鳴くまで待とうホトト

ギス』・・・よ

「？」

「無理に鳴かせても風流じゃないわ、ゆっくり待ちましょう」

シユン！

ぎゃー！

鳥が射殺されて落ちた。

「・・・リン」

「俺じゃねーよ、討ったのはね」

「・・・」

吉法師はにやりと笑った。

「万千代！ウぬが鳴かぬホトトギスを待つというのなら、俺は射殺
すまでじゃ」

「題して『鳴かぬなら殺してしまおうホトトギス』だな」

「吹き込んだのリンでしょ」

「まあな」

リンと少年はアツハツハツハと大笑いを浮かべた。

（まあ、リンはいいけど、あの子）

クリスは吉法師を見た。

（少し、リンに懐きすぎね．．いずれ．．身を滅ぼすかもしれないというのに）

所詮親友と呼べるものになっただとしても、リンは悪魔。

裏切ることは、造作ないこと．．。

．．。

（別にいいけどね）

世は因果応報に回る、その殺生を行えば行うほど、お前に戻る。

悪魔はその報いを受けるものを見るのがダイスキ、だからこそ、人を誑かす．．。

天使はその様をみて、溜息をついた。

昼間の街の活気はどこへやら、今は闇夜に照らされた月が己の存在を炯炯と主張する。闇夜の影を練り歩く女性を、誰かが射抜くような眼差しで見っていた。

「ヤツだな」

「ああ」

二人の怪しげな影が闇の中を飛び交う。二人の狙う獲物は髪の毛の長い美しい鶉色の着物を着た女性だった。二人は同時に目配せをする
と剣を持って襲い掛かった。

「死ね！」

女性が振り向く。

「何!？」

その顔は、笑っていた。

ビュン！避けられ空を切る、急いで立ち回り一太刀を食らわそう

としたが、そこに彼女の姿は無かった。

「な」

「ねえ〜?」

二人組みは動けないことに気がついた。気がつけば体中に糸のよ
うなものでグルグル巻きになっていた。

「暗殺つてのはさ、素早く迅速に話さず気配を気取られず殺るもん
だよ」

いつの間にか彼女は屋根の上に移動していた。

「おのれ、織田の女狐め」

「おんやおんやあ〜面白いあだ名ついたねえ〜でも覚えといてくれ
ねえか?」

月夜に炯炯と光る瞳が敵に圧倒的な圧力をかけた。

「織田の女狐じゃなく、天下の女忍者・リンってな」

「おのれえー!!」

「リンちゃん昨日の夜わざわざ遊びにいったでしょう」

「だってー今朝から見張つてくれるんだもん、挨拶しなきゃ駄目だ
ろう?・・・てかさ」

リンはうんざりした顔でクリスを見た。

「お前なんでこんな世界でも書物に明け暮れてんの?」

「どんな世界でも知識は欲しい」

リンは真似できないなと心底思った。

「ところでリン」

クリスは書物を元の場所に戻すと、胡坐を組んだ。

「もう飽きたんでしょう?どうするのよ、織田の大将信長は」

「しんねー」

あれから数年も立ち、二人のワツパは立派な大殿になった。信長
にいたっては天下を狙い着々と勢力をあげていつていた。

安定したものに興味は無い、これがリンの性格だった。
「帰ろうぜ」

クリスは溜息をつきつつ頷いた。
本当、・・・わがままね

そして、数年が後、彼は明智光秀に討たれたのであった。

12?

「私達のもつ光、闇の称号は、天界でも大事なものだし、よくお祭りのときや儀式のときに扱うから、周りの人たちは私達のことを巫女と呼んでいるの」

「感覚は神だけだなー・・・」

リンはめんどくさそうに言った。

「巫女つて称号つけて、実際はただお祭りのときに担ぎ出したいだけだろうケド」

「逃げるものね、私達」

上は面倒なんです。

しかし称号はぜったい・・・ふう

「ま、そんなことはおいといて」

「行くか」

上空塞城管理城にクリスたちは向かう。

相変わらず、いろんな人々が四方八方飛び交う・クリスたちはぶつからないように避けながら飛んで行った、相変わらず大紋をくぐれば、愛想のない官吏達が忙しく歩き回っていた。

「さて、12神を探すか」

リンは首をコキコキ言わせながらクリスを見た。クリスはクグリのの上にのって出陣用意をした。

「上に行くんだもん、覚悟は必要よね」

「ああ」

ココは神々や高位の天使悪魔が住まう国・そこにひとたび入れば、恐れしらすの強引な元老院が権力者を取り込もうと群がってくるのだ。

「よし！」

二人は気合を入れて跳んだ。ついた天界は相変わらず綺麗なところで平和的だ。

「おお！クリスマス様」

「リン様ー！リン様ではないかあー」

来た！！

二人は猫を被った。

「あらお爺様方ご無沙汰振りです」

「息子が前回のパーティのときにクリスマス様にすっかり心奪われてしまつて、仕事も手につかぬのです」

「まア大変（棒読み）」

「どうかクリスマス様息子にお目をかけてくださりませんか」

「ごめんなさいお爺様、私リンとやることがあるの、ね？リン」

「そうそう」

二人はジジの群れから逃げようとしたが、わらわらわらとどんどん増えてくる元老院のジジどもに逃げ道をふさがれ、なんとも出られなくなつてしまった。

（天界の街では、魔法の使用禁止だからめんどくさいわね）

クリスマスは心の中で舌打ちをした。

「仕方ない、リン」

小声でリンの耳に舌打ちした。

「OK」

リンは漆黒の天使のような柔らかい翼をその背にはやした。

「わー」

ジジ共はソレを見て驚いて去つていった。

「・・・なんだろう、虚しい」

「悪魔なのに天使の羽。天使の羽なのに悪魔の羽だからね、リンちゃん」

元老院は常識外のものを嫌う。おそらく太陽と月の浮かぶクリスマス村になどきたら卒倒すること間違い無しであった。

「さあ、ヴァニラを探しにいきましょう」

本部にいき受付にヴァニラを呼び出すように言うと、受付の天使は笑顔でヴァニラは居ないといった。

「申し訳ございません、つい今し方ヴァニラ宮殿女官長は氷の神殿に帰られました」

「氷の神殿!？」

リンは嫌そうな顔をした。

「ヴァニラの氷の力は、光属性の効力をアップさせるものね」

「純度の高い闇属性にはきついんだよね」

(きついどころかリン以外の悪魔が入ったら黒ずみどころじゃないけどね)

リンが入れるのは太陽の女神の称号を持っているからだ。

「じゃあ私がヴァニラ呼ぶからあんたはラゴウよんできなさいな」

「・・・あそこ?」

「ラゴウ様なら一年ほど前から落明館らくめいかんに行って修行してくるといったまま、報告ございません」

二人は見合った。

「あえての落命館にいくか」

「漢字違うわよ、そっちのほうほうが正しい気もするけど」

二人は手をあげた。

「じゃあまた」

「おう」

それぞれ別れた。

「あれー？リンちゃんひさしぶりやな」

後ろのほうで大きな雷が数え切れないほうで落ち、大地を感電していた。リンはすっかりアフロになってしまったラゴウをみた。

「雷の神殿の第一関門も突破できねえのかよ！」

「じゃないやん、こつういうところなんやから」

「まあいいけどさ、ラゴウちよつと話があるんだけど」

「ん？あ、待つて！」

ラゴウは倒れた体制のままだった。

「完全回復するまで待つて」

「……………」

……。

「ヴァニラ様、お客様がおいでになっております」

「……氷の神殿まで来れるのは私より上の方のみ、そして直に来られるとしたら……クリスさん？」

肯定のかわりに氷の精霊は頭を垂れた。ヴァニラは指を鳴らし巫女服からいつもの服にかえ、歩き出した。

「クリスさんは今何処に？」

「散策中でございます、探しましょうか」

「いいえ、おそらく気配を察し現れるでしょう……ほら」

扉を開けるとソファの上で膝を組んでにこやかに笑っているクリスが居た。

「御用は？」

「クリス村に住まない？今は小さいけれど、ヴァニラの力があればもっと強く広く大きくなれる」

「貴女やリンさんがお遊びで作りなされた村ですか？お断りさせていただきます」

「言つと思つた、いいじゃない！なんで駄目なんだよー」

机の上にあつたお茶を汲みながらヴァニラは目でクリスを睨んだ。

「リンさんに感化されアホになられましたか？」

「そんなわけないじゃない、だって私天才だもん」

汲んだお茶をクリスに手渡しながらヴァニラも前の椅子にすわった。

「リンとは違うわよ」

「同じことです、遊び心だけで人を統べることはできません。リンさんも村を作りましたが滅ぼしましたでしょう？いくらクリス様でもいずれ」

「だからこそ、法律としてヴァニラが欲しいんじゃない」

「！」

ヴァニラは真っ直ぐにクリスの目を見た。クリスは不敵な笑みを浮かべている。

「お願い」

「・・・仕方ないですね」

ヴァニラは溜息をついた。

「わかりました、行きましょう」

「決定ね」

二人は見つめ合うと微笑みあった、むかしから変わらぬ掛け合いが馬鹿らしくもあり楽しくおもったからだ。

「ですが、きつちり責務を果たしてくださいよ」

「女神や巫女の役目を忘れたことなんてないって、忘れたふりしているだけで」

「・・・くりすさん？」

「冗談冗談」

リンのほうは大丈夫かしら

「ラゴウさんラゴウさん」

二人は同じように寝転がって空を眺めていた、真っ黒の雲から光がほとばしる

「ん？ナンやリン」

「あんたまっつてたら、ボクもしびれたんですけど」

「落明館は普通のやつやったらおるだけで感電するけど、リンは長時間いたからしびれたんやろな」

リンは首だけ横をむいた、

「ここいたら何時までたつても痺れるってことだよね・・・」

「そだよね」

「・・・アホかアあああああああああ！！！！」

水と風

「次はそうだね」

クリス村に戻らず天界の広場でリンを待つ間、クリスは一人とりあえず次の手を考えていた。

「にしてもー」

ベンチで花を愛でながらクリスは花を燃やした、またされるのは嫌いなのだ。

「遅れた」

やっとリンがきた。クリスは魔法で花を大きく急成長させリンに攻撃した。リンの体が飛んでいった。クリスはリンの目の前まで行くと見下した。

「おくれんじやないよ」

「ゴメン。ラゴウが中々のあほでさ」

回復能力に長けているリンはすぐに復活した。

「で？次は誰勧誘する？」

「ルミルカのところに行こうと思うわ、双子巫女」

「あーOKOK同じところに神殿あるからな、楽でいい」

二人はテレポートで一瞬で移動した。敵かで神聖なる場所に軽々といくことができるのは、この二人だけのものだろう

びゅおおお・・・

美しいマリンプルーの海が果てなく下を支配し、青々と美しく颯爽な青空が上を支配する。その真ん中に違和感がある、そうきゅうてん双球殿と呼ばれる、風と水を支配した女神の神殿だ。

「あいかかわらず、壮大というか清々しいというか、だな」

「うん、さて双子はどこにいるかしらねー。」と

クリスは風に乗り走り回る馬を避けた。

「ちようどいい、あの馬に乗って移動しましょ」

二人は飛びまわっている馬に乗って神殿のほうへと移動していった。

「ルミールカーいないの？」

「く、クリス？」

柱の影で隠れて顔を出しているのは気の弱い妹のルカのほうだった。

「よ」

リンが片手を挙げる。

「あークリリンじゃーん」

「略すな」

ルミも現れた。二人はそろって並ぶと表情の違う同じ顔かたちがそろった。

「風の女神ルカ、水の女神ルミ・・お願いがあるの」

クリスがきりつとしながら言うから二人も真面目な顔になった。

「どうしたの!？」

「クリス村に住まない？」

「・・は？」

ルミは口を大きく開けたまま固まった。

「なにそれ」

「私が作った村、たのしーよお」

「で、でも、天界のルールで神が一つの国を贖んではいけないって」

「国じゃなくて、村!」

二人で言うと双子は見合った。

「そこまでいうなら」

「OK？」

ルミは魔法で青色の鳥をつくりだした。

「この世界の日が沈むまでに、この子を捕まえて私達の目の前に持ってきて、殺すのは駄目いいね」

「できたらいいのか？」

「勿論」

鳥がしゅるんつと周りの色と溶け込んだ。

「もう消えたわよ」

ルミが不敵に笑った。クリスとリンは目配せをするとテレポートした。

「ね。ルミ、いくらあの二人でも難しいんじゃないかなあ？だって私達でも難しいじゃない？」

「あの二人は挫折を味わうべきと、思ったからこれでいいのよ」
ルミは微笑んだ。

「さあ、見ものね」

水と風（後書き）

決して二人が嫌いなわけではなく、
純粹に泣きっ面が見たいルミ

風と水

颯爽と爽快な空と海の狭間に浮かぶ、三番目に美しいことで名高い、
双球殿そつぎゅうでんと呼ばれる、風と水を支配した女神の神殿。

ソレを見ながらリンは微笑んだ。

ココは全くの爽快で、純粋な魔であるリンに不思議な効力を与えていた。

「・・・くっ・・・う」

そう、猛烈に

「ふわあああああああ！！！！うう、ふう、
眠たい。」

純粋な天使のクリスの場合、テンションが上がる効果があるらしく、さつきからヤル気満々で罾を仕掛けにいったのだった。

リンは獲物を待つだけ。

「・・・。」

待つだけなんだけど・・・。

「ふわ、ふわああ、くううう〜お昼寝するにはココは最高に気持ちいのに、コレは何の罰ゲームだよお全ク・・・お？」

ぴゅん！

鳥がコツチに飛んできた。

「よっしや」

リンは捕まえようと手を出したが、きゅい・びゅーん！
ブレーキを踏まれ、普通に抜けられちゃった。

「・・・。」

鳥の後ろ姿だけを見守る。

「じらー！ー！ー！」

「じすー！ー！」

「ぐふ!?」

上からかかと落とし去れて、海に落ちた。

「ごぼごぼ・・・」

「つて! 気絶ついでに寝ないですよ」

魔法で持ち上げられる。

「もう、海の中で待たせても寝て、空で待たせても寝て、何処でなら起きられるのよ!」

「このエリア外だと思っよ」

正論。

クリスはぷりぷりさせながら腰に手を当てリンの髪の毛を引っ張った。

「いい? リンちゃんが追いかけるの! 分かった?」

「うお? うお! うひゃ! ? うわわわ」

髪の毛をヒモ変わりにぶんぶん振り回し、

「やっほーい! ?」

リンを投げ飛ばした。

「頑張ってねー!」

水晶でその様子を見ていた双子の女神はお茶を楽しんでいた。

「ねえ、ルミ? クリスたち、本当に捕まえることできるのかな?」

「私達ですら数えるほどしか捕まえたことないのよ? 一日じゃ無理でしょうよ」

「可哀想だよ」

「どうして? ルカは可哀想じゃなくて、報復が怖いからそういつてるだけでしょ?」

「うっ!」

ルカはパクツとシフォンケーキを口に入れた。ルミと口げんかしても勝てないことを知っているから、説得を諦めたのだ。

「さすがの最強と言われ始めたあの二人でも、無理よ！これで最強なんていう称号はお流れね！ふふ」

「何がお流れだった？」

「！！！！」

ルミは立ち上がって背後を見た。ソファの上で横になっている体制でいるリンがいた、水晶ではまだ飛んでいつている途中。

「ふああ、やっぱりココ寝るのには最高だな」

「あ、リンちゃん起きたの？コツチも丁度お菓子焼けたよ」

いい匂いのする出来立ての御菓子を持ってクリスは現れた。まさか、今まで作っていた？！

「そんな馬鹿な！？だって」

水晶を見る。鳥に振り回されている二人が見える。

「なにいつてるの？」

クリスは可愛らしく小首をかしげた。

「ルカが食べてるシフォンケーキだって、私が作ったんじゃない」

「ふぐ！？」

ルカが食べながら驚いた。

「・・・まさか、クリス・・・あんた嵌めたわね」

「なんのこと？」

クリスのできたてのケーキに手を出そうとしたリンの顔を殴ると、懐から鳥が出てきた。

「・・・最初から、惑わしてたのね！くそ卑怯よ」

「どーして？私はルミに『この世界の日が沈むまでに、この子を捕まえてあんたらの目の前に持ってこい、殺すのは駄目』としか言われてないもん」

「だからって」

「ルミ」

ルカはルミの服の裾を掴んだ。

「コレも実力ってヤツだよーなー？クリス」

「そうそう、約束どうり、クリス村に住んでもらうわよ」

「……ち、分かったわよ！一度は挫折を味わえばよかったの
に」

「ねえクリスリン」

ルカは首を傾げながら質問した。

「いつこの子捕まえたの？」

「だから最初ツから」

リンが微笑んだ。

「ルミが魔法でソレを出したときに、内容が大体分かったからさ」

「私の魔法であらかじめ捕獲してたのよ」

始める前から勝敗は決まっていたらしい。ルカは感心した。

「じゃ、引越しの用意よろしくね」

「じゃ、次行くか」

風と水（後書き）

勝敗は始まる前に決まっていた。

花と岩

リーファとラツカは植物と大地をつかさどる女神、水をつかさどる女神ルミヤ風をつかさどるルカと同じような双子でありながら、仲がとても悪い。

花のような可愛らしさを基調とした植物の神の神殿『華宵殿』かしようでんに
対し、どちらかという土地味で厳格な趣のある『常盤殿』ときわでん・・・この
二つから見受けられるように、趣味の違いから仲が悪くなったのだ。
クリスとリンは自然界の中で浮遊していた。

「・・・さて、どうする?」

「片方ずつ嵌めたらどうだ?」クリス村にきたら憎い片割れを見なくてすむ』つてな住むなだけに・・・ぷぷ」

「なんーにも面白くない、その方法でいってクリス村でお見合いしたら、面倒じゃない!」

リンは悪魔なので気にしない。

「とりあえず、仲をよくはできなくとも、悪化を少しは改善させないとね」

クリスは魔法でリンもろとも移動した。・・・まずはラツカのいる『常盤殿』から・・・

・・・

「やっほーおっひさー!」

「やっぴーおっひさー!」

努めてクリスとリンは明るく登場した。

「!、あんたら」

ラツカは驚いた表情を見せたものしらけた顔を見せた。

「なんかよう?悪戯になら付き合わないわよ」

「まあつめたい。毎日悪戯ばかりしているわけじゃないのに」

「そうそう、暴れてるだけで」

「迷惑だ!!!」

「まーそんなことより、どんな感じ?」

「何が?」

「リーファとだよおん、仲良くなった?」

「はあ!?!」

ラツカはツンツンとした態度から顔を真っ赤にして怒り出した。

「なるわけないでしょ　!!!」

そこまで否定しなくともいいのに、と思つて宥めようとしたら地響きが聞こえた。クリスは嫌な予感がして瞬間移動テレポートで一足先に逃げた。

ざく

「いつてええええええええええ!?!」

大地が針のように盛り上がり、リンの腹を刺し貫いた。

「あんたたち、アタシで遊ぶつもりかどうか知らないけど・・・」

「ごごごごごごごご、地響きが酷い。」

「あたしの前でリーファの名前を、出さないでえええええええええええ!!!!!!」

ぽーん!リンは大地に殴り飛ばされ飛んでいった。「あーれー」

姿が見えなくなる前にリンを回収するクリス。

「あらまあー分かってたけど酷いわねー」

「それは俺の傷が?それともラツカの機嫌が?」

クリスは指を鳴らし、次に移動した。

(無視かよ)

「あいかわらず煌びやかというか、花が凄いわねえ」

神殿から機嫌よく鼻歌を歌いながら現れた女が二人に気がついた。

「あ、クリリンだ」

「「合体させんな!」」

「なにかよう?」

リーファは花束を抱えたまま微笑んだ。

「ラツカと仲直りする気ない？」

めんどくさいので直球に聞くクリス、とリーファから意外な返事が
「私は仲直りしてもいいけど？」

「おお」

リンが意外というと言う前にリーファは横にくるっとまわった。

「ラツカが素直になるならね」

「？」

二人で何のことという顔をすると、リーファはニコツと笑った。

「私の忠告を聞くなりいいわね」

「忠告？」

「そう」

花束をフェアリーに変えて飛ばした。

「同じ顔なんだから同じように髪を伸ばして」

ラツカは短い。

「同じようにふんわりキュートカラーのスカートはいて」

ラツカは迷彩柄の短ズボン派。

「私の神殿のように可愛くアレンジしたらいいわよ？」

ラツカは先代の形を守っています。

二人は頷いた。

「「そらぁー無理だわぁ」」

「どーしてよぉ！もう二人もラツカと一緒に頭固いの？」

ラツカが怒るわけもわかったわ。

「あー・・・」

クリスは考えるしぐさをした後笑った。

「『クリス村』にこない？リーファ」

「何ソレ」

「私の村よ」

「・・・まんまね。いいところなの？」

「なにもないわ、今わね・・・だからこそリーファの力が必要なんじ

「やない」

「そう？それだったら仕方ないわね！」

クリスは「そうなのよリーファが居なきゃねー、アツハツ八（棒読み）」と笑って済ませた。リンはクリスの横腹をつついた。

（おい、どうゆうつもりだよ）

（めんどくさくなった）

「おい！！？」

「なあに？」

「なんでもないわ」

突っ込みを入れたリンのおなかに鳩尾を入れてからズルズル運び出す。

「次は戻って常盤殿っと」

しゅん

「あ、何！なんかよう！？」

「ラツカークリス村に住みましょう〜クリス村にはラツカみたい人が必要なのよー」

「い・や！何か企んでるんでしょう」

正解。

「酷い」

クリスは掴んでいたリンを手放した。ゴス（いて！？）

「私は本当にラツカが必要だと思ったから・・・（うるうる）」

純神天使クリスのウルウル攻撃、もともとお人よしのラツカはうつと唸った。

「わ、分かったから、分かったから泣かないの、もー！」

「（にや）ありがとうラツカ！・・・じゃあ先に行ってるから落としたリンを回収して上空に移動する。」

タンコブを撫でながらリンはクリスに詰め寄った。

「お前俺のやり方じゃ駄目って言ってなかったか！？」

「だーかーらー言ったじゃない、めんどくさくなったんだもん」

「もんじゃねえよ！本当天使って自分都合だね！」

「可愛いからいいの！」

いいのじゃないから！

「だってあの二人が居なきゃ、巫女そろわないわけだしー・・リー
ファの『繁栄』ラツカの『永久』は欲しい付属効果だったんだもん、
だもんだもん」

「だもんっていったら許されると思ってるだろ」

「思ってるけど？」

リンは殴りそうになった右手を押さえた。

「もしクリス村で喧嘩になったらどうするんだ？」

「決まってるじゃない」

「『喧嘩両成敗』よ」

ガクガクブルブル・・。

「さあー次行きましょう」

金と火

錬金をつかさどる金の女神、エレストはいつも自分の家である『金豪籠殿』にて引きこもり、何かを作っていた。何を作っているのか本気で誰も知らないという・・・。

クリスは滑らかな柱を見つめながら、売ったら高そうだなと考えていた。

「久振りじゃな、クリス・・・昔知恵比べをして以来かな」

「そうね、エレスト・・・相変わらず・・・ってどこ？」

長い銀色の髪の毛が床をすっぺいても気にしないらしい。

「何作ってたの？」

「何も」

「何も？」

「こんなにも煙がもくもくとあがっているのに？」

「ワシは探求していたのじゃ」

長い髪の毛がうっとおしかったらしく、前髪をたまねぎのように持ち上げ束ねた。

「世界の物質をな」

「根に持つてるのね、知恵比べで私に負けたこと」

「当たり前じゃ、これでも『錬金』の巫女・・・すなわちすべての知恵を駆使して作り出す金属・・・」

「だーもう、いってそういうことは」

「いくら賢いお前でも、世界のありとあらゆる物質の成分生成などわかるまい」

「もういいってば・・・で？私の用件聞いてくれるかしら？」

「よいぞ」

「まだ何も言っていないってば」

クリスはうんざりしたようにうな垂れた。まあ自分も負けたらそっとなっていたかもしれないが・・・知枝の女神候補はいくらでも居る

が、誰一人クリスに挑んでは敗れた。

神の中でも許された、選ばれたものしか読むことができない世界の理の書を唯一読んだことがあるからだ。・リンもあるけれど、誰も信じないので論外

「クリス村に移住だろ？よいぞ、お前がいつ何時ワシの挑戦を受けてくれるならばな」

「いいわよ、勿論」

めんどくさくなってクリスは許可した。

・負ける気もしないしね。

『ひしようでん 緋翔殿』は灼熱の劫火の中で守られる、というよりは覆いかぶさるようにそこに鎮座していた。もっとも最下層の地獄に近い場所と呼ばれている。

「おおーいラオー」

普通の天使が入ってしまったらたちまち穢れる、もしくは焦げるが、悪魔のリンには業火はなれたものだった。よく閻魔のところいつてるし

「おや・リンか、久しいな」

「よ」

閻魔は魂の罪の振り分けをする裁判員で、ラオは罪状を言い渡すのが仕事だ。

「書類の仕事ようやるわな」

「ふふ・リンもいい加減やらねば、山ができるぞ」

そもそも神にははつきりとした性別がないが好んで女の姿を作る。そのなかでもどっちつかずの姿をしているのがリンとこの炎をつかさどる女神『ラオ』であった。

というか元老院の中ではリンとラオは男神と判断している人たちも多々いる。

「山どころか・山脈ができてるだろうな」。はーっはっはっは！

憂鬱」

「・・・で、世間話でココに来たわけではないのだから？」

「そうそう、クリス村に来いよ」

「断る」

そつくとーっ。

しかしめげるリンではない。

「仕事なら向こうでもできるしさ・・・のーんびりできるぜ」

「ふふ・・・私にそういうことは通じないぞ」

「苦っ・・・」

この真面目人間め！

・・・しかーし、馬鹿なリンちゃん一応考えてる。

「クリス村なら、安全に彼氏にあえるぞ」

びく、反応した。

にやあぁーリンは口が裂けんばかりに笑った。

「たあしつかぁー？レベルはそこそこの大天使だったけー？ま、レベルは高くても神レベルの称号の高さが違うからなー・・・逢引するのはココだと彼氏が穢れるしー、かといって向こうに言ったら騒がれるし？」

ゆれてる、震えてる、後もう踏ん張りだな。

「彼氏つれてクリス村初結婚式とかあげちゃったりしちやったりしちやう？」

「け、結婚など・・・！そそそ、そんなのまだ早いのではないか！ま、まだ手、手しか繋いでないし」

お前は純粋な中学生か

自分でも言うのもあれだけど、こいつ美男子みたいな顔して乙女思考だな・・・。

「分かった！そこまでいうならクリス村とやらに移動してやるっ」

「せーんきゅー」

「・・・け、結婚・・・」

リンは頭がかゆくなった。

音と覚

聴覚や音感覚をつかさどる『音』の女神アイリーン。彼女は12神の女神の中で最も心穏やかな人であるが、自分の耳に耳障りなものが入ると音を発狂させる、悪い癖があった。故に彼女は悪魔属性でった……。アイリーンの住む『麗響殿』れいきやうてんには最近意外な客が住んでいた。それは・

悟り、心理、人の心をつかさどる『覚』の女神ウイルマ。

人の心を熟知しその人の性格すらも見通すことのできる彼女は、いろんな神々の相談役として有名、故に天使属性であるが、あんまりにもいろんなことで相談されすぎて耳年増になってしまい（神は長生きだからあながち間違っではないが）うんざりしたので最近アイリーンのところでお世話になっていた。

クリスとリンは神殿の一番高い塔の上で座り込んで会話していた。

「ウイルマが『鐘鼓殿』しやうこてんにいないからおかしいと思っただのよね」

「まさかアイリーンとここにいたなんてな・都合いいんだか悪いんだか・」

「そうねー」

うつむとふたりは同時に唸った。アイリーンにウイルマ・・ともに何かに執着の持つことのない女神であった。なので交渉するのは難しい・・お願いする前に話を聞いてもらえないのでは手の打ち様もないし

さてどうしようか

「どうするよ」

「そうねえ、・・・。そうね」

クリスは可愛らしく首をかしげた後にぱつと笑った。

「拉致るー！」

「・・・まーできるならそれでも良いけど」

リンはいい加減突っ込むことを止めた。

「じゃあクリス村に帰って召喚しましょう」

「そーだな！・・・なあクリス？」

リンは真剣な顔でクリスを見た。

「一々俺らが出向かなくても、最初から召喚したら良かったんじゃないの？」

12神は同等の力を持つが、クリスとリンはエデンを支配することのできる権力がある。即ち12神より上だからいつでも無条件で召喚できるのだ。

「あのねえリンちゃん」

クリスは指を鳴らし、クリス村に移動した。

びゅおおおおおおおおお！！！！

村は突風で巻き上げられ、何人かの村人は吸い出されて行った。

「皆一気に呼んだら皆から責められるでしょう？」

「あ、そっかー」

「・・・そっかーじゃなあーい！！！！」

叫び声にビツクリして振り返ると村人がいた。木やら何やらに必ずにしがみついている。

「仲間を呼びにくいのは良いけど、穴塞いでから行けよ！！！！」

村人がそう叫ぶとクリスは穴をみた。

そついえば放置してきてたっけ？壊れるの思ったよりも早かったよつだ。

「・・・ふ、ここで消え去ってしまうならそれは天命だったのよ」

「天界でそんな定めはないでしょう」

「ヴァニラ五月蠅い。飛んでいくほうが悪いの！」

クリスは頬を膨らませツーンとそつぽを向いた。

この我侭自分主義女神が！！

「で、クリス・・・ボクはなんで呼ばれたのかな」

「ワタクシも、気がついたらここに居たですよ」
アイリーンとウィルマは不快ではないらしいが、とにかく不思議で堪らないらしい。

「あんたらこれからクリス村に住むから。さー風穴封印しましょー」
「「ええ!?!」」

流すのと同じのりで凄いことを言い逃げた。

もう突っ込むのも疲れた12神はクリスについていき、広場に着いた。

「さー並んでー」

12時の方角に『光の女神』クリスが立つ

11時の方角に『氷の女神』ヴァニラが立つ

10時の方角に『水の女神』ルミが立ち

9時の方角に『土の女神』ラツカが立ち

8時の方角に『金の女神』エレストが立つ

7時の方角に『覚の女神』ウィルマが立ち

6時の方角に『闇の女神』リンが立つ

5時の方角に『雷の女神』ラゴウが立ち

4時の方角に『風の女神』ルカが立ち

3時の方角に『草の女神』リーファが立ち

2時の方角に『炎の女神』ラオが立ち

1時の方角に『音の女神』アイリーンが立ち

風に飛ばされまいと必至にしがみついている村人達は、不思議な光景を見ることになった。

キラキラキラ・・・星の粉でも舞うかのような和らげで美しい光。何処からもなく響く美しい幻想的な交響曲が流れ、音に導かれるように花びらが女神達を飾る。そうして女神は踊りだした。

ふわ・・・大地が光を発し空は色々な輝きを見せ、精霊や大気他の神々が喜び見物にやってきた。

「綺麗」

エリンは素直に感想を言った。

壊れて穴が開いた結界が徐々にふさがれていき、新たな結界として強化した。少しして彼女達はころよしと判断したのか全員が同時におじきをしてダンスを止めた。

「どっはぁー疲れたわいなあ」

最初に声をだしたのはラゴウだった。

「やはりこういうのは正式な服に着替えないとですね」

「まーまーヴァニラ良いじゃないの、成功したんだからさ！」
空に変化が生まれた。

「わ・雲だ！あ、風も吹いてる」

「ルカやエレストが来たからね、リーファの効果で村のところどころに草木が生えたし・ラッカのおかげで野菜が育ちやすくなったわ」

クリスは嬉しそうに笑った。

「村長のクセに自分のコトバツかだな」

エースはボロボロの格好でさういうとクリスは首をかしげた。

「あたしの村なんだから当たり前じゃん？」

こ、こいつ！

「あたしの村では宗教は一つだけね！『唯一神のみ信じることを許可する』」

「ほー」

リンはクリスの首根っこを掴んだ。

「して、その唯一神様のお名前は？」

「『クリス』ちゃん」

ペコちゃんのように下をぺろつとだした。

「くくくぶざけんな！！」「」「」

「11神もいるのに私達の存在否定ですか貴女！！」

「いーじゃん、どうせヴァニラなんて誰も支持しないってー」

「ぶ」

こおおお、氷の吹雪が吹き荒ぶ。

「ふざけるのもたいがいになさい　　つつ！！！！」

「きゃあ　　あ（棒読み）」

新しい仲間を見ながら、村人達は先を不安に思うのであった。

「・・・村人がたったの10人しかいないなんてね・・・」

クリスは村人の住民票を見ながらぼやいた。穴のせいで中々の痛手だ。せつかくリンに35人も集めさせたのに、25人も転生してしまった・・・。

「集めに行くのもめんどくさいわね・・・もういいや」

クリスは人型化しているクグリの入れたお茶を飲みながら溜息をついて、魔法でマイクを取り出した。

「ピンポンパンポーン！村長からの命令です」

「伝達ではないのですね」

「広場に集まりなさい」

広場前に建てられた塔のような建物のベランダで、パラソルの下でクリスはティータイムを楽しんでいた。集まった村人は大声をだしてクリスにそろったことを伝えると、クリスはコップを置いた。

「初、クリス村行事、ラブ・ドキ・フォークダンスよ！」

「・・・は？」

村人達はポツカーンと口を開けた。しゅん。12神がベランダにそろった。

「仕事中だったのですけど？」

「なんや？なにするんや？」

子牛を抱っこしたままリンは健康的に徒歩で階段を上がり、塔のベランダまでやってきた。

「俺、牛の出産と子育てにいそがしんだけど？」

「黙れ！」

クリスの一喝。

「村が廃墟となってもいいのー!？」

「そんな急がなくても、この村も時が緩やかに流れてるから村人が年寄りになって死ぬことはないんじゃない」

「ルミは馬鹿ね」

「あ？」

クリスは指をびしっとルミに突きつけた。

「私はすぐに（村人を使って）遊びたいの！」

「……」

馬鹿はアンタだと言いたくとも知の女神には言えることはないの
で黙ることにした。

・・帰っていいですか？by村の人の心

「さあいくわよ、ミュージック・スタート」

らら、らら、ららららららららららららららららららららららら
つらつらつら

「……フォークダンス？」

クリスは「そうよ」と頷いた。

「ダンスによって男女は強制的に手を触れなければならないし、相
手を見なければならぬから相手を顔で選ぶことができる、これほ
ど相応しい方法はないわ」

「つまり行事で村人の心を親密にさえ、結婚させ子をつくらうって
話やな」

「最低ですねクリスさん。あなた自分の時には全力で逃げるじゃな
いですか」

「当たり前じゃない」

何様？神様、クリス様

音楽に魔法を施してあったらしく、村人達は操られるように踊り
を始めた。

「魔法でムードを盛り上げる」

空から綺麗な花びらが降り注ぐ。

「さあレッツ婚活スタート」

ヴァニラは頭を押さえながら、他人よりも自分を優先してほしい

と思ったのであった。

踊り続けて丸一日……。さすがに見飽きたクリスたち

「でもなんやすごいんなあ、作戦通り皆自分らだけの世界にはいつとるやん」

「人間って単純」

ウィルマの一言で意識を放心させていたクリスは戻ってきた。

「さあ！ 闘よ！」

魔法で広場にハートの形の家を出した。みんな突っ込むことも驚くこともなく、導かれるように入っていた。

「なんや、ムードのないなあ」

「こうなったらもう私達の居る意味ないよね」

ラツカの言葉に皆頷く。っていうかエレストなどは既にここには居なかった。

「クリスさん」

ヴァニラがクリスのカタに手を置いた。

「こんなものがきてますよ」

「ん？」

手紙・・・ペロツと中身を見ると、エデンの法律事務所のほうからであった。

『迷い魂が混雑しています。魂回収課から苦情が出ています。賠償金を支払うようお願いします』

「・・・クリス村で死んだものは転生するようにしてあるのに」

「あの時は丁度宇宙嵐だったので、魂も飛ぶに飛ばされたんでしょ
う」

ヴァニラはクグリの入れたお茶を飲みながら正論を言った。クリスはムーと口を尖らせた。

「リン金」

「はいは・・・ってなんでやねん！」

「おおノリツッコミ」

「そんなので喜ぶのはラゴウさんぐらいですよ」

リンは抱いていたヤギをおろした。いつの間にか子牛からヤギに変わる・・・。

「村に居させてやってんだから良いでしょ」

「だったらヴァニラたちはどうなるんだ」

他の女神を指差すと皆はにっこりと微笑んだ。

「帰りましょうか？ここから」

任意でない人もそういえば居ましたね。

リンは少し考えて小切手を取り出し、金額を書いてサインして課のほうに飛ばした。

「まあいいや、どうせ金なんて下っ端から巻き上げりゃいいし」

「さすが悪魔、最低ですね」

ヴァニラに皮肉を言われても特に気にしないリン。ウサギを抱っこする。

「ねえ、ちよつとリン」

「いて」

長い髪をリーファに引つ張られ、顔をゆがめた。

「ベランダを動物まみれにしないでよ、服が獣臭くなるじゃない！」

「へえへえ、んじゃおりゃー消えるよ」

しゅん、リンは動物を連れて消え去った。

「暇ね・・・」

女の人のはらむまで時間かかるだろうし、いくら最高位の女神様だって時間をかけてに早めたら、時警察所の人や時の女神に怒られる。こいつらは相手がお偉いさんだろうと、むしろ偉いだけ高額な賠償金や罰金を請求してくるから、だれも時を操れない。

異次元に飛ぶのは見逃してくれるけど・・・。

「ヴァニラ。ゲームしましょ」

「・・・嫌ですよ、クリスさんとゲームなんて二度としないと決めましたからね」

「いやあねえー今度はお金なんて賭けないってばー」

「遠慮します」

クリスはちえーと残念がった。

「わいでえっかったら相手するで？」

「さっすがラゴウ、じゃー遊びましよう」

指を鳴らすと、クリスとラゴウの前に四角い机が現れた。その上は黒白のマスに区切られていて、チェスに似ていた。

「チェスでもするんか？」

「違うわよ。ここに・・・クグリ」

しゅるん、クグリが獣化すると尻尾の先をちよこつと切った。それをマスの上に置くと、ちいさなクグリができた。

「プチ・戦争」

この人本当女神なんやろか・・・ラゴウは本気で悩んでのであった・・・。

「さすがに飽きたわね」

この一週間、いろんなゲームを全員に強制的に挑んだが・・クリスは曲がりなりにも知の女神

一人勝ちして終わった。

「だから嫌だったんです」

ぼろぼろになった女神達は立てれず床に倒れこむ。

「よーっす、どんなだー？」

リンは鶏を頭に乗せたまま現れた。

「あれ？」

死屍累々になっっている人を見て不思議そうに首をかしげた。

「はっはっはー！お前等もフィーヴァーしたのかあ！」

違うし、何を・・と突っ込みたかったが、体力が無いのもう何もできなかった。

「ここ不思議なことに身体が重くてしんどい」

風の女神である、ルカが辛そうに呟いた。

「あ、ワイも思った」

「重力をワザと重くかけているんでしょう、もともと重力の関連ないところで生きていた我々にはしんどいですね」

「なんの狙いがあるんだろうねー」

文句を言い出した彼女らを無視してクリスは出てきた村人達を見た。

なかなか順調にできたらしい。ここまで上手く行くとはいちよつと笑える。

「後は生まれてくるだけね、さてクスリに渡しておいたルーレットのお客さんがそろそろ来るはず」

広場の噴水からサーカスのテントのようなものが現れ、カーテン

がしゃつとひかされると、そこから三角の白いのをつけた人やワツカを頭の上に乗せた人がやってきた。

「和洋ごっちゃだな」

リンは眺めながら言った。

「てかルーレットつてなんだ」

「悪いこともいいことも特にしていない死者にのみ発動される『天国or地獄』ルーレットよ、そこに『クリス村』つて入れてもらったの」

「へー」

こうやって村人を増やしていくらしい・・・。

つて、良いことも悪いこともしていない死者つて生前は一体どんな人生だったんだろう・・・。

「しかし、これでは増えすぎるのではないですか？」

クリス村は他の次元とはまた違った独特な空間。時間の流れも勿論、そこに生きている微生物も、生き物の多様、見えないだけで他には存在しない変わった新種が存在が居る。

それ以前にまず、この村でクリスたち以上の化け物など居るはずがないから、天敵の居ない、正しく楽園・・・誰も死なない、むしろ増える。

これはこれで大変なことになりそうだ。

ヴァニラの疑問にクリスは楽しそうに笑った。

「だから、行事があるんじゃない」

え、行事で人消えるの・・・？

誰もが思ったが怖くて聞けないのであった・・・。

「行事楽しみー」

「・・・」

マダ何も知らない、村人に哀れみを感じてならない・・・女神達であつた・・・。

魔物を混ぜれば混ぜるほど強くなる、誰かがはじめた実験が天界でブームとなり、沢山居た魔物はだんだんと減っていった。それと比例するように天界では魔物武道大会たる娯楽ができ、腕を競うやからができていた。

リンは無論、例外ではなかったが、他の人とは圧倒的にやり方が違っていた。

「もうすぐ生まれるな」

「あら？早かったのね」

他の人は魔物を容器に居れ、細胞を分解させ合体させる + 〓

みたいな感じで行っていたが、二人は非常に時間とお金のかかる、

+ といった感じで、別種族の両親から新しいのを作る、といった子育て方法を行っていた。

ちなみに科学的な合体を行わなかったのに理由はない。ただ前回の子育てブームが去っていなかったため、ちよつとやり方が間違っただけであった。

「よっしゃ、生まれた、獣属性の狼と、狐の混血種^{ミックス}・名前がー・クララにしよう！」

リンは狼系がほしかったらしいが、クララはどちらかという尻尾が九個ある九尾の傾向のほうが強いが、リンは気にしないらしい。

「よろしくなー」

「……」

ぶい、振られていた。

「……」

「うつといから拗ねないでよ人の家で」

「だって産まれたとたん嫌われたんだぜ！？ショックだよ」

「へーどれどれ？」

クララを見る。クララはクリスを見るとトコトコと逃げていった。「可愛げはないわね・・・まだヒト化できないうちは守ってあげなさいよ、まあ、バードにいたっては苛める分けないけど」

「あ・・・そのバードなんだけどさ」

リンは逃げ出したクララを持ち上げながら頭をかいた。

「幻獣界にかえさせたままかえってこないんだ・・・一応アイツ強いから平気かと思って気にしてなかったんだけど」

「何時の話よ」

「三日前」

「ただの里帰りじゃない？」

リンはうーんと首を捻った。捻った際にクララに顎をかまれていた。

「・・・心配なら見に行けば良いじゃない」

「いやあ、そうしたいのは山々んだけどさー」

リンはニカツと笑った。

「行き方わっかんねーのよ、なっはっは」

「・・・さすがリンよね、送ってあげる。帰りはバードと一緒にだから大丈夫でしょ？」

「ああ、たのまア」

魔法で飛ばされた。

「・・・あ、そういえば」

クリスはクグリが持ってきた天界新聞『お見通新聞』みとつしんぶんのとある一面を見た。そこには『合成獣VS天界警察』と書かれていた。なかなか暴れて手の付けられなくなった合成獣が幻獣界に逃げた上に、幻獣界の生き物が今までの怒りをデモにかえ、捜査の邪魔をするので、鎮圧をするらしい、なので誰も近寄らないようにとのないようだった気がするけど・・・。

「ま、天界で私らに齒向かえるのは私達以上の身分か、12神ぐらいよね」

あれでもリンは武神の称号も持っているほどだ。

「よっと」

クララを抱いたままであったことに気がつく。

「アブネーからフードに入ってたな」

リンは着ていたフードの中にクララを入れた。クララは気に入ったのか眠り始める。

「しっかしまー何年かブリに来てみたらあ・・・」

「すんごい暴動中」

「リン様！」

「お」

バードはリンに抱きつくときめぎめと泣いた。

「ワタクシの一族の大半が合成で散っていきました・・・。ワタクシのような鳥属はよもや少なく・・・」

「よくわかんないんだけど？」

「合成・・・？最近はやってるやつか？」

「獣族や植物系に翼を生やしたいがために、我らの一族が踏み台とされたのです・・・悔しくて悲しくて」

「分かった分かった、俺がどうにかしてやるから泣くな」

バードの頭を撫でると、町のほうでスゴイ破壊音が聞こえた。

「うわあああああああ」

天界警察官が、宙を飛んでいった。

「・・・よつええ・・・」

「おお、コレはこれは、天魔師様！かようなところで何を？ココは危ないですお下がってください」

「はいはい、で？君らぶつ飛んで何やってんの？」

「うわあぁつと言いなから飛ばされていく。ボーリングよりも軽々と見える、なんだ弱いな。」

「合成獣キメラが暴れてまして」

「キメラあ？」

ザッ！

砂煙が去るころに、その姿が現れた。

「・・・ほう」

『ガルウウウ・・・』

ライオンの顔にドラゴンの翼、腕に呪蛇の縞模様、瞳は碧い

「なかなか強欲なヤツが作ったらしいな」

『ウガアアアアア』

「天魔師様！？」

リンに襲い掛かった。

中

今日は晴れのち・・ボロツボロだろう

『ガアアオオウ!!』

キメラがリンに飛び掛り、その血肉を切り裂き喰らおうとしたが、リンはテレポートで避けた。

「お？」

服の先つちよが破れた。

(幻獣界ではちとフリだな)

リンは襲い掛かる獣の攻撃を避けると、警察の横に飛びのいた。

「おい」

「は?!」

警察官の手にクララを置く。

「持ってた」

「リン様!加勢致します」

「いらん」

リンは肩を回すとニヤリと笑った。

『ウウウウ!!』

「最近運動不足で丁度良かった」

リンは武術の構えを取った。

「かかって来いよ」

『牙ア嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼!!!!』

そのころクリス

「ヴァニラー」

「なんでしようクリスさん」

バニラは花の水遣りを中断し、籠を持ったクリスのほうを向いた。
「ヴァニラって法廷のほうで顔広いよね」

「・・・ええ」

クリスは新聞紙を見せた。

「合法・・・ですか？私は興味ありませんが、これが法廷と何の関係が？」

「訴えてほしいの」

「はい？」

クリスは腰に手を当てた。

「合法のせいで娯楽に金使われて儲かっているのはいいことだけど、むだな殺生は愛と豊穡の女神としては許せないと思うのよね」

「おや、珍しくまともですね」

「・・・というのは勿論建て前で、本音は調子にのって私の称号を奪いにくるやつがいるから」

幾千という数の神々が居れば一つや二つ称号はつくものだが、つかないやつは死ぬまでつかないこともある、それってけっこう馬鹿にされるので、他人の称号を奪うのだ。

称号もちの神に勝てば、勝っているということ、自動的に手に入るわけだ。

「クリスさん、信じられないぐらい肩書き沢山お持ちですからね、いつそ差し上げればよろしいではないですか」

「いやよ、たくさんあったって努力して手に入れたもんだし」

クリスは籠の中のクッキーをヴァニラの家ポストの中に入れた。「それに、沢山あるほうが嬉しいでしょ？」

袋一杯につめられたクッキーをポストから取り出し、ヴァニラは頷いた。美味しそうなクッキーの香りが漂う

そのころにリンはキメラを倒し終えていた。

「・・・こいつ」

リンは切り刻まれた服のところどころを見ながらぼろぼろに倒れたキメラを見た。この服気に入ってたのに・・・。

「どうしましょう、始末しましょうか」

警察が剣を向けた。

「やめろよ」

リンは警察官を蹴飛ばし、クララを回収した。

「俺が飼う」

「は?! し、しかし・・・このキメラは持ち主を殺し、何人も傷つけたのですよ!？」

「本人だって任意で産まれてきたわけじゃないんだろ? よ、まーいじゃん? 俺なら安心だろう?」

「いえ! しかし」

「あゝもう、あ・の・さ?」

がし

「ひ!？」

リンは警察官の頭を掴み、殺気のこめた魔力を少し開放した。天使族である警察官はそれだけで真っ青になり怯える。

「俺は頼んでるんじゃないの、俺が決めたことなの、俺が誰だか分かってる?」

警察官はコクコクコクコクと頷いた。

「じゃ、もう何もいわねえよな?」

「も、勿論です! こ、今回はお疲れ様でございましたあ! ! !」

「はい、どーも、バード」

「了解しました。帰ります」

リン姿が消える。

と、警察官は恐怖からの開放に気絶した。

下

クリス村に直帰すると、クリスと目があつた。

出会つて早々の一言

「お帰りなさい、お父さん」

「いやお父さんじゃないんだけど」

クララを抱いたリンを見ながらクリスは微笑んだ。ただの厭味らしい。

「法廷に行くわよ」

「あ？」

なんで法廷に行くんだという顔をした。すると何故か手にはハリセンが

「私にこれから八つ当たりされるのに行くの、どっちがいい？」

「いきます」

何かよく分からないけど、イライラしているらしいので、無難に何も言わず従うことにした。クララを家にしまい、クリスの庭をふとみると、煙を上げて倒れている人が五人もいた。

・・・なんとなくわかった。

エデンの最高裁判所、審判者はイエスト・スリキ・訴えたのはこちら、クリス村チーム、相手は合成獣を開発大幅に飛躍させた合成チーム。両者は表面上は微笑みあっているが、内面では睨み合う。

「では、裁判を開始する」

カーン、コングが鳴り響く、裁判員達をのせた椅子や机はは上空に逃げる、両者が居た場所はバトルチームに変わる。

神々の勝負は最高審判になると力づくになる。

「・・・ふ、ヴェニラの訴訟を素直に聞き、多額な賠償金を支払えば

痛い目を見ずにすんだものを」

「いくら請求したんだ？」

ヴァニラがリンの耳に囁く。

「そりゃ、無理」

向こうのチームも必至らしい。

「いでよ！合成ドラゴン！」

鎧に身を纏った獣特有の爪のアル腕に、ドラゴンの身体、尻尾には八岐大蛇がうごめいていた。

「あ、八岐大蛇！」

リンが指差した。

「俺のじゃん、俺の！審判」

審判の判決。『問題なし』

「なんでだよ」

「闇の森放置してるから神権なくなってるんじゃないの？今度申請したら？」

リンは拳を握った。

「ふ・・・この俺を怒らせたな」

魔法でリンは真っ黒なツルギを取り出した。

「真っ二つにしてやる！」

「お待ちなさい」

ヴァニラが氷でリンを凍りづけにした。カキン・・・重力に従い下に落ちる。と、丁度リンのいたところにとす黒い炎が吐かれた。

「はーはっはっは！さすが知の女神、その通りこのドラゴンの炎を闇属性が浴びると、その能力を打ち消しにしてしまっ、毒をもって毒を制す、だ！！」

氷から這い出たリンは二人の女神を見た。

「アイツら馬鹿？」

「そっね、かなりの馬鹿ね」

「私、知の女神ではなく、氷の女神なのですが、知はこっち」

クリスを見る。

「光属性がこいつの炎を浴びると、しなびて死んでしまうのだー！
なっはっは」

「聞いちゃいない。」

「しょせん戦いに向いていないのよね、インテリ系の奴らって」

「どうするよ」

「潰しましょう」

三人は魔力を解放した。

ドラゴンが怯えて、逃げ出した。

「あ！こら」

「やっぱりな」

リンは開発チームの後ろに立つと、めがね君らの背中を蹴飛ばした。飛ばされた彼らはヴァニラに氷付けにされた。

クリスがニコツと笑った

「私達には向かったこと、思い知りなさい」

金色に輝く光がクリスの両手から放たれた。

『神の裁き』

光がチームを包み込んだ。

・・・後はご想像にお任せしよう。

「勝者クリス村」

こうして、合成獣は禁止され、クリスたちの畏怖が知れ渡り・・・

「私のお見合いの予定が延びたのですが」

「どんまそ」

ヴァニラの婚期ものびたのであった・・・。

命がけの調停、勝てば賠償金ゲット、負ければ支払い、犠牲の多い戦いでした・・・から次の日

「ヴァニラにお見合い話があったなんて驚きだな」

クリスの家で御菓子を食べながらリンは言った。お茶を汲みリンの前にクリスは置くと言った。

「まあ、だまつてりや幼顔だから可愛いわよヴァニラ、身長低いし「でもさ」

典型的な仕事人間。仕事は完璧だが料理がどうしても

「しつこいんだよ」

「しつこいのよ」

そのほかのことは完璧にできるのに、料理だけは味付けがなんかしつこい・・・。彼女もそれをコンプレックスに思っているらしく、ヴァニラの前で『しつこい』というだけで氷付けにされる。

「むっこい・・・」

「そういえばクリス様」

クグリ（人型）は洗濯物を持って現れると、ニッコリと微笑んだ。

「どうやらそのお見合いのお相手、ヴァニラ様がゾツコンだとか」

「ぶ！」

飲んでいたお茶を吐いた。

「「うっそおおおおおおおおおお！」」

「うーん、今日もいい天気ですね」

ルミが来てからこの村にも雨が降る、が、今日は雲もないし、晴
だけだろっ・・・。

「なにやらしいことが・・・」

「ヴァニラー！！！！」

クリス& a m p ;リンが言葉の通り飛んできた。

「な、なんですか？」

「ヴァニラ好きな人いたなんてどうして黙ってたのー?!」

「な！何処からその情報を」

「いいじゃないどこからでも」

「そうそう」

リンはヴァニラの手を掴んで躍らせた。

「こんなおもしろい・・・どうして黙ってるんだ？俺たち仲間だろっ」

「ええ、すいぶん仲間ですこと」

クリスはリンを殴り飛ばすと、ニッコリと微笑んだ。

「勿論私達、応援しているから！」

「含みのある応援ですね」

二人の後ろには12神・・・。

「ヴァニラ好きなヤツおつたんか・・・ぎやはははー！」

カキン

ラゴウカキ氷の出来上がり。

「ヴァニラ！私ら応援してるからね」

ルミルカも頷く。

神様は暇なんです。

(こんな人たちに付きまとわれたら破局間違いなし！それだけは避
けたい)

ヴァニラは拳をぎゅっと握った。

「私のことは・・・放って置いてください！」

雪吹雪にまぎれてヴァニラは姿を消した。

「わーい、まってよー」

・・鬼が居た。

「まアまって」

クリスマスが止めに入った。

「いくら面白いからといって、ヴァニラを追い掛け回してたら何の進展もないわ」

「そうだなあ、ただでさえツンデレだもんなー」

ツンデレ？とラゴウが呟いたが無視して。

「ココは落ち着いて、気配を消し、尾行しよう」

ウィルマの言葉に皆は静かに頷き、気配を消した。

「放っておいてあげたら？」

エースと結婚したルピンが本を片手にかわいそうなものを見る目で言った。

「ばれたら殺されるんじゃないの？」

「いや、それはない」

自信満々にクリスマスは言った。

「ヴァニラだから羞恥のあまり自害しようとするはずよ」

「もっと駄目でしょう」

ロピンの言葉も虚しく届かず、耳をすませたアイリーンが「あ」と声を漏らした。

「どうやらエデンのほうに向かったみたいよ」

「じゃあ」

「行こうー!!」

テレポートで後を追った神々を見た村人達は、呆れながら自分達の生活に戻った。

上(後書き)

みんなはヴァニラがダイスキ

「人間界にさ」

「うん？」

「人の恋路を邪魔するものは、馬に蹴られて死んじゃうつてらしいわ」

「へえー」

12の女神達はそれぞれ望遠鏡を取り出し、ヴァニラの行動を除いていた。

「私達、邪魔なんてしてないわよ」

ルミは小声でリーファを諭したら、横からアイリーンが頷いた。

「見守ってるのです、ですです」

「見守ってる、ねえ」

ラツカはなんともいえない表情をしてから、木の上に居るリンとクリスを見上げた。

「本当に、見守るだけのつもり・・・？」

「マサカ」

リンは望遠鏡を顔から離して笑った。

「こんな面白いイベント、ただ見るだけじゃ面白くないだろ？」

「ばれたら殺される、ばれたら殺される」

「ルカは臆病ねー」

クリスはスカートの裾を持ち上げて、木からおりた。

「大丈夫よ、ヴァニラは許容範囲超えたら溶けるから」

「？」

「ふっふっふーそのうち分かるって」

クリスは魔法で姿を見えないように全員にかけた。これでストーリーがしやすくなった。

「じゃあ行くか」

「ああ、でも皆わかっているとおもっけど」

クリスは人差し指を立てた。

「ヴァニラだって、伊達に高位官じゃないんだから、着かず離れずでいきましょう」

「おう」

「美しい友情だねえ」

「ウィルマ・置いていくよー」

一方ヴァニラはヴァニラで警戒していた。

（あの人達が調子乗ってしまったら、こちらの殺気もものともせずキツト高みの見物にくるはずです）

そうなたら理性が持つかどうか

（嗚呼、でもあの方の目の前で鬼になどなれない、けれど、あざ笑われるのは趣味ではないですし）

警戒というより、悩んでいた。

せつかくこれからデートだというのに、クリスさんたちのせいで憂鬱になってしまった。12神の中で結婚できないナンバーワンという汚名まがいの予想を覆すチャンスだというのに・・・。

邪魔されては、それが現実のものとなる・・・それだけは避けたい
！！

「あれ？ヴァニラ難しい顔で天下街にいったぞ？」

「キツトこれからデートなのよ・・・相手は誰かしら」

「イケメンちゅうのは、確実やな・・・ヴァニラ面食いやし」
ラゴウの言葉に頷く。

「ヴァニラと付き合うだけの穏やかな人物ってことだな」

ウィルマの予想に加え、エレストも補足した。

「あの礼節を重んじるヴァニラだから、そこそこの身分で、礼儀正しい、イケメンだろうな」

「あーもう」

リーファは手を組んだ。

「わくわくするー！一体どんなひとなんだろー！！」

「し、こっち向いたわよ」

ヴァニラは不安を消せないでいた。

（まさか、あの木陰に隠れて・・・いいえ、もう少し仲間を信用しましょう、曲がりなりにも最高位の女神、12神の称号をもつ方たちが、ござって高みの見物なんて・・・してそつで嫌です・・・）

溜息をつきながら、約束の場所にいく。

「図書館前？」

「お、誰か座ってるわよ」

ラツカの言葉に皆は身を前に乗り出した。

「あ。あいつ」

「ん？リンしつとんか？」

「ああ、確か・・・名前は・・・」

ベンチで読んでいた本を閉じると、彼はゆっくりと立ち上がった。優雅な無駄のない動作・・・ありきたりな日常行動の中でも、こつこつ美しいのはこの方しか居ない・・・

「どうかしましたか？ヴァニラさん」

「あ、いいえ、少し・・・」

見惚れてました・・・だなんていいそうにならないで私！！！！

「少し・・・？」

「いえ！なんでもございせんわ」

「そうですね、では、今日は予定していた通り、森の奥にある鍾乳洞を見に行きましょう」

「はい」

二人並んで歩けば、身長差がはつきりと出る。魔法で身長を伸ばしてもいいけれど、ありのままの私を見てほしい・・・ああ、この考えをクリスさんたちに読まれた暁には、舌を嚙んで死ぬしかないですね

「だって」

覚の女神のウイルマは神の心すら読み取れる。

さっきの心の声を一言一句漏らさずに伝えたので、案の定女神たちは笑いで悶絶していた。

「チビなの気にしてたんだあー！あっはっはっはっは！」

「ヒーヒー！！っていうか、心の声超ピュアなんですけど!?!」

「腹あよじれてまうわー！！げらげら！」

クリスはリンのほうを見た。

「あれ、イル・ヴァージンね」

「確か、あいつ世界の理の書に興味を持っていたな」

「私達は強制管理しているあの本に・・・？」

二人は並んで歩く、恋人を見た。

「・・・まさか、本狙いってことはないわよね」

「ウイルマ心の声は読めるか？男のほう」

「うむ」

ウイルマはイルを見据えた。第三の目が開く。

「・・・見えん」

神を越えた!?!

「ますます怪しいわね」

「・・・ああ」

(何だアイツ・・・やけに無心だな、不自然なぐらい平常心・・・おお)

ウィルマは手を打った。

「もしかしたらアイツ」

「ウィルマー置いていきますよー？」

アイリーンの声を聞いて急いで追いかけていった。
ちよつと待ってよー

ドキ、ドキ、ドキ・・・心臓が痛い。正直神様なんだし、酸素無くても生きていけるのに、どうして心臓なんてものがあるのでしょうか、まったくもって神というものが不可解です。人間ですら自分たちの身体の構造をよく知っているのに、我々神がどうして知らないのでしょうか、それもそれはず我々は高貴なる存在で、一人ひとりからだの構造が別の気体で・・・。

「ヴァニラさん・・・？」

「ひゃ！？あ、すみません、ぼうつとしていました」

「そうですか、階段ですから、気をつけてくださいね」

「は、はい」

二人は鍾乳洞へと入っていった。

クリスたちは一旦あの二人が最後まで降りるのを待つことにした。

「ヴァニラってば、ピュアだったのね」

リーファは行動を始めてからずっと、にやにやしている。ラツカはそんな姉妹神を冷めた目で見ながらクリスとリンのほうを見た。

「あれ？」

ラツカがクリスたちを見て不思議そうな声を上げた。

「いっちばん喜んでいそうなのに、冷静なんだね」

「ああ・・・」

面白いといえば、面白い。

「ハッピーエンドなら、大きな邪魔をしないわ」

「イル・ヴァージンは枢密院の中でも権力者の息子だったな・・・何番目かは忘れたけど・・・兄弟の中でも一番欲深い・・・」

「ヴァニラを利用する気じゃなければいいけど・・・」
「ウィルマが後からのんびり、やってきた。」

「やれやれ、皆歩くの早い」

「さあ、いくぞ！」

ウイルマが着いたとたん一向は歩き出した。

「えー…待ってくれよー」

薄暗い洞窟の中でも、闇の精霊の僅かな光で道を照らす。

ここは密に神々のデートスポットで有名な場所であった。ヴァニラがそんなことを知っているかといえば、知らない。

「さすが、天界の中でも素晴らしい癒しスポットですね、闇の眷属でありながら、光の眷属を癒す…はあ、魔力が洗われるようです」

「……」

「…イルさん？」

「っああ、そうですね、ヴァニラさん」

ニッコリとイルは誤魔化すように笑った。

「？」

クリスたちも遠くから眺める。

「何を考えていたのかしら」

「ウイルマは？」

「後ろ」

エレストの指す方向を見ればまだ上のほうであった。

実は彼女が一番運動神経が悪かったりする。

「たく、遅いなあ」

洞窟の中でも自由に動けるリングが腰を上げ、迎えにいった。

「……ん？」

ヴァニラはなんとなく後ろを振り返った。

（いま、何かが動いたような…）

いるのは精霊の闇眷族だけ

「イルさん、もうそろそろ上上がりま」

「ヴァニラさん」

両肩を掴まれた。

「はい？」

「……………」

そのまま、黙り込まれた。

真顔で黙れると、困惑してしまう。え？私何かいってはいけな
ことを言ったのでしょうか。

「あの・ヴァニラさんは世界の理の書を読んだことがありますか
え？」

クリスは目を瞠った。

「ここで聞くの?!」

「ねー世界の理の書って何？」

ルミの言葉にエレストが答える。

「神ですら選ばれたものしか解読できない、全てを読むのは不可能
だとされているこの世の全てを描かれた本だ。コノ世界を知ること
は、神だとして最大の罪、アレは罪の書なんだ」

「ナンだつてそんなものあるの？」

「この世の終わりのために」

「大層な話じゃな」

ラオウは鼻で笑った。

「本当にあるのかそんな本」

「あるわよ？」

クリスは即答した。

「読んだことあるのか？」

「あるわよ？」

クリスの余裕ぶつたセリフに對抗心を燃やしたエレストが

「どこまでだ？私でさえ最初のくんだりしか読んだことがない」

と、言った。クリスは首をかしげた。

「全部よ、リンと一緒によんだの、読んだときが何時だったか忘れてけど」

「はっはっは、嘘をつくな、これまでもあれを読んだことのある神などいないはずだ」

エレストが笑うと皆も笑った。

「クリスだけならともかく、リンもでしょう？嘘ばかり」

（私だけなら信憑性あるって、リンとだけ馬鹿にされてるのかしら・・・）

「あの」

クリスたちは黙った。

「私は読んだことありません、残念ながら・・・あの本はかなり前から天界図書禁止金庫から、どなたかが持ち去ってしまい、何処にあるかすらも分かりません。それ以前にあの書を読むことすら罪と、夢と幻の神が禁止なさっていますから、私は、興味も・・・」

「あ、そうですね・・・いえその」

肩を掴んだまま、イルは思案するように顔をそむけた。

「なんででしょう？」

「・・・あの」

「はい」

イルは・・・溜息つくと、掴んでいた手を放した。

「なんでもありません・・・」

リンは、ウィルマを抱っこして戻ってきた。

「お？なんだ？深刻そうだな」

「そうね、理の書のことをヴァニラから聞き出そうとしていたわ」

「あ？逸れ狙いで近づいたのか？許せないな・・・やるか」

「まあ、またんか」

抱っこされていたウィルマが溜息をついてみんなを見た。

「才色兼備の神でありながらお前達がちらとも恋慕の話を聴かない

と思ったら、・・・呆れた」

「なんや」

ラゴウは首をかしげた。

「はあ、・・・あの男はの、ああして余裕ぶっているが、ヴァニラと同じく・・・テンパっているんだよ」

「・・・え？」

イルは悩んでいた。

ヴァニラは誰も知っている生真面目な女性、だからこそ慎重にしなければ何時幻滅され消えられるのか分かったもんじゃない

だからこそ、辛い。

「あの、あの」

心配そうなヴァニラの顔を見る。

本当は抱きしめたいし、手も繋ぎたい、口付けだって交したい・・・それ以上だって、好きならばこそだが・・・なんにしる、彼女が淑女の中の淑女だから、どこまでがアリで何処までが駄目なのか、分からない。なんと理性を飛ばしそうになったことか・・・さっきはとつさに変な会話で回避したが・・・

(駄目だ、私は・・・へたれすぎる。いや、彼女が特殊すぎるんだ)

二人は鍾乳洞をでるために、階段を上がりだした。

「なんだ、そんなことか」

リンは、安心したように言った。

「だったら、任せろ」

リンが精霊を操って一気に二人を襲った。

「きゃああ!？」

「ヴァニラさん!」

二人は転げて落下して行った。鍾乳洞の出口を塞ぐ。

「二人つきりにすればいいんだろ?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

親密度はアップしただろうケド、リンの死亡フラグも上がった。
後日、ヴァニラが結婚すると正式に上に発表

そして

「よくも、人をコケにしてくれましたね・・・」

「ゴゴゴゴゴゴ・・・怒りの炎が見える。」

「ねえ、クリス・・・誰がとけるって?」

「そうね、誰かしら」

高位クラスの女神11人、行方不明になったとかならなかつたとか

「さて、第二回目の行事でもしましょうか」

クリスの言葉にリンは反応した。

「死ぬのか」

「行事」死を直結させないで」

前回自分で言っておいて、否定するクリス。放送で村人は広場に集められる。

「今回の行事は『けいどろ』よ！」

「けいどろー!?!」

村人達は驚いた。

「けいどろって、警察と泥棒にわかれるんだよな」

「村人全員でやるのか?多くないか?」

「いやいやいや、いい年こいて恥かしいって」

村人の言葉にクリスは

「黙れ」

と、一蹴した。

「ルールを簡単に言うわよ、ココでは神の力を一切使用できない」

クリスがそういうと、『言霊』という名の呪いが発動し、他の神も能力 ちから が使えなくなった。

「そして、けいどろの警察は、私が今から投げるカードに刺さったヤツで、刺さらなかったヤツが泥棒よ」

カードを投げると、まずエースに刺さった。

ざく

「いってえ!?!」

ラゴウやヴァニラ、ルミが刺さる。

「痛い!?!これ洒落にならなく痛いんだけど!?!」

「ほんまに刺さったやん!?!」

「ちゃんと言ったじゃん」

村人の数人が刺さったところでクリスは次の説明に入る。

「泥棒は、ただ逃げるんじゃないわよ」

「ん？」

「本当に盗むの、ただしクリス村範囲でね」

「!？」

神たち以外はなにをいわれたのかわかっていない反応をした。

「本気の『けいどろ』よ」

彼女の目はマジでした。

「警察は泥棒を捕まえたら広場に連行すること、もちろん助け出さ
ルールもありよ!・・・出られるものならね・・・」

「・・・」

みんなの顔が青ざめていく。

「そして・・・警察は」

クリスは一拍置き、目を閉ざし、目をカツと見開いた。

「泥棒を『参りました』と言わせたら連行可能!!!」

「ちよおおおー!？」

「それって何!? 肉体言語!?!？」

「警察は泥棒できない代わりに、泥棒の持っていた資金を貰うこと
ができるの、捕まった時点で泥棒の手には何も残らないわ」

「無視!？」

クリスの目がぎらぎらと光る。

「さあ、やるわよ、全員捕まったらおしまいつて思っちゃ駄目よ、
神がいる限り、すぐ終わったりしないわよ」

「制限時間は一応・・・三日で良いな」

「リンの言葉に皆は目をむく!？」

「質問」

エレストが手を挙げた。

「何？」

「それはほかの者から奪うのもありか？」

「有」

「いや！？良くないでしょ全然！なしなしなし！！！！」

村人の講義を無視してリンは微笑んだ。

「誰が法律だ？」

村長です。

「そうねえー、お金を隠す時間をあげるわ、クリス村内なら何処にでも隠して良いわよ」

「せいぜい隠すが良いさ」

「じゃ明日のこの時間に行事開始だから」

「おう、じゃーそういうことで」

第二回目行事は「けいどろ」

・・・村人達は嫌な予感を感じ、不安を隠し切れずにいた。

「っていうか、勝てるわけ無いじゃん」

と呟いた村人は誰だったか・・・。

「おい、クリス」

リンはクリスの家に入ると穴に落ちそうになった。

「おっと、・・えー竹串？」

穴を越えて進むと上からとげボールが続けざまに二個落ちてきた、リンはソレを軽々と避けると横から槍が四本発射され、ソレを避けるとさらに小型爆弾を打ち込まれるが、片手で消し去る。

「・・くーりーす」

「あら、リン、もう来るならテレポートできてよ」

「神の力は全部使用不可なんだろ！てかなんだこれ」

「泥棒避けよ、当然じゃない」

「よけて」

「もうすぐ盗って盗られての戦いがはじまるのよ！！」

「お前が強要させたんだろ」

「イヤなら良いわよ」

クリスは焼き立ての御菓子を隠した。

「私の家に侵入できたからお菓子を好きなだけ食べれたってのに」

「やつぱ、みんなで行事って大切だよね！！！」

リンはクリスの肩を組みながらポーズをつけた。

「よね！」

「なんや、リンはもうクリスに手綱にぎられてるんかいな」

「ラゴウ？」

クリスはキヨロキヨロと周りを見たが、ラゴウの姿は一向に見えない・・気配なら感じるけど

「ここか」

リンは最初のトラップの落とし穴に顔をのぞかせた。

そこには必至に竹にしがみついているラゴウが居た。

「・・・なにしてるの？」

にっこりしながらクリスが言うと、リンが周りに気がついた。

やりに服が刺さって動けないアイリーンに爆弾で撃墜されたエレストにとげボールにビツクリして動けないルカとソレを見ているルミがいた。

「おめーら神の力ないと雑魚だな」

「『五月蠅い！！』」

クリスが紐を引っ張ると仕掛けがもどに戻っていった。

「死ぬだろ！」

「平気よ、クリス村で死んでも生きがえられるわ、私の目の前って事件があるけど」

「それじゃあクリス村内って話じゃなくて、魔法で生きがえらせるだけだろ！」

エレストの突っ込みにクリスはむっとした。

「魔法薬だって得意よ！」

分かって言ってるんだから、性格悪い・・・。

「てか、人の家にわらわら寄ってくるな！」

「人を無視みたいに扱うな！」

こんこん

ノックがされるとヴァニラが扉を開けた。

「クリスさん？少しよろしいで」

「あ」

穴に落ちていった。

「ヴァニラアアア　！！」

ウィルマの次に運動神経の悪い女神、ヴァニラ・・・。

「あーらら」

「で、話って何？」

「おニユーの服が・穴だらけの血だらけになってしまいました」
沈んだままのヴァニラを慰めるようにラゴウはヴァニラの肩に手を置いた。

「にあつとるで」

・・・びき

「で、話というのはですね」

「ルミルカ、トラウマおいたくなきゃ穴をのぞかない」

「私、今日より結婚の準備をしに行くのでクリスマス村をあけますね」

「ああ、そういえば結婚するんだっけね」

クリスマスは机の上に大量のケーキを置いて飾りをつける

「うまげ」

「あ、こら、手！」

クリスマスはリンの手を叩く

「ということ、宜しく願います」

「ち、行事に参加してからでも」

「結構です」

「ち」

お昼に、前もって言っていた行事開始の鐘の根が鳴る。

「あら、はじまっちゃった？」

「そうそう、泥棒ってどうしたら良いんだ」

自力で出てきたラゴウが聞くと

「三時間待つの、広場でね・・・三時間だったら動きなさい、ってこと
で・・・はい」

クリスマスが手を叩くと大きなパンチングマシンが現れクリスマスの家

いた奴らを一掃した。

「いつてえ！」

「聞きたいことあったのに」

ルミル力はそういつて立ち上がった。

「それにしても、村人もそんなことして良いのかという顔をしているぞ」

エレストの言葉に反応し、周りを見ると、おずおずとしていた。

「あ、ちなみにの備考だけどさ」

リンは悠長に構えながら言った。

「泥棒は泥棒らしく、奪うのもOKなんだって」

この人盗みに行くより奪う気満々！？

「よっしゃ！盗みに行くぜ！」

ノリノリな村人がクリスの家に入っていつて悲鳴をあげた。

「・・・・・・・・」

「えっと、クリスん家は避けようか」

村人達の何人かはグループになって行動を起すようだ、エリン率いる泥棒は着々とお金を集めていた、個人的に動いている村人がリンの家に侵入していつた。

「いいの？」

ル力がリンのほうを見ながら言った。

「ああ、問題ない」

泥棒が出てきた。首をかしげていた。

「リンお金何処に隠してるの？異次元バンクに全額預けるのって駄目なんでしょ？」

「ああ」

リンはない胸を反らした。

「俺はもともと金がないんだ！」

だからクリスにたかってんの。

「どうしてリンがクリスに頭上がらないのか分かったわ」
ルミは去っていつた。

「そういえば、クリスはヤル気満々だったけど、どこにいるのかしら」

警察に選ばれたルミはとりあえず時間が経つのを待った。それにしても

「あはははは」

なんで警察 & amp ; 捕まった泥棒用にテレビ置いてるのかしら、変にサービス良いわね・・・。

「あと、少しね・・・」

全員捕まえたらお終い。

「はあ、捕まえるのは大変そう」

下

ちゅん、ちゅん、．．リンゴーン！！

朝の鐘が鳴る。

「．．．．．」

クリス村はいつもののかな雰囲気はまったくくない。

大きな家からサンタクローズのように袋を持った5人の集団が現れる、それをみてエースは草むらから飛び出した。

「よし．．．！」

エースはクリスからの支給品であるBIG虫取り網を振りかざした。

「泥棒覚悟！！」

「あ！リーダー」

「ふ、甘い！！」

エリンに本を投げつけられ、エースはやられた。

「がはっ！？」

「ふふ！まだまだね．．．はっ！？」

「捕獲！」

ルミがやられたエースの代わりにエリンを捕獲した、リーダー格であるエリンがやられておどおどしつつも、手下である4人の若者は持っていた棒でルミに襲い掛かった。

「雑魚！」

ルミは高く跳ねると両足を広げ、二人の顔を蹴飛ばし、背後に回っていた男に対し回し蹴りを喰らわせた。

「勝てっこないよ！」

残り一人、逃げ出したが、ルミは落ちていた泥棒ステッキを拾い上げた。

「えい」

びゅーん、すっこーん！

「なかなか警察も儲かるわね、ラゴウ」

「せやな」

ヴァニラ不参加の中で二人は顔を見合わせた。

「あらかた二人で村人捕獲したけど、全く女神を捕獲できてないっていうね・・あ、でもウィルマとアイリーンは捕まえれたけどね」

「あの二人はもともとヤル気ないからなあ」

「てか、制限時間いつよ」

「全員が捕まるまでやる？」

二人は顔を見合わせた。

「果てないわね」

二人が溜息をつくのと同時に、爆発音が聞こえた。

「何！？」

建物の間を縫うかのようにクリスとエレストが光の剣で暴れていた。

「何してるの！？」

「うう、ルミい〜」

ぼろぼろの姿のルミが現れた。

「ルールに『泥棒同士の奪い合いも可』ってあったでしょ・・？」

「まさか」

あの二人の軌跡をみると、リンをのぞいた神々が倒れていた。

「うわ、あん中にはいる勇氣はないでえ・・」

かん！キーン！がんがん！！

「っふ」

「・・・・っ」

きいん！！

刃が交差する。

「・・・・さすが文武両道と自分でほざくだけはあるな」

「エレストこそ、頭だけの女かと思ってた・・な!!」
手首を捻らせ相手の剣を弾き飛ばそうとしたがエレストは回避した。

「破!!」

「覇!!」

きいん!!

もはや、けいどろの粹を軽く越えていた。

「いいかげんにっ」

ルミが間に入った。

「はあっ!!」

エレストは容赦なく剣で突き貫こうとした、が

「あらよっ」と

クリスはルミを盾に避けた。

ざく

「いったああああ!!!!??」

ルミはおなかを押さえて倒れた。

「どんまい」

ラゴウが背中を叩いた。

「えい」

隙だらけになったエレストに剣を刺す

「ぐは!？」

WIN・クリス

リンゴオオン!!!終了の鐘が鳴る。

一同広場に集まり涙を見せていた。

「今回の結果・・私の一人勝ち!あーっはっはっは」

「ちよっと待ちい」

ラゴウがクリスの肩をつついた。

「リンはどないしたんや」

「ふ」

クリスは鼻で笑うと、指でリンを紹介した。

「……寝てるわね」

ルカがまじましとリンを見た。

エレストはリンの口の端に残っていた生クリームを指で拭い、舐めた。

「超強力な即効性の睡眠薬が入ってるな」

「……まさかリン」

「開始直後に食べに来て、早々眠ってたわよ」

みんな溜息をついた。

「ただクリスのお菓子好きなんだ……」

「ま、リンだけプラマイ0ね」

もともと持ち金なかったわけだし……

「次やるときはリンが居たら結果分らないわね」

しれっとクリスは言い切った。

皆は呆れながらも笑うしかなかった。

「お姫様って、楽しいのかしら」

ソファーに横になつていたクリスが人間界で実際流れているニユースを見ながら呟いた。クグリがその言葉を聞いて微笑んだ。

「クリス様は既にお姫様でいらっしやいませんか」

「ミニスカートから白い艶かしい足が見える。」

「そうね・・・でもそういう扱いをされた記憶は無いわ」

「あら意外ですわ」

「クグリに会つたときはまだマシなほうね・・・こうして考えたら成り上がったものね・・・例え、もとよりこうなる運命だったとしてもソファーから起き上がりクリスは足を組んで考えた。

「それにしてもお姫様、面白そうじゃない？うーん」
指を鳴らした。

ヴウン・・・何もない空間にブラックホールのような穴が開く。

「ちよつと、遊びに行こうかな・・・リン！」

しゅつと、天井から忍者のようにリンが現れた、手には白いウサギが・・・

「ウサギはおいていきなさい」

「ん？ああ了解、で？何かするわけ？」

ウサギを瞬間移動で片付ける

「ちよつとしたお遊びよ」

穴に入る。

リンもクリスに続いて穴に入る。

「いつてらっしやいませ」

くぐりは頭を垂れた。

穴に入ると、洗濯機の中を回っているような不思議な感覚がする。

そしてしばらくして暗闇が抜けた瞳に映るのは見事な細工の施された天井と、目に優しくない煌びやかなシャンデリアだった。

リンは起き上がると、頭をかいた。

「姫様！早く起きてくださいませ、ホーンミュージーン公爵が来られますのよ」

女中が布団を引つpegすと、リンは腕を引つ張られ別の女中に引き渡される。

「え？え？」

素っ裸に去れ、水の中に突っ込まれると、体中を容赦なく拭かれ・
・コルセットで腹部を締め付けられた。

「いててて」

「もう少し息を吐いてください、ほら姫様！いち、に！」

「はあああー！？」

「その調子ですわ！」

「いや、そうじゃなく・・・でででで！！」

しばらくしてふりっふりのドレスに着替えさせられた。

もううんざりだ、一体なんなんだコレ

「もう、リンお姉さまったら遅いんですから！」

「・・・誰だ」

「いやだわ、リンお姉さま・・・妹である、私を忘れたんですか？」

「クリスだよな」

「そうですけど？」

きよとんつと首をかしげた。

え？何コレ怖い

「あ、ホラぁリンお姉様、お父様とお母様がお待ちですわ」

「父母！？」

「クリスに背中を押され、リンは駆け足で運ばれていく。」

「！」

クリスの身体に魔法の気配は一切感じられない、かわりに一種の呪いを感じ取った。

(一時的な催眠術、自分を神と忘れていいのか・強制的に?)

扉が開くと、敵かそんな父に、貧弱そうな貴婦人の母がいた。

(ははあ、クリスのお遊びってのは分かったけど、趣旨が分からん。この世界全体に魔法をかけていつでもやめれるようにしてるな・時空管理局に怒られるぞ)

まあ、俺には関係ないか・このせかいヨーロッパの17〜19世紀ぐらいか?

「俺って痛いなあ」

「え?何かいいました?」

「いや?べつに」

それにしても、クリス・楽しみにきたのは分かるけど、なんで自分自信記憶を封印しているんだ?演技は得意だろうに・まさか

「俺への、嫌がらせ?」

下

ああ、どうしよう・・・まさか時の神ごときに私が邪魔されるなんて・・・

少し遊ぶぐらいいいじゃない!!!

それにしても・・・ああ、ながされる・・・

「もう、リンはいつも起きてくるのが遅いわね」

「結婚したら伴侶よりは早く起きるよう心がけなさい」

「はあ」

ロングテーブルに沢山の料理が並ばれる、食事が始まった。

(なんなんだ?)

クリスはお姫様らしく上品に食事をしていた。

父親の横に宰相が立つと、小声で何かを耳打ちしていた。

「公爵夫人が来たそうだ。私は先に顔を見せてくるから、後からちやんとしたなりで来なさい」

「はい」

上品でできた姫のようにクリスは微笑みながら返事をした。けれど厳かな父親はクリスのほうを微塵も見もせずさつさと去っていた。えつらそーな親父だなあ・・・偉いんだろうケド

えゝこんなクリスじゃ・・・ないこともないけど、俺だけ馴染めてない感じが切ないんですけどー

(興味ないことにはトコトン、向かないからなあ俺・・・先帰ろうかな)

人差し指を上に向けて魔法で自分の存在を抹消して帰ろうとした、そのとき

「お姉さま？天井に指差して、どうしたの？」

クリスが自分の服をぎゅっと掴んで不安そうな顔でリンの顔を見上げてきた。

う、何だこれ、無意識の警告か？！

「え？ああ、うん、天井汚れていそうなこともないでございます」とよオホホホホ

早口で誤魔化すと、クリスは微笑んだ。

「良く分からないけど、変なお姉さま」

ホーンミューン公爵のところにはイヤイヤ運ばれると、二人の子どもだと思われる若い青年が此方を見て頬を染めた。

「ああ、良く来たな」

親同士で挨拶を始める、こっちはこっちで好きにする。

（この果物うめー・・・あ、一応向こうの子に挨拶するべき？）

口にさくらんぼを二個いれて、子息に声をかける。

「はじめまして、リンさん、ボクはカーシーって言います」

（カーシー・ホーンミューン・・・なっげえーって神が人のこと言えないか。自分の名前すら覚えてないしな！）

「あの、リンさん・・・」

「あん？」

カーシーは頬を染めて、愛しいものを愛でるような目で彼女を見た。

「彼女は？」

「妹」

なんだ、クリスカ・・・まあたいていの男はクリスに釘付けだな。

「アレがすきか」

「ス！？」

おーおー顔を紅くさせて、初々しいのお・・・

「でも駄目だ、クリスはやらねーよ」

「そ、そんな・・・ボクはただ聞いただけですよ」

「ならいいけどよ」

振り向くとクリスが不安そうな顔でこちらを見ていた。

「？」

「リン、・・・クリス、来なさい」

お父上が娘を呼び、二人父の横に並んで立つと、向こうの公爵とも対面する。

「我々が、王家の分家なのは知っているだろう？本家のほうからホーンミューン家と懇ろになるようにとの、通達が来た」

「はあ・・・」

「リン、カーシーと話したかな」

「ええ？ああまあそつすね」

「カーシー」

向こうの夫人が微笑む

「アナタは名誉なことに向こうの姫・・・リン様と結婚するの」

「え！？」

「えー」

マジかよ、やだよこんな好青年と結婚とか、つまらなすぎる。

「ぼ、くは・・・」

「んだよ」

ハッキリしろよ、むしろ断れよ

「いえ、何でもありません・・・」

クリスのほうを見ながらしゅんとすんなし、俺がかわいそうだと

「では、そのうち婚約パーティーでも」

「ええ、喜んで」

あとは両親のほうで話し合う。

「なあ、クリスかえらねえ？正直息がつまるし」

「お姉さま、そんなこと言わないで・・・楽しみましょう？」

なんで複雑そうな顔で微笑むんだ？

良く分からないけど、良く分からない・・・はあ

少しして、開放された。

「はぁーやれやれ・・・」

クリスは何処に行つたんだ？

「おい」

「あら、リンさま」

女中が頭を下げる。

「クリスは？」

「は？クリス様・・・ですか？」

「そだよ」

は？とか言つなよ・・・知らないのが馬鹿みたいなリアクション傷つくじゃん

「クリス様は母君と同じように離れに居られますよ」

「離れ？」

はい・・・正妻様が死なれて、今この屋敷の奥様のようになっていますが、もとより賤しい身分の方・・・ああいう社交辞令のときのみ本家の門をくぐれるのです。

・・・なんだそれ

娘であるクリス様も例外ではございません・・・

「どんな凝つた設定だよ」

馬鹿らしい、さつさとクリスをつれて帰ろう・・・お姫様ごっこなら、もつといい場所あるだろうよ・・・

「ここか・・・ってうーわぁ」

お姫様つて言つより一般市民宅じゃないか

「クリスさん、先に行きますよ？」

あん？

白雪のような肌をした髪の毛ロールがクリスの名を呼び、歩いてきた、手には花束を、クリスもしばらくして綺麗な籠をもって歩いていく。匂いからお菓子だな。食べたい

こっそり後をついて行く

しばらくついていくと、山道に入った・・・上のほうには教会が見

える。

ドツクン!

「……?」

体中を駆け巡る、嫌な吐き気・汗が顔から流れる・

「つく」

駄目だ・進めない・行きたくないっ

「はあっはあっ」

クリスの背中が遠くなっていく

行ってしまっ・行かないで・行きたくない・行けない・いけない

「うあああああああ!!!!」

がさがさ・黒い影が草むらを横切った。

「俺は何もしらねえええええええええええ!!!!!!」

カツ!!!

「おかえりなさいませクリス様、リン様」

「まあ、すごいお汗・お風呂の用意をいたしますね!」

クグリとバードが急いで準備をする音が聞こえたが、なんだ。この疲労感

「リン様……?」

バードが駆け寄る

「はははっ・そうか」

眠るクリスを抱きしめながらリンは笑った。

「イレギュラーか」

異

野菜や人間は成長が早い、神々からすれば、その成長の早さは一瞬だ・・

時間の流れを緩やかにしているこのクリス村でも、子どもから青年、青年から大人に成長を遂げていた・・。

「よっ！クリス」

クリス村創立につれてきたエースはもう立派な青年になっていて、最近料理を作ることにはまっていた。

「あら、エース」

野菜や花に水をやりながらクリスが振り返った。

「・・・ねえ、エース」

「うん？」

エースはガーデニングテーブルの上において炎の形をしたクッキーをもぐもぐ食べていた。

「それ・・・」

「ああ？駄目だったか？」
もぐもぐ・・・

クリスは変なものを見るような目でエースをみた。

「なんだよ？」

「おー、相変わらずクリスの畑は綺麗なー・・・ん？」

リンが歩いてくると机の上にあるクッキーを見た。

「炎の精霊用の餌か・・・クリスってほんとに精霊とかに好かれるな」と、エースと眼が合う。

「お前、喰ったの？」

クッキーを指差す。

「悪いのか??」

レポートでヴァニラが現れた。

「お、ヴァニラ」

「クリスさん、リンさん、これ私の結婚式の招待状ですわ・・・私まだ準備がありますから失礼しま　あら？」

ヴァニラがクッキーを片手に持つエースを見た。

「それ、食べる気なら、食べるのはお止しなさい、人間で言う犬のおやつを食べるようなものですよ」

「もう食べちゃったわよ」

エースが顔を青ざめた。

「犬！？」

「モノの例えです・・・でも、精霊専用のおやつを食べた人間の話はきいたことないですね」

「未曾有の恥話だな、言いふらしてやるよ」

「止めるよ！」

「ふう」

クリスはジョウロを机の上に置きながら微笑んだ。

「無知って怖いわね」

「微笑みながら馬鹿にするな！！う！？」

「エース？！」

咽喉を押さえて倒れた。

「かつあ・・・が！？」

ぼう！！身体が発火した。

「水！」

クリスが指を鳴らし、水をエースに浴びせたが炎は消えない・・・

「・・・停止！回復！」

体中を燃やさないように炎の侵食を止めようとしたが、止まる気配は無かった、仕方なく細胞が燃えつくされる前に回復魔法を施す。

「ラオでも呼ぶか」

「無駄よ」

クリスが即答した。

「自立型の炎はラオでも操れないはずよ・・・だって私の魔法きかな

「いもん」

「クリスさんのプライドなんてどうでもいいです、リンさん」

「はいよ」

リンがさると、ヴァニラは氷の力でエースを囲んだ・・・すぐさま蒸発・・・水に変わる

「うーわー私の庭が穢れる・・・」

「そんな悠長なこといつていないで、クリスさんもほら！」

クリスも両手を広げエースに回復魔法をかける

「おーい、つれてきたぞ」

ラオはエースを見て驚いた。

「良く生きているな」

「いいから」

MPがへつてきて不機嫌なクリスとヴァニラはラオをせかした。

「・・・怖い」

ラオは怯えながら片手をエースに向けた。

「炎の神ラオが命ずる、火の契約に従い、我名を聞け！！今すぐ鎮火せよ！」

炎が揺らいだ。が、すぐに燃え盛った。

「強火です」

リンの感想にクリスはイラつときたので飛び蹴りでリンをぶつ飛ばした。

「ラオ！どうなってんの！？」

「ふむ、分かん」

ラオの返事にヴァニラはイラツときたので飛び蹴りでぶつ飛ばした。

「ねえ、さっきから何してるの？」

「焦げ臭いよ？」

「ルミルカ！」

双子はきょとんとクリスたちを眺めていた。

「エースが炎の精霊のクッキー食べちゃって発火してるの」

「え！？食べたの！？」

「どうにかできない？！」

「でも、私の力じゃ煽るだけだし、ヴァニラさんで無理じゃルミも・」

ルミは困った顔をした片割れをみて、エースを見て、ヴァニラを見て、クリスを見た。

「クッキー食べて発火したなら吐かせたら良いんじゃない？」
「ぶわっ！！」

クリス村中にあつた水が浮き上がりルミの上に天女の羽衣のように漂った。

「エース苦しいけど、我慢しなさいよね」

ルミは両手をエースに向けた。

「水の神、ルミが命ずる炎を打ち消しなさい！」

水がエースを囲い、水の玉に閉じ込めた。

轟轟と水が唸る。

「おお、水が炎に勝った」

復活したリンが関したような声を上げた。

「ルカ、酸素」

「うん」

水の隙間をかくぐり口に酸素を持っていく。

「よくこんな芸当できるなあ」

「すごいよな」

「悪魔眷属はだまらっしゃい」

ヴァニラに怒られ黙るリンとラオ

「どう！？」

ルミが水を切ると、エースが倒れた。

「完全に鎮火できたみたいね・・・生きてる？」

「うん、大丈夫だよ」

ルカが微笑んだ。

次の日

「なあ、クリス」

「ん？あーエース」

びんびんしているエースが鼻の頭をかきながら、困った顔をしていた。

「俺さ」

「何？」

エースが片手を挙げると、こぼぽぽ・・・水が溢れた。

「水、出せるようになった・・・」

「・・・」

荒療治の末、エースは異能力を手に入れたらしい。

「よかったね」

クリスはもう、めんどくさくなった。

しんしんと静かに花びらのような雪が舞い落ちる。

氷の噴水の横に井戸端会議する女性人。

「ヴァニラ様のご結婚式・・・楽しみですわ・・・御題さえクリアできれば、私達もいけたのに・・・」

「そうよね、ヴァニラ様は先々代の氷の女神の正真正銘血を継ぐお孫様さぞやご立派だったのでしょうに・・・」

「先々大の氷の女神様はそれはもう美しいお方で・・・美の女神の称号もお持ちでしたわね」

「でも、その方は氷の女王の称号だけで、美の称号は今やクリス様のものですけれどね」

「なんですって!・・・っ!」

氷眷属の天使や精霊の会話にクグリは微笑んで彼女らを見下した。普通使い魔のほうモンスターが天使より下なのだが、相手はクリスの従獣・

その上、高レベル魔物なので、彼女達は何も言えずに去っていった。

「こら、クグリ、ヴァニラの領域で喧嘩うらないの」

「喧嘩など・・・事実を申し上げたまでですわ」

(こいつ・・・私に似てきたわね)

まあペットは飼い主に似るって言うし。

「はあ、で?」

周りは誰もいない。

「他の人はどうしたのよ」

「祝いの品を用意できていないようです」

「まあ、今回めんどくさいものね」

神々の結婚は普通に結婚式を挙げるだけじゃ誰も面白くないから、ゲーム式になっていた。

御題通りのものを持ってこないと、結婚式場に入れないのだ。

「今回は、『自分では手に入れられないもの』ですものね・・・どんな無理ゲーよ」

クリスはそういつて汚い一つのコインを魔法で出して、上に投げ飛ばし、遊ぶ。

「ヴァニラ様は来てほしくないのでしょうか」

「あら？どうして」

コインを消して、クグリを見る。

「手に入れられるなら、手に入れられないもの・・・という御題を達成できていませんもの・・・」

「ふふ」

クリスは笑うと噴水の前にあるベンチに座った。

「逆よ」

「え？」

「私達に来てほしいから、他の人たちがこれないようにしたのよ」しゅん、空気の切れる音ともにルミルカが現れた。

「あら、クリス早いじゃない？」

「遅いわよ」

ルミはルカにしか作れない風の羽衣を持ち、ルカはルミにしか作れない、水の宝石を持っていた。

「作るのに時間かかったのよ」

「それにしても、他の人遅いね・・・」

「変にひねくれてるから、本当に自分では無理なものとうとしてんじゃない？」

自分では手に入れられないなら、他人からもらえればいい。じつわそんな簡単な御題なのだが

「リンは馬鹿だから心配だわ、どっかで死んでないか」

「ラゴウでしょ、それ」

しゅん、しゅん、ラオとエレスト、ウィルマが現れた。

「おっそいわよー」

「仕事を先に終わらせてきた」

三人はしれつとそういうと、周りを見た。

「全然集まってるないじゃないか」

「馬鹿だから」

氷の天使が現れると頭を垂れ、会場に入るよう言った。

「先に行きましょうか」

「ああ」

中に入っていくと、アイリーンも来て急いで入った。中には既にラツカとリーファがいた。

「あとはラゴウとリン・だけね」

「大丈夫かしら」

馬鹿ナンバー1、2、は大丈夫だろうか。

「では皆様、品をお見せください」

皆それぞれおいていく。

クリスマスもコインを置いた。

「何そのコインきつたない」

リーファの声にクリスマスはほほえんだ。

「ただのコインじゃないわよ 運命の金 って言ってね、表が天使で裏が悪魔の模様なんだけど・・・このコインで未来がわかるのよ、天魔戦争になっても大丈夫よ」

「いつ使うのさ」

ラツカがそういった後

「てかどうやって手に入れたの？時の女神のバーちゃん、最近寝たきりで不機嫌じゃん」

「魔力分けてあげたの」
エナジー

天使が二人表れ、大きな扉をあけた。

広い部屋に沢山の椅子と机が用意されていた。他の天使の人々は扉が開くのと共に立ち上がる。

「さあ、私達が座らないと他の人が座れないわよ」

「うん、行こう」

仲良しの双子ルミルカが言うと、クリスマスは歩き出し、扉をくぐるのと同

に服装がドレスに変わった。

「良くいらつしゃいました、姫様方」

イルの父親が頭を下げて挨拶に来る。

「至らぬ息子でありますが、どうぞ宜しくお願いします」

「って、私達に言われてもね」

苦笑いを浮かべていると、扉が開きラゴウが泣きそうな顔で息を切らしていた。

「あら、ラゴウ来たの」

むしろ来れたの？

「はっはっは」

ラゴウの背後に立ったリンは大笑いをする、ラゴウの背中を蹴った。

「ぶ！」

顔でスライディングしながらラゴウはクリスたちの足元まで滑ってきた。

「きゃあ！ちよっと」

「ラゴウ、リンはどうしたのだ」

エレストがラゴウの首根っこを掴みながら言った。

「わ、わいは悪ない」

「ラゴウのせいかな」

目を逸らしながら言うな。

「ちよっと！リン目が据わってない！？」

「ククク・・・」

リンの手から闇色の炎が揺らめき、邪悪な魂が数百個も現れクリスたちに襲い掛かった。

「きゃあああああ！」

クリスは黙って結界を張った。

(ここで暴れたら壊れるわね)

リンが片手に漆黒の剣を持ってクリスに襲い掛かった。

「テレポート！！！」

クリスは叫ぶと、11神だけ外にとんだ。

「パァァン!!!」

「きゃああああああああああ」

結界が切り破られリンの闇の気迫に飛ばされた。

広い宇宙空間に連れてこられたというのにリンは何の反応も示さなかった。

「いったたた！何したのよ！ラゴウ」

ぶっ飛ばされて怒ったラツカはラゴウの頭に踵落としをした。

「わいのせいや・・・」

「あぶない!!」

身体から紫のオーラを放ったバードが紅い瞳で襲い掛かってきた。

刃と代わった風を二人を襲う

「わわわわ!!!?」

「風の神ルカが命ずる、風よ消えろ！」

バードの攻撃は消えうせた。

「困ったわね」

リーファは生やした木々の後ろに隠れながら呟いた。

「そうじゃの、ヴァニラの結婚式までにはどうにかせねば」

ラオがそういうと炎を出現させた。

「炎の騎士よ！敵を薙ぎ払え」

リンに襲い掛かる炎の騎士だったが、足蹴りで一つ消えた。

「うむ、リン眷属である我にリンを倒すことは難しいか」

「何納得してんのよ！きゃあああああああ!?!」

大地の刃が敵意をむき出す。

急いで空に逃げるとリンに先回りされ強い打撃で大地に叩きつけられた。

「ぐ!?!」

リンは黒い瞳を虚ろにクククと低く笑った。

「楽しんでる!?!」

「本気をださずに、なぶって遊ぶつもりらしい」「
ウィルマはこそこそしながら言った。

「なぶり殺しにするつもりらしい」

みんなはラゴウを睨んだ

「なにしたんだあああああああ……！」

下

「ごめんよー、実は御題を交換し合った後に・・・」

「あ？＋と－の入れ替わり？」

「そうやー、雷の天使がワイの雷を受けたら雷の悪魔にかわってん、おもしろかる？」

「なにがや」

リンはどうでもよさそうに頭をかいた。

「それよか早く行こうよ、だいぶ遅れてるよ俺ら」

「まあまあ」

ラゴウはバチバチと電気を纏った

「・・・ちよ、ラゴウさん？」

「大丈夫、痛いんは最初だけよ」

カッ！

「ラゴウの名の下に、雷よ、集え！！！」

どおーん！！！！

「うわあああああああ！？」

「ってわけや」

「馬鹿ね、それで悪魔が天使になるわけないじゃない！」

「ラゴウ」

気を溜めているクリスがラゴウを見た。

「雷属性の天使だったから悪魔になったのよ」

「あ？」

「雷属性以外の天使や、悪魔だったら死んだと思う。雷属性の天使だったからいけたのよ」

「悪魔もだめなんか」

「死んだりほしくないだろうケド、かわらないわね」

「エレストが頷いた。

「なるほど、ラゴウの悪の力を天使に強制的に与え、変形させたってことか」

「そうやったんか・・・でも、わいかてリン眷属やで？変えるほどの力は・・・」

地面がどろつと闇に溶け始めた。

「うわ！？」

「空に逃げて！捕まると致命的よ！特に私」

「といってクリスは一番最初に空に逃げた。」

「ククク」

Preying on the dark

暗闇が女神に襲い掛かる、邪悪な腐敗臭がみんなの気力を奪う、周り一帯すべて闇色に染まっていく。結界を張るが、効果はあまりない。

「あのね、ラゴウ、この際だから教えてあげる」

結界を強く張り、自分を守りながらクリスは言った。

「世の中悪と善ってだけじゃないのよ、光の神だったって悪なところがあるの、光だって強すぎれば人を傷つけることは可能なの」

「クリスみたいなの？」

「ゴン・・・！！（殴

「あんたら悪魔眷属は意識してなんだろうケド、普段は善の悪なのよ」

「????？」

「メンドクサイ女ね、例えば・・・ラゴウの頭は下の中の下ってこと

よ！！！！」

「ええええ！？もつと良く分からん上に酷い！」

ウィルマがラゴウの上を踏んづけた。

「ア－分かるようにいっとしたら、闇の中でも優しい部分で行動していたリンを、強制的に引っ込めて闇の中でも最も残酷な本能を引き出したってわけだ」

「わいが？」

「ほかに誰が」

そういわれ睨まれるラゴウ。

「それで紫色のリンの目が黒いのですの？」

アイリーンの言葉にクリスは頷いた。

「黒は闇色ってよくいうじゃない」

「で？どうする気じゃ」

ラオの言葉にクリスは目を細めた。

「決まってるじゃない」

「おお！？」

白い光がクリスを包み込む

「私に逆らうものは誰であれ・・・」

目をすえた。

「お仕置きよ！！！！」

カッ！！

Light house cleaning

白い光がリンを包み込んだ・・・。

「あら、やけに静かですけどね、クリスさんたち・・・来てませんの？」

ヴァニラが顔を出すと、どーんとクリスの顔がアップになった。

「きゃ！？何しているんですか」

「準備長くない？早く始めましょうよ！一番花嫁」

「なんですかそれ・・・はいはい、もうすぐ始まりますから席に座っててください」

「はいよー」

クリスは戻っていったヴァニラを見て、ふうつと息を吐いた。

「なあ」

リンはきょとんとした顔で周りの皆を見た。

「何で疲れてんだ？」

「・・・いろいろあつたんだよ」

「？」

部屋が暗くなると結婚式が始まった。

クスリやアクも席に座りワインを片手に楽しんでいた。

氷の女神の結婚式が始まった。

「暇ね」

「今日も今日とてお菓子を作りながらクリスマスはぼやいた。」

「・・・そうだわ」

「生クリームを作っていた手を休める。」

「イベント行事でも作ろう」

「で今回はどんな危ないことするつもり？」

「やーエリンったら面白いこというなー。私がいつ危ないことしたのよ」

「あら」

「エリンが白い目でクリスマスを見るのと同時に、天界から降りてこられた神々が現れるのは同時だった。」

「クリスマス御呼ばれに賛同して来たわよ」

「あたしが来てやったんだから、楽しませてくれるんでしょうね！」
クスリとアクはそういつてクリスマス村に降り立った。

「何する気？」

「エリンの心配そうな顔を見てクリスマスは両手をフツタ。」

「そんな不安そうな顔しなくても平気平気、今日は神しか参加しないから」

「クリスマスは指をならし12女神を召喚した。」

「今日の行事は 料理大会 ー！」

「は？」

「事態を飲み込めていないリンはぼかんと口をあけたまま、目をパチクリさせた。」

「もしかして、しほっフラグ行事？」

「はじめるわよ」

クリスは広場に広くキッチンを召喚し、エプロンを装着した。

「試食係りのアクとクスリが美味しいと思った料理を出したら勝利よ」

「うあ、なんでも材料そろってるのね」

ルミは冷蔵庫を開けながら感嘆した。

「とうか、この行事、誰得なんですか」

ヴァニラの言葉にクリスは鼻で笑った。

「私が楽しければいいのよ」

「……こいつっつっ！」「」「」

リンが包丁でお手玉をはじめ。

「俺、自慢じゃないけど、料理不味いぞ」

「そうね、リンのは美味しくないわね」

自他共に否定する料理の腕。

「わいは腕に自信あるけど、ヴァニラはあかな」

「なんですって？」

「なんてったつて、ヴァニラの料理は味がしつこ……」

カキン

「ラゴウは今回参加しないということ」

クリスはエリンにマイクを渡した

「実況宜しくっつてことで、料理時間は長くても3時間までね！さあ、レッツ！クッキングゲー！」

「えー……料理が始まりましたが、料理を試食し審判するに当たって、えー……どのようなバトルになると思います？」

エリンがクスリにマイクを持っていくと、クスリは微笑んだ。

「そうね、邪魔をしあう気はないみたいね……つまらないわ」

「あたしゃ旨いもん食べれたらそれで良いわ」

アクはそういつて用意されていた水を飲んだ。

「そですか・・えー、では優勝候補はずばり、クリスですか？」

「あーそうだねえ、植物の女神のクセにリーファは料理下手って聞いたからねえ」

アクの言葉にリーファは憤慨した。

「私だってやればできるわよ！ラツカになんかに負けないんだから！」

「なんでそこであたしの名前出すのよ！！！！」

「相変わらず仲の悪い双子ね、面白いわ」

「・・・・」

アクとエリンはクスリをなんともいえない顔で見えていたが、キッチンのはうに目を向ける。

「おおっと、アイリーンさん、もう料理できそうですね」

「そうですねー、私こう見えて料理得意なのですの」

ウィルマはその横で、何かウヨウヨしたものを造っていた。・
スライム？

ココは触れないでおいで

「ヴァニラさんの美味しそうですね」

「ええ、そうですねーとも・フランス料理　ブッフ・ブルギニョン　ですからね！」

「美味しそうですねーこれは期待できそうですね」

ポオン！！

「爆発音！？」

エレストのキッチンに行くと、レンジが爆破していた。

「・・・・チツ。強度の足りないレンジだ」

「何を作るつもりなんですか！？」

「ふふ」

「フライパンが溶けてますけど！？」

その様子を見たアクとクスリは顔を見合わせた。

「アイツあたしらの恨みでもあるのか？」

「きつとあれよアクちゃん、ずっと昔の天上革命阻止のためにエレ

ストの武器や作り方を全部奪ったからじゃない？」

「ああ……っていつぐらい昔だっけな」

「さあ？1000年ぐらい？」

「えー……さあ！そんなこんなで料理はできた模様です！」

上(後書き)

試食は次回

「誰の料理から召し上がりますか？」

エリンの言葉に、アクはクスリを見た。

「そうね、ここでいきなりクリスのを食べちゃったら、面白くないわね・・・じゃあ・・・地味なルカさんの頂きましたようか」

「あたしも、クスリの意見に賛成よ」

「そう？」

ルカが地味といわれたショックと、緊張とで沈んだテンションのまま料理を運んできた。

「・・・ぱく」

二人がルカの目の前で食事する。

「あー・・・？」

「そうね、美味しいわよ・・・ただ風の料理を出されても良く分からないわ」

イマイチな反応だった。

「じゃあ、次はルミでもいっとく？」

「いっとく？つて・・・嫌な感じね」

ルミも料理を出す。

「薄いわ」

「はやっ!？」

クスリの一言で流された。

「エレストは最後に、次アイリーン」

「アイリーンさんの料理・・・美味しそうですね」

「ええ、よくウィルマの分も作っていますですの」

置かれた料理に口を運ぶ。

彩りに飾られたメインに、バランスを考えた野菜の盛り合わせ・・・美味しく頂きました。

「ごちそうさま」

アクがそういつて満足そうに笑った。

「高評価です、今のところアイリーンさんが一位ですか？」

エリンの質問にクスリは微笑んだ。

「では、次ラツカさん」

「あら、おいしそう」

「鍋か」

肉と野菜がふんだんに使われた鍋には味がシツカリしみこんでおり、美味であった。

「あー、おいしかったわ」

「そうね」

クスリは微笑みながらアクの口元を拭いた。

「次は、リーファでもいっとくか」

「でもつてなによ！」

持ってきたものは黒焦げのぷすぷす口から泡吹いているアンコウもどき。

「……………」

クスリは笑顔で皿をアクのほうに横流しした。

「てえええ！？」

「アクちゃん、悪魔でしょう？大丈夫・・ね？私を信じて」

「いやいやつつつてもアタシ下級悪魔だしさあ・・それにその皿持つて人の顔を掴むのやめてくれないかな？怖い・・つて！？ぎゃああああああああ」

強制終了。

「モー何よお！人の料理をぎゃーつて！！」

「じゃあアナタ自分の料理食べる？」

モザイクかかったソレをクスリは黒笑みでリーファに突きつけた。

「う、ごめんなさ・・」

「早くも波乱の予感です・・分かりきったことですけど」

エリンの言葉に傍観していたお客さんが頷く。

「私のを食べ」

そういつて、クスリとアクの目の前に新たな生命の出来損ないを
エレストは堂々とおいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

クスリは黙って机の上から落とした。

「チツ」

「ごめんなさい、手が滑ってしまって・・・ふふふ」

「では、お口直しにワタクシのをドウゾ」

ヴァニラがお皿を置いた。

「アクちゃん、起きて」

頬を叩いて起こす。

「ぷっぷっ・・・なんとかかぁー旨そうだね」

アクは喜んで口の中に入れた。

「・・・・・・・・そして黙った。」

「おいしいっちゃ美味しいんだけど」

アクが首を捻った。

「濃い・・・てか味がひつこい」

カキン

何故かアクでなく、傍観客が氷づけにされた。

エリンはひきながらも視界を続ける。

「では、次にリンさん！」

リンが普通のテンションで「ん」と料理をおいた。

「なんだ？チャーハンか」

口に入れる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうなの？アクちゃん」

アクがリンを見た。

「お前」

「？」

リンが背中を見せた。

「ふ・感想を言うのは、野暮ってもんだぜ」

カッコよく去ろうとしたが、クスリが一口食べて一言。

「普通に不味いわ」

リンは走って逃亡を図った。

「……えー、では仕切りなおして最後に優勝候補のクリスさんの料理を！」

「ないわよ」

クリスがきよとんとしながら言った。

「え？」

「さつきリンが食べちゃった。冷めちゃったから……いつかなーつて」

「じゃあ、優勝は……」

「リン!!! 楽しみにしてたのに!!」

「あら、まっつよアクちゃん!!」

怒りに駆け出したアクを追ってクスリも去ってしまった。

「えー・あのお・優勝者は……？」

「私でしょ」

クリスは笑顔で言った。

「私の料理で二人は消えたのよ？」

「そういうわけにもいきませんよ!!」

ヴァニラが叫んだ。

「でもヴァニラさんに優勝は無いけどな」

村人の言葉に反応

「でしたら、私の料理を皆さんにふるいませしょう!!」

「えー」

「なんですか!!」

・・終わり

下（後書き）

いつもの如くオチなし

「え？クリスって彼氏一人もいないの？」

クリス村の子ども達も、もう立派な大人になっていた。あの昔の可愛げな子どもはもういない・・・。

村長宅の石垣にもたれながら井戸端会議をしていた。

「リリカは彼氏いるわけ？」

「いないわ」

「うそばかり！あたし知ってるわよ！トーマに告白されてたじゃない」

「リコリス！」

「へえ？トーマはいい子じゃない」

「イヤよ、あんなガキっぽい男！付き合うならネルみたいなのがいいわ」

クリスは二人の話を聞きながらハリネズミの針を磨いていた。

・・・勿論ただのハリネズミではない。

「はい、ハリロン綺麗になったよ」

「きゆう！」

ハリロンは嬉しそうにトコトコと歩いていった。その上に何かは落ちた。

「ゴーン！！」

「三時ね」

「うん、あっと、いつけない・・・もう帰るわ！じゃねクリス、リコリス！」

「ばいばーい」

ハリロンがぶつかったものに対して怒りを表していた。

「本当、硬いから出してるよね・・・リンちゃんのモモンガ」

「テツロンは名前のどうり、鉄でできてるようなものだからね」

クリスはハリネズミとモモンガの目の前に、出来立てのクッキーを置いた。

「仲良くするならあげるけど?」

二匹仲良く肩を組んだ。

「ふふ・・クリスのクッキーは強いわね」

「リコリスは?」

「?」

クリスは庭においてある椅子に座った。

「本当は相談にのってほしいことがあるんでしょ?」

「・・さすがクリスね」

リコリスは苦笑いを浮かべて、クリスに誘われ、同じくクリス宅の椅子に座った。

「・・私ね・・」

「クリスーちよつといいか?」

どっかぁん!!!

「リンっちゃああああ!?!」

クリスの魔法で撃沈したリンをリコリスは傍に駆け寄り心配する。

「空気読め」

「?????」

体中についた焦げをはらいながらリンも椅子に座った。

「なんかあったの?」

「あ、あの・・私実はね」

リコリスは頬を染めながらもじもじといった。

「マキャベリに告白・・っていうかプロポーズされたの」

「ほう」

「でも、彼天界の世界史を作るって・・それが夢で、クリス村を出るって言うの」

「そうなの?知らなかったわ」

「クリスそのことで俺来たんだっただけだ」

リンは身構えながら言った。

「天界承認通行書がほしんだと」

「本格的に見て回る気なのね」

リコリスは顔を下げた。

「そうなの・私彼の邪魔はしたくないけど・私にはクリス村を出る勇氣はないの」

「まあ、クリス村から出たら俺らの庇護下から離れるしなあ」

「死亡フラグは高いしね」

三人は黙った。

「・私、マキャベリの帰りを待つ自信もないの」

「ついて行く自信も、待つ自信もないってか」

「そう」

クリスは魔法でポットと紅茶を出して、お茶を入れ始めた。

「仕方ないわね」

「おお、何かいい案でもあるのか？」

リンの言葉にクリスは「は？」といった。

「いい案も悪い案も・一つしかないじゃない、すっぱり別れるしかないわ」

「!？」

「だって、どうしようもないじゃない」

「少しは考えてやれよ」

「え〜」

クリスは紅茶を飲んで、めんどくさそうな顔を露骨に見せた。

「私は愛と豊穣と平和と美と知の女神だけどね〜恋の女神じゃないの」

「いっぱい称号あるな!?!?っていうか平和は嘘だろ」

パチン。

「いてででで!?!?何!?!?姿の见えない何かに噛みつかれてる!?!?」

「やっぱり、駄目なのかな」

しゅん、とリコリスはうな垂れた。

「……………」

クリスはそんなリコリスを見て、溜息をついてみた。

「シミュレーションしてみる?」

「え?」

指先をクルクル回すとブラックホールが生まれた。

「この先は亜空間に繋がっていて、何をするのも自由・・そこに私とリンの魔力を注ぎ、RPGゲームを作るの、そこでなら何が起きても大丈夫よ」

「うわ、めんどくさ・・いででで!!?」

「クリス・・ありがとう!!」

リコリスはうるうるさせながらクリスに抱きついた。

クリスはそのまま指を回し、移動した。

「うわっ！」

「マキャベリ!？」

「くっそう、リンなにするんだよ！」

「何事も、シチューションが大事だろ？パートナーがいないとはじまんねって」

リコリスとマキャベリは顔を見合わせた。

「……そうね」

「……確かに」

ココまで正確につくりだせるなんて、亜空間って凄いわ

「クリス……」

リコリスは目を閉じた。

「どうして、いきなり場所が入れ替わっていま崖のふちにいるの？」

「コレが本当の崖つぶち」

リンのつまらない洒落を無視してクリスはしれっといつた。

「本当に天界が危ないってところがあるってのを、教えてあげようかなって」

しかも寒いと思ったら周りが極寒の地に変わっていた。

「天界危険区域中級・・・極寒の原曲」

「原曲……？」

「ここね、スケートリンクの容量で滑ると美しいオーケストラの極が流れるの」

リンが楽しそうに滑ると美しい曲がどこからもなく奏でられ、うつとりする……。

「ただし」

パキパキパキパキ……

「曲が奏で終わる頃には極寒の地が暴れるのよね」

シャキン!!

「きゃあああああああああああ!!!」

氷の山が鋭く生えた。

リンがお約束のように凍った。

握っている手は右にあるはずなのに、声が目の前から聞こえる。

「でも、僕のこと待っていてほしい・・・君の事好きだけど、世界にもっと目を向けていんだ!!!」

リコリスは暗闇の中で微笑んだ。

「待ってるわ!」

「ありがとう」

闇がぶわっと消え去った。

目の前はマキャベリが同じように微笑んでいた。

「愛してる」

「やつほ」

暗闇で見えなかった周りの風景は美しい自然に囲まれていた。声のするほうを見るとニマニマ顔のクリスが笑顔で木の上にいる。

「どう、楽しかったでしょう?二人とも」

「・・・え?」

「お前達、結局両方本物で、今まで行った場所も本物だったんだよ」
リンが大きなグルグル飴を舐めながら笑う。

「あ」

リコリスが思い出したように声をあげた。

「そっいえば、手は」

暗闇で支えてくれた、手・・・

「てええええええええええええええええ!?!」

リアル肌ざわりのマネキン（手首まで）だった。

「ココは深層心理に深く入り込む闇、心の底に隠しておいた感情を剥き出す場所なの・・・だから危険区域上級」

「マネキンは、クリスの守護道具ってわけだ」

「そうなんだ・・・ありがとう、二人とも」

「いいってことよ」

クリスが木から降りる。

「じゃあ帰るとしますか」

「あ、まってクリス」

リコリスが手を挙げた。

「……………取れないんだけど、マネキン」

「……………」

「ね」

ねじゃなくて

「どっかんどっかん穴掘ればぐざくくざく埋もれていた宝石出てくるの〜片手一つでどっかんどっかん．．ん？」

機嫌よく歌っていたリンが指を鳴らし、洞窟内でおいていたランブに明かりをともした。宝石が光に照らされ輝く。

「．．エースか？」

刃こぼれしたスコップを持ち上げリンは来た道に戻る。

「．．ふんふーんふーん」

沢山の鉱石とともに洞窟を出ると、体操座りで拗ねて地面にのの書いているエースがいた。

「．．嫁と喧嘩でもしたのか？」

「リン！！」

エースは涙目でリンに抱きしめようとすると、リンは避ける。

「なんだよー、鼻水ふけよー」

指を鳴らし、クリス村に帰る。

出稼ぎも楽じゃないぜ

「．．おい、バード！風呂ー後メシー」

スコップを庭に投げ飛ばし、頭になっていたバンドナをのけると違和感に気がつく。

「．．リン！話聞いてくれよー！」

「リンの名の下に、我呼びかけに答えよ！出でよ．．バード！！！」
しーん

「なんだ、恥かしいな」

エースが呆気にとられている横をリンは歩き出す。

「はあ、なんだよ．．クリスー」

「なあ、リン」

エースがリンの腕を掴んだ。

「お前ならもう気がついてるんじゃないのか？．．クリス村の女が攫われてんだよ！全員」

「．．気がついてるけど」

「だったら．．って何処行くんだよ！」

「風呂」

エースは首をうな垂れた。

しばらくしてリンは風呂から出て、自分で料理作って飯作って食べて、寝て．．カーン！

朝になって．．客が来た。

「リンさん！どうにかしてくれよ！！」

村の男子が全員訴えに来た。

「．．．．ち」

リンは頭をかきながら外に出ると、群がられる。

「お願いだよ！俺の奥さんが！」

「心配で．．娘が！」

「クリスさんが見れないなんて俺生きていけないよ！！！」
ぶち。

「うつるせえええええええええええよ！」

リンはエースを殴った。

「何で俺．．」

「リンさんはクリスさんたちがいなくてもいいんですか！」

「はぁ、あほだな」

リンは頭かいた。

「この世で一番強い世界の影響力を持つ神々がなんで攫われているにも関わらずなんの影響がないでしょうか！はいいい！！君答えて」
指差された男は「え？え？」と周りに助けを求めます。

「自分の意思で向こうにいるってことだろうよ．．ほっときゃ飽きて帰ってくるだろ」

「でも、リンさん」

「ナンだよ」

男子が困った顔をした。

「一ヶ月も帰ってきてないんですけど」
リンが首を曲げた。

「・・・俺、何日帰ってきてない？」

「等しく・・・」

リンは頭を抱えた。

「・・・まさか、いや・・・そうか・・・？」

リンはエースの頭を掴んだ。

「なあ、エース」

「？」

「一番最後にいなくなったのクリスマスじゃないか？」

「そうだけど・・・？何か分かったのか？」

「ふ」

リンは目を閉じると、漆黒の翼を広げた。

「迎えに行くか」

男らしいリンにときめく男ども・・・。

「じゃ」

でも連れて行ってもらえないのであった。

下

僅かに残っているクリスの気を辿って、リンは捕まっているらしい女神達のもとに行く。

場所は下級天使が住む、貧乏街の一角であった。

「はぁー」

警戒する下級天使らにうんざりしながらリンは頭をかいた。

「・・・なあ、お前」

リンは一瞬で移動すると、下級天使の一人の首根っこを掴んだ。

「ひい！」

「・・・すんごいびっじーんなおねーさん知らない？」

「し、知ってる」

「案内してくれる？」

「知らない」

どっちだよ

「・・・ふーん」

拳をならす。

天使は怯えた瞳を見せて両手をフツタ。

「あ、知ってます！思い出しました思い出しました！案内させてください！」

「最初っからそう言えっつて」

トコトコ早足で移動する天使の後を追って移動する。

(1・・・2・・・3,4・・・5)

下級天使街の住処にしては、聖結界が多いな・・・術式、具式・・・
保存用

(少量の魔力で発動するが、その効果も薄い、ケド時間式にしておけば、向こうは体力も魔力も減らない、敵は体力を削られていくけどな・・・)

なかなかせいこい戦い方をするやつだな。
ますます確信した。

「ここか？」

「はい・・・それじゃあここいらで」

「ここそこそつとすごい早いスピードで逃げていった。」

「早っ」

「まあ雑魚には興味ないけどね！」

歩いていく。中々いいお家にお住みですこと

「おい、クリスいつまで遊んでるんだ！」

声をかけてとある扉を一つ開けた。

「!!!!!!!!!!!!!!」

な・・・

「なにやってんだお前!!!!!!」

女神を傍に侍らせて、まるでハーレム王の如く振舞う男が一人・・・

絹の如くさらりとした金髪、深い黄金色の瞳・・・クリスに似ている、がクリスではない。

「よう、遅かったな！」

「きらりと白い歯を見せ笑った。」

「クリスはどこだ？」

「ルミルカいるのに、クリスがいないじゃないか、ヴァニラがいなのは新婚旅行中だから知ってるけどよ」

「簡単な話、約束したんだよ」

「男は立ち上がり。剣をとった。」

「お前と一騎打ちさせてくれってな、もし俺が負けたら俺はクリスに大人しく吸収される」

「・・・やっぱりな、お前本体から離れた力の一部だな」

「そうだ」

「クリスの力から生まれた固体・・・ぶつちやけ戦うのやだな。絶対セコイ戦いしてくるに違いない。」

「で、それとこれと・・・ハーレムと何関係あるんだ？」

「これは俺の趣味」

「なんで力の一部って本体とは全く違う性格になるんだろうな。」

「さ、勝負だ」

「剣を構えられる。」

「・・・つて、おい！それ『絶対勝利』ビクトリアンの剣じゃねえか！つかつてんじゃねえよ！！」

「本当せこいな！」

「使いこなせるのも、実力さ」

「確かに」

「なんとなし上を見ると、クリスガにやにやと笑っていた。」

「天使って平和を象徴としてるってわけじゃないよな本当！それで悪魔よりスカれてるって、なんかセコイよな！！」

「かかってこいよ、終わらせるから」

「リンも剣を構えると、男は笑った。」

「宣言魔法発動！『俺下級騎士天使グリフは、悪魔神リンと正々堂々一騎打ちすることを宣言する』」

「あ、てめ」

「天界の文字で『受理』が浮かんだ。」

「これでお互い。魔法は使えない、身体のみ戦いだ」

「・・・ふふ。アイツの敵だ！！」

「・・・」

「おつまえ、下級だけあつて弱いな」

「魔力封印したところで、差がありましたって話。」

「魅惑の魔法でもかけられていたであろう女神が意識覚醒させる。」

「え？なんでココにいるんや？」

「？」

リンは清々しく負けを認めているグリフの首元に剣を突きつけた
まま、クリスのほうを見た。

「吸収するなら、さっさとしろよ・・・てか俺の召使返せ」

クリスは微笑みながらリンに蹴りをいれた。

「げふ」

地にひれ伏していると、クリスは可愛らしくリンの頭をつついた。

「リン、来るの遅くない？ねえ？私だってたまには攫われてみたい
の、美の女神だもん、ねえ」

「なんで俺怒られてるの？理不尽だわ」

クリスはリンの頭を撫でながら、グリフを見た。

「ふ、俺はとつくの昔に覚悟できてたさ」

「待って」

ルミがグリフの前に立った。

「あの・・・待ってクリス」

「何？ルミ」

「なんだ、俺に惚れたのか？」

「あ、あんたはだまってなさいよ！」

顔を蹴られて倒れた。

「待ってほしいの、せつかく別の人として産まれたんだし、それに

あの・・・」

「吸収しないでってことね」

ルミが頷く。

「いいわよ、生かしといてあげる」

「え？いいのか」

顔を抑えながらグリフは言った。

「ええ、約束であって契約ではないもの、契約は縛るものでも、約
束は破るものよ」

「そっか」

グリフが嬉しそうに笑った。

「なあ」

リンが地面に座り込んだままグリフを見た。

「あいつの仇ってあいつってだれだ？」

「アイツは、アイツさ・・・お前が吸収したやつ・・・俺のダチだったんだ」

「そうか・・・」

沈黙が流れる。

「なあ」

グリフが起き上がってリンに問うた。

「一つだけ聞かせてくれ」

「なんだ」

「アイツの名前ってなんだっけ？」

「知んね」

「クリス、そろそろ後を継ぐ気になったかしら」

先代は微笑みながら花の手入れをしているクリスを見下しながら言った。

「ないけど？」

「言うと思ったわ」

クリス庭園の白薔薇を一つ魔法で切って髪に挿した。

「だからね、私とアクちゃん考えたの」

「あら、ソレはいい考えね、何勝手に薔薇切ってるのよ」

「子ども作りなさい」

パキン・薔薇が地に落ちた。

「私に言った？」

「ええ」

「処女神宣言したこの私に？」

「こだわるわね、宣言なんてなんの意味があるの？言葉約束みたいなものじゃない・・・いつでも言いなおせるわ」

「イヤよ」

「してもらっわ、明日パーティーしますからね、逃げよたって無駄よ先々代達に協力して貴女たちを捕獲するつもりよ」

「最初は待っていったじゃない！」

「私は言っていないわ」

クリスは立ち上がった。

「いい加減にしなさいよ」

殺気立つが先代は涼しい顔で扇を仰いだ。

「さようなら」

シュンッと消えた。

逃げ足だけは速い。

「・・・本気ね」

リンの家駆け込むと、当の本人はマイペースにソファアに座っていた。

「大変よ!」

「何が?」

「アク来なかつたの?」

「きたよ、まあったお見合いの話だろ?」

「私達処女神の宣言してるのに、酷い話だと思っでしよう!っていうかなんでそんなマイペースなのよ」「なんでって、またどうにか流れるんじゃないの?」

「先代達つつつてたでしようが!」

「ぶ」

顔にハサミを投げられ、倒れる。

「夢と幻の眠り神を連れてくるつもりだわ、あいつら」

「誰それ?」

「ご先祖様レベルの方よ!」

「神様って長生きするから面倒だよな」

クリスはリンの上に飛びのった。

「くるし!」

「逃げるわよ」

「え?」

クリスが・

「にげるゝ?!」

「いくら私達が最強たって、回復アイテム禁止、回復魔法禁止な状態になつたらさすがにキツイ・・ってか負けるのは目に見えてるじゃない？」

「そうだな」

クリスの美学・負ける戦はする前に逃亡すべし。

「でもさ、だからって」

ちらちらと光が闇を照らす。

「人間界に降り立たなくても」

「人を隠すには人、天界にいると属性の問題ですぐばれるけど、人間界は私達みたいな属性ほぼないから、隠れるにはうってつけなのよ」

「ってとこまでヴァニラたちが考えないほど無知だと思わないけど」「気配さえ気取られなきゃ、私達が何処にいるかなんてわからないわよ」

夜のレストランの食事を楽しみながら二人は流れる外の風景を見ていた。

排気ガスをふきまくる車が味気ない夜の街をカラフルに飾り、寄り添って歩くカップルはその関係がいつまでも続くと思っているかのように楽しそうだ。

「確かにそうかもしれないけど・・そういうこときいてんじゃなくてよ」

「分かってるわよ、いつまでも逃げてるつもりないわよ、対策考えてるって」

「本当かぁー？」

「そのうち考える」

レストランで出された食事を優雅に口に運ぶクリスをみて、リン

は溜息ついた。

人間も、天使も、神も、悪魔も、精霊も・・・けっこう同じような輩ばかりだ。同じようなことで悩み、考え、運命に左右される。

誰であれ、行動に移すのは己自身というわけか。

「リン？食べないの」

「もう喰った」

「あらそう、じゃあホテルとってきて」

「どこでもいいのか？」

「旅館でも良いわよ」

「.....」

「クリスさんたち、いったい何処に行ってしまったのでしょ

「せやな、リンは居るおもてんけどな」

ラゴウとヴァニラは二人の住宅を探したが、気配は一向にない。

と

魔法で移動してきたほかの女神達、顔を合わせ同時に首を横にフツタ。

「駄目だったわ、何処にもいない」

「なあ、ウィルマ。あの二人の思考を辿るんもできひんかったん？」

「できない、何も考えずにワープしてみたみたい」

ウィルマの言葉にみんなは溜息つく。

「わてら、本気で逃げた二人を捕まえたことあったんかいな？」

「ありませんの。私達でも、できない話なのですわ」

「まあまあ、アイリーン、ラゴウ・・・そう悲観することはない」

「自信おありのようですね、エレストさん、なにか打つ手でもあるんですか？」

「あるともさ・・・ただ、一人ではできない、みんなの力が必要だ」

「？」

エレストは自信満々に笑った。

「今までの屈辱を、二倍にして返すことができる」

「はあ、で、その方法というのは」

「準備ができたなら教える、ではまた」

そのまま去っていった。

「あいつ、ほんまあねちっこいやっちゃな」

「そうですね、ラゴウさんはさっぱりしすぎだと私は思いますけど」

「あ？」

「なんでもありません、エレストさんが何かしらの準備を済ますま

で、お茶にでもしましょう」

「そうだな」

ラオが魔法で机と椅子を取り出す。

「ふと思っただが、クリスやリンを連れ戻せても、本人の意思がなければ意味が無いのではないだろうか」

「上には上の考えがあるのでしょう」

ヴァニラも魔法でポットを出して紅茶を作る。

「私達は命令どおりに動くだけですわ」

「そうですね」

「でもクリスたちかわいそう」

ルミル力は正反対な意見を述べる、ルミは眉をひそめた。

「可哀想だったって、あの二人、十分好き勝手なことしたんだから、いい加減落ち着くべきよ」

「確かに」

それにはラツカも同意する。

栄光の冠はいまだ輝けないようだ。

下

「さあ、できたぞ」

エレストがそういつて皆を呼んだ。そしてみんなの見たものは大きな召喚陣だった。

「まさか」

「そう、探して見つけれないのなら強制召喚すればいい・ヒトリでは無理でも我々が全員そろえば、出来ないことなどないのだ」

エレストが珍しくいい奴に見えるトラゴウがいうと、エレストは笑顔で殴った。

「さあ、はじめろぞ」

魔方陣が光り輝き、魔力を放出される。

「出でよ！光の女神！闇の女神！」

大きなヒカリが浮かび、それが翼を生やすと同時にヒカリが飛び散り、二人が現れた。

「・・・・・・・・」

なんて、嫌そうな顔をしているんだろう。

「クリスさん！リンさん！」

逃げないようにヴァニラが氷で捕獲した。

「冷たいー」

「何するのよ！あんたら！！」

ぎゃーぎゃー喚く。

シユン・・・

「あら、いいお洋服なこと」

夢の女神ムマに、幻の神スリープ

二人とも眠たそうな眼でクリスとリンを見た。

「私、絶対男なんかと結婚しないんだから！」

「そう、それでもいいわ」

「え？」

あっさり、肯定された。

「あら？クスリから聞いた？子どもを作ってもらっ

「だから、それがっ」

「あら、スリープ少し違うわ」

「ん？」

ムマがクリスマスたちの前に座った。

「子を、育てなさいといったの・・・貴方達の後継者となれる子をね」

「・・・はっ、タマゴ保管孤児館！」

「なにそれ」

「昔はなしたでしょ、神、天使は保護者がいないとタマゴになって
防衛にはいるの。それを集めて保管してるところよ」

「そこで、卵貰って育てるってことか？」

「そう」

ムマは二人の顔を見た。

「えーめんどくせえな」

リンは渋る。

「貴方達が、エデンを継ぐ気がないなら、仕方のないこと」

「これは私達にとっても苦渋の選択なのよ」

ムマは立ち上がり、スリープの言葉に頷く。

「ふあゝ・・・眠たいわね」

「戻りましょうか、貴方達なら大丈夫」

クリスは首をかしげた。

「運命は我々にも左右できない、されど、進め」

「為すがまま・・・ってことね」

ムマは微笑むと煙となって揺らぎ、消えた。

「どうゆうことだ」

「代わりを寄越せてっつってんのよ」

クリスは氷から出ながら言った。

指を鳴らし白色のドレスから青色のミニドレスに着替えた。

「わいら、そんな短い本文のためにこんな力使わされたん？」

「そういうものですよ」

「上がちゃんとしていないと、我々が困るな」

「ラオのいうとおりやでー！！」

「お前に言われたくないよ！」

リンは氷から出るついでにそういつてラゴウの顔を蹴った。

「次からは、子育てですか」

ヴァニラが不安げにクリスを見た。

「大丈夫ですか？」

「知らない」

クリスは即答して、笑った。

「為せばなるし、為さねばならぬ・・・まあ、何事も経験よね」
不安だ。

まず手始めにタマゴを一つ手に入れたけど。

ぶっっちゃけ、子どもに興味ないリン。

「……………」

タマゴを見つめなんともいえない顔を見せた。

「てかさ、血繋がってないのにいいのかよコレで」

「お黙り」

ヴァニラさんがマニュアル本を読みながらリンを叱咤した。

「あなた方がわがまま言うからこういう流れになったのでしよう！・

・私の初々しい新婚ライフ返して頂きたいものですわ」

「あーんとかしてんの？」

カキン……

「おーい、リン言われたもん買ってきたで〜て。なんやリンこおつとんのかいな」

「クリスさんが静かなのが気になります。見てきますのでラゴウさん、リンさんをちゃんと戻して置いてくださいね」

「自分が凍りつけらしとして、わいにやらすんか……」

ラゴウの渋り声も聞かずヴァニラはスタスタとリンの家の隣に移動した。

「クリスさん？どうですか」

家の中をのぞいてもクリスの様子は無い。

中庭に移動すると、クリス自慢の庭園で、本人は綺麗なマリーヤミント、薔薇やユリ、椿の枝と桃絵の枝など、季節無視の花束を抱えていた

「……………なにしているんですか」

「ヴァニラじゃん、見ての通り、花摘み」

「……………タマゴはどうしたんですか？見たところ見当たりませんか」

クリスは花束を持ったまま家の中に入っていった。
着いていく。

「ほら」
クリスの指差す方向を見ると、木の枝でできた巣の上に一個のタマゴ。

「何してるんですか!? 鳥や動物じゃあるまいし!! そんなんで生まれるわけないでしょう!？」

「えー。天使だったって、背中に羽はえてるし、鳥と一緒によ」

「一緒になさらないください!! もう」
クリスの手と、タマゴをもってリンの家に戻る。

まったく、この人なら大丈夫だろうと信用しきった私が馬鹿でした。

「リンさん、クリスさん、二人とも私が　　・・ラゴウさん?」
「なんや?」

リンとラゴウはゴロゴロと横になって本を読んでいた。
「り、りんさん?」

「んー?」
ぽりぽり・クッキーを頬張る。

「た・タマゴは?」
「リン」

クリスの声がキッチンで響く。
「んー?」

「お湯まけてるわよ」
「やべ」

「ギヤアアア!!!」
ヴァニラは頭を押さえながら悲鳴をあげた。

「なななな! なんでタマゴゆでてるんですか!」
「大丈夫、ぬるま湯だから!」

「お湯が沸騰するぬるま湯なんてありますか!」
「地獄じゃ序の口だぜ?」

「あなたのものさしで計らないでください・・・クリスマスさん！！タマゴは？」

クリスは可愛く首をかしげて、ヴァニラを指差した。

「さっきまでヴァニラもってたじゃん」

「は！」

クリスのタマゴいつの間にかクグリがアムアムと啜っていた。

「ふ・・・ふふ・・・いい加減に、おし！！！！」

リンの家は一時間後に解凍された。

「まったくもう、タマゴを茹でたり、啜えたり、転がしたり・・・信じられません」

ヴァニラに注意されて、クリスとリンは口を尖らせていた。

「交換条件はあなた方の代わりになる子を育てることですよ？そんなことでいいとおもってるんですか」

「はいヴァニラ先生」

「はい、クリスさん」

クリスは挙げていた手を下ろすと、意気揚々と言った。

「私達以上の神なんて生まれるはずが無いと思いきりマース」

「てか子育て無理」

「リンさん！発言は手を挙げてから！！」

かかと落とされリンは地面に埋まった。

「というかお二人ともが承諾されたことですよ？今更イヤも無理も糞もないんです・・・あらやだ糞だなんて・・・こほん」

ヴァニラはさつと腰から本を取り出し、タマゴを二人にそれぞれ持たせた。

「いいですか？まず生まれてくる子どもを想像しながらタマゴをなで、名前を呼んでください」

「そんなんでいいのか？」

「と、マニユアル本には書いていますわ」

「なにそのほん」

「子どもの育て方、別ヴァンですよ」

胡散臭いという主張を威嚇で流したヴァニラ。

二人はタマゴを撫でる。

「・・・名前どうしようっかな・・・」

リンは周りを見渡す。

「どうでもいいなーどーでも・・・あーどうしよっかねー」

「適当に決めたらシバきますよ」

「ヴァニラに先に釘を打たれた。」

「分かったよ、あーんじゃマリー・ゴールドで、いいや」

「クリスの持つてきた花を目に入れて決める。っつーか『で、いいや』っていつてる時点で適当って？気にしちゃ駄目だぜ」

「なでなでなで」

「パキ・・・」

「タマゴから黒い羽の子どもが生まれた。」

（悪魔が育てるから魔族か）

「クリスはソレをみて、ふむっと唸った。」

「その魔力量じゃ、話にならないわよリン」

「赤ん坊から感じられる魔力量は大天使ぐらい。つまり神以下」

「私は補足で魔力でも注ぎながらやってみましょう・・・生まれ出でよ！ヒカリ！！！」

「クリスさん！使い魔じゃないんですから」

「パキ」

「生まれた子は綺麗な典型的な天使の容姿をしていた。」

「まあまあね」

「クリスは赤ん坊を抱きかかえながらそういった。」

「・・・で？どうすればいいんだ？」

「泣き出した赤ん坊の口を塞ぎながらリンは爽やかに言った。」

「とりあえず、手をお放しなさい」

「やだ、五月蠅いだろ」

「リンは子育て云々の前に赤ん坊というものを教える必要があった。」

下

「たかいたかい」

リンは事務的な声でそういいながら10回建てのビルと同じ高さぐらいに赤ちゃんを投げてはキャッチして、投げては受け止めた。繰り返し繰り返し投げる受ける。

「リンさま・・もう少し柔らかく」

バードが手をおろおろとさせながらリンに声をかける。

そんなバードの心配とは裏腹に、リンはニカツと笑った。

「いいんだって、クリス村の重力にならすにはコレぐらいが丁度いいんだって」

「で、でも」

「よつと」

「ぴゅーん・・」

「ちー!?」

毎回恒例の飛行中だった鉄龍テッロンとマリーがぶつかった。

「あ」

「ごつつん!!」

「ち〜」

「ずぼ!」

鉄龍が地面に落ちて埋まった。

「とと」

リンはマリーを受け止め、身体の360度回しても、全然無傷だった、

「おおーお前、金属性か?」

笑うリンに対して赤ちゃんは大泣きを始めた。

対してクリス

「ヒカリ」魔法を使うときはね」両手使うのがいいよ。両手使って
「そう広げて」

手を振って喜ぶヒカリにクリスは魔法の基礎動作を教えていた。
クグリはその様子を見ながら汗を流した。

「マスター・・・」

「んー？そうそう、キャツキャツて手を振らなくてイーから」

「まだ早いのではないでしょうか」

「いいのよ、動作は今のうちから慣れさせたほうが後々楽でしょ？
私が」

ヒカリは両手を広げてぶんぶんふってはクリスにピタツと止めら
れた。

無茶な二人を遠くから眺めながらヴァニラは溜息をつかざるを得
なかった。

「ヴァニラさん？」

旦那様が歩いてヴァニラの横に立った。

色々な話し合いのもと、クリス村に来てくれると快く言ってくれ
た彼を、村長であるクリスたちは勿論認めた。

「どうかしましたか？」

「いえ、ちゃんと子育てできているのか心配で」

「ああ」

クリスたちはけっこう我侘で、偏屈なくせに寛大、でも他人の我
侘には厳しい。

そういつた性格であった。

「・・・りんさんはああ見えて手を焼いて育てたものには寛大に
なります、情がうつるのでしょう。問題は」

「クリス様ですか？」

「ええ」

強いものにも、弱いものにも、博愛で優しく接し、愛の女神たる
風貌を覗かせるが、彼女は処女神。

「何故だかクリスさんは自分の子孫を残すことを激しく拒絶しているのです」

「そうなのですか？」

「はい、何故だか本当に私には理解できませんわ・・・ですからクリスさんがキチンと子を愛せるかが気になるところですわ・・・」

毛皮を被るのは得意ですからね

「く・・りす・・さん？」

ヴァニラはふらふらする足をシツカリさせるために壁にもたれた。

「その、大量のタマゴはいったい？」

「どうせ育てるなら大量に育てて、大量にいい子つくったらいいじゃない、そんなかで競わせて一番がエデンを継ぐの、最高じゃない？」

「ヴァニラ大変や！」

ラゴウが息を切らせて走ってきた

「リンが子沢山になってもうた！！」

ヴァニラはとうとう堪えれず倒れた。

「ヴァニラー！！」

・
・
・

「だからね、コレはある意味いいことなのよ。今若いのは雑魚ばかりで上を占めてるのは転生ぞこないの老人でしょう」

「上に聞かれたら殺されるぞ」

リンの言葉にクリスは微笑んだ。

「私を殺せるとでも？」

「イツツも思うけどその自信過剰はどこからくるんだ？」

こどもを抱っこして不敵に笑うクリスを見て、さすがに苦笑いをするしかないリンを横目に、ラゴウ八樂しそうに子ども達のほっぺをつついていた。

「名前なんていうんや？」

「言っ
てなかつたわね」

前回生まれたマリー、ヒカリをのけて新たに卵をもらった数は3つ

「おれん
とこが、千鳥。カルミア。アルメリア」

「私の
子が、空。ラブ。名雪。よ」

「なん
や統率力のないなまえやなあ」

「いい
のよなんでも」

クリスはぶい
つと目を逸らした。

たぶん適
当につけたと思われ
る。

「にし
ても」

ラゴウは子
ども達を見ながら首
をかしげた。

「なん
で女ばつかやのん？」

「決ま
つてるじゃない」

クリスはふん
ぞり返った。

「女の
この方が可愛いから
よ」

まじか

妹達を見守るマリーとヒカリ。

優しく微笑み見守るヒカリと違い、不思議で堪らないという顔を
しているマリー。

クリスとリンはその様子を見ながらミルクをあつためていた。

「魔力注入しながら育てたら成長早かったな」

「そうね、ヒカリ、知識面では秀でたけど、技術が追いついていな
いわ」

「マリーは膨大な魔力を保持してるが、出す術をしらねえみたいだ
なあ」

魔法で子育ての途中過程をぶつとばしたらよくないということ
をよく理解した二人であった。

なので今回はじんわりやんわりと育てることにした。なのでミル
ク創作中

「じゃあリンちゃん私庭の草むしりいつてくるわね」

「おう」

「ミルク宜しくね」

「任せろ」

「.....」

火力をあげるリンを見てクリスは少し考えて。

「やっぱリンちゃんじゃ心配だわ」

クリスが二人に増えた。

「分身するまでもねえよ、ミルクぐらいできるって。多分」

「いいのよ」

片方のクリスは草むしりに歩いていき、もう一人のクリスは厨房
でお菓子を作り始めた。

「リンが私のキッチンで暴れないか心配だし」

「お前の中で俺はなんだよ・・・」

リンは頭をかいて苦笑いしていると、別部屋の子ども達の喧嘩する声が聞こえた。クリスが目で行けと命令した。

「赤ちゃんの近くで騒ぐな、どうした」

マリーとヒカリが叩きあいをしていた。五歳児の喧嘩にしては木刀とか、銃とか、過激な上に教育上よろしくないな

「ヒカリが邪魔する！」

「マリーが赤ちゃん殺すのです！」

「殺してないもん」

「殺そうとしたのです！」

・・・もう一度言おう、とても五歳児とは思えない内容だ。

「で？どうしたって？」

リンは赤ちゃんをみた。

口にタオル一杯詰め込まれていた。

「・・・・・・・・」

リンは黙って口からタオルを抜いて耳を当てた。

「ぴゅーぴゅー」

正しく虫の息。

「マリー」

リンが指を鳴らすと赤ちゃんは普通の息をしばじめそして大泣きをしばじめた。泣いているその赤ちゃんを優しく抱き上げてあやす。

「よしよし、で？何がしたかったんだ」

「ヒカリがしてたのまねしたただけだもん」

マリーは膨れながら言った。

「ヒカリ過激だな」

「違うのです、私はタオルでよだれ拭いてあげたのです！そしたらマリーが殺そうとしたのです！！」

「してないもん！」

「してたのです！」

マリーはどうやら不器用みたいだ。

「リン、みるくできたわ」

三人のクリスが現れると、赤ちゃんをそれぞれだっこして飲ませていた。

「クリス〜マリーが赤ちゃん殺そうとしたのです!」

「あら、そうなの。まあ、リンちゃんだもんね」

「ちよつとまで、なんでそこで俺だもんってなるんだ」
リンも赤ちゃんにミルクを飲ませる。

「マリー、千鳥にミルク飲ませてやってくれ」

「うん!・・・リン」

マリーが赤ちゃんを見ながらリンの名前をよんだ。

「ドレが千鳥?」

「あ?・・・あー・・・あ、俺が抱いてるやつだった」
千鳥をマリーに渡しながらリンは頭を押さえた。

「・・・こいつが、カルミアか」

左手で抱っこし

「でこいつが・・・」

右手にもう一人の赤ちゃんを抱っこした。

「こいつが・・・アメリカス!」

「アルメリアじゃなかったかしら」

「ああ、そうだったな」

クリスが呆れた顔をした。

「子どもの名前と顔ぐらい覚えておけよ」

「そのうち覚えるさ。な、アメリカス・・・じゃなくってアマメリア?」

「アルメリア」

クリスは首を振った。

「あっ」

マリーが千鳥を落とした。

ヒカリが悲鳴をあげる。

「りん、あんた子育て向いてないわね」

家の横の広大な農場での仕事を終え、優雅に紅茶を飲むクリス。

「クリス・・・」

ヒカリがおずおずと建物の影から顔を見せた。

「ん、どうしたの？」

コップを置きながら訊ねれば、ヒカリは頬を染めながら聞いた。

「お膝の上に、すわっていい？」

「いいよ、おいで！」

ヒカリは嬉しそうにクリスの膝の上に座った。クリスは嬉しそうなヒカリの頭を撫でながら、疑問を口にした。

「どうして、私がオリジナルってわかったの？」

赤ちゃん達のお世話や、家の掃除、お菓子づくりをしているクリスは、クリスのコピーであり、ここでのんびりしていたクリスがオリジナルだった。

「分かるよ、だってお母さんだもん」

ヒカリは、春の木漏れ日のような暖かく輝かしい微笑を見せた。

「・・・ヒカリは、そのうち春の女神の称号を手に入れるかもしれないわね」

「？」

クリスはヒカリの頭を撫でた。

「ヒカリ」

「なあに？」

「アナタは賢いから、先に教えておくわね」

クリスはヒカリに耳打ちした。

「神は神であるが、神は神を越えれず、人より優れている人、それが神」

ヒカリはクリスの顔を不思議そうに見たが、クリスは微笑んで紅

茶を飲んだ。意味は自ずと分かるだろう。そういう顔で

「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らずという言葉を残した人間が居たわね。大きな挫折や苦しみ、罪を認め、受け入れた本当の人間らしい言葉だわ」

風がそよそよと吹き、花びらが散った。

「果てしなく時間は流れるな、誰か特定なわけでなく。永久に」

「リン」

木の上からリンの長い紫色の髪の毛が垂れる。

「俺さ、たまに思うんだ」

「何を」

「お前さ、なあーに考えてんのかなって」

葉っぱで作った草の妖精を手のひらから放ちながらリンは消えた。クリスは鼻で笑った。

「何を考えてるかって？おかしなこと聞くね」

クリスは指を鳴らして葉っぱの妖精を花の妖精に変えた。

「考えない『我』なんて有り得ないわ」

ヒカリは温かい日差しに眠気に襲われたらしく、目をこすってクリスにもたれた。

「よしよし」

優しくその頭をなで、クリスは子守唄を静かに歌った。

「天界ほど、曖昧なものはないのよ、リン」

「りんー！」

クリス村の山のふもとでお昼寝をしていたリンに気がつくことなく誰かが踏んでいった。

「みごとに踏んだのに気がついてないわね、あの女」

「あー、マリーおったで？」

「え？どこよ」

マリーはもう一度戻ってくると、ワザとじゃないかって言っぐらいピンポイントに踏みつけた。

しかし気がついていないらしい。

「リンー？ちよつとカルミア！千鳥！リンいないじゃない」

腰に手を当て、紅い髪の毛を揺らして怒るマリーに、ずれたメガネを直しながら千鳥は溜息をつき、指を下に向けた。

「？」

マリーはそこでやっとリンを見つけた。

「リン！みつけたわよ」

「・・・見つけたのはカルミア。マリーは何もしてないわ」

「お黙リアメリアス！！」

「アメリア・・・はあ」

リンは頭を押さえながら起き上がった。

「お前等やる気ねーだろ」

「寝ていたリンに言われたくはないわね」

カルミアのコメントにリンはぼりぼりと頭をかいた。

「マリーは馬鹿正直に探すし、千鳥は変な機械作って自分で探さないし、カルミアは分かかって探さないし、アメリアは」

「名前」

いまだ間違えられるアメリア・・・。リンは溜息をつくとき指を鳴

らし、キメラを召喚した。

「よし、じゃあ次はお前等が逃げろな」

指を娘達に向けて鳴らし、リンは嚙殺される前に逃亡した。

「え」

ぐるると威嚇すると、キメラは闇黒の翼を羽ばたかせ飛び掛った。

「ぎゃあああああああ！？」

リンは断末魔を聞きながらクリスの家に入った。リンの家とは違ってクリスは一人お茶を飲んでまったりしていた。

「お？修行は？」

「精神修行中よ、マシロの空間で自分と戦ってるはず・・・サボってなきゃね」

「マシロの空間は無の魔女の統べる世界だろう？あの魔女は無駄に強いから、あいつらじゃまだ無理だろう」

「そう思う？」

クリスはリンにお菓子を渡しながら微笑んだ。

「違うのか？」

クッキーを手にしたその手をクリスは遠慮なくこぶしを落とした。

「いったあああああああ！？」

「違みたいだな」

リンはクッキーを口に頬張りながらうなづいた。

「修行さぼってんじゃねえぞ？ラブ」

クリスの笑顔でドスの聞いた声にラブはえへへと可愛らしく笑った。

「あらーさすが私の娘、可愛い笑みねー覚悟できてんだらうな」

両手からコオオオと音のする光を発光させる。

「げえ！？ごつめんなさーい、今すぐ戻りまーす」

ラブは何も無い空間に穴をあけると、その中に飛び込んでいった。

「あいつ、いまんとこ一番強いかもな」

「魔法力で言えばね、あんたんとこみたいに力で言うなら空のが一番強いわ、知恵ならヒカリ・・それから」

「いいよもう、なんか凹むだろう？俺の子がぼろぼろになったリンのファミリーが武器を片手にリンに威嚇した。」

「リン、お前〜！！！」

「再生と回復なら群を抜いているぞお前等」

「『知るか！！』」

「クリスは外に逃げていったリンを見送りながら、お茶を飲んだ。
「へたな鉄砲数うちやあたるって、嘘ね」

クリスの育てる娘はどれも、普通の天使には到底及ばない美しさを兼ね備えていた。その理由はクリスが美の女神の称号を持っているゆえの影響と思われるが、とにかく美しい。

只一人、名雪を除いて。

「……こいつ、いつからお面被ってたっけ」

リンは木陰で本を嗜むお面少女を見ながらクリスに話しかけた。

クリスお気に入りで自慢の庭園で自分の村の子どもらと一緒に編み物をしていたクリスは、手を止めることなく即答した。

「そういうものよ」

「まじか」

子ども達は時間を見ると、手を置いてクリスの服を引っ張った。

「おかしーおやつー」

「クリスのおやつーおやつー」

リンはソレを見て、同じく時計を見た。

「三時か・名雪ってさ、オレのこのアメリカスと仲いいじゃないか？あいつらそろいもそろって無愛想っつーか、反応薄いよな」

「育てたのは私達でも、創造したのは私達じゃないし、あの子達も同等に扱われているけれど、階級的に見たらバラバラだものね」

天使レベルの子もいれば神レベル、それ以上のこもいるが、クリスたちと同等レベルは居ないので、あれだが、ちゃんと両親に育てられていれば出会うことすらなかったであろう娘達だ。

レベルも鍛えれば上がるから、階級制度も下克上すれば関係ないが……。

「名雪」

アメリカスは名雪の隣に座ってその肩に触れた。

「ん」

「その本貸して」

「いいよ・・・」

二人の貸し借りを見ながら、クリスはお菓子を用意しながらリンに言った。

「私の娘は共通するところあるけど、あんたの娘皆無よね」

「あるよ、そつちだつてないだろう」

「皆共通して賢いもの」

「それはねえけど、俺の娘だつて共通するものあるぞ」

「なに？」

お菓子に手を伸ばしてにかつと笑った。

「戦闘不能になつても五分で即復活だ」

「そりゃすごい」

クリスは紅茶をつくりながら流した。

「・・・あ、ねえ戦闘馬鹿のリン？」

「戦闘馬鹿は余計だ」

「空の相手もしてくれない？あのご魔法より体動かすほうが向いてるみたいなの」

「マリー相手にさせればいいんじゃないか、あいつムカつくぐらい挑発してくるのに逃げ足はやいし、訓練になるぞ」

「いやだよ」

空がリンの後ろで否定した。

リンは振り返ると、よつと手を上げた。

「あいつ、弱いじゃん」

子ども達に混じつてお菓子を啄ばむ。

「三分で終わるよ」

「なによ！年下の分際で生意気」

「げ」

たまたまクリス庭園前を通ったマリーに聞かれたらしく、酷く憤慨していた。

「あーはいはい悪かったな」

空の悠然とした態度に腹が立ったのか、マリーはしょぼい魔法力で空の顔面に気孔弾をぶつけた。

「ぶー！」

「おーほほほ！ざぁみそらー！！」

「あいつアクに似てきたな」

「そうね」

空は逃亡を図ったマリー目掛けて高く跳び上がり、そのまま力カト落として撃沈させた。

ソレを見たクリスは紅茶を飲みながらリンに言った。

「三分ももたなかったわね」

「あいつは俺も認める雑魚だからな」

でもヤツパリ復活は早かった。

「おぼえてなさいよー！！」

「はあ」

「アメリカス、これ洗つといて」

カルミアはたまつた洗濯物をアルメリアに投げつけた。アルメリアは小さく溜息をついてカルミアを睨みつけるように言った。

「私アルメリアなんだけど」

「どつちでもいいわ、やつときなさい」

カルミアはラブとさつさと遊びに行つてしまった。

アルメリアは怒りマークを一瞬出したが、リンの家は平等ではないし、リンが家事をするわけもない。力がすべての家にどうしようもない怒りを覚えた。

リンの子の中で今一番強いのはカルミアなので誰も彼女に逆らえない。

アルメリアも次に強いのにこき使われているのは、他の女がかなり家事全般できない使えないという理由だけだった。

「あー、アメリカス、ちようどよかつたわあ、ワイの部屋片しとつてくれん？」

千鳥はリンの親友ラゴウと仲が良く、よくわけのわからない機械作つてはラゴウと遊んでいた。今日も遊びに行くらしい、力的には弱い千鳥だが、彼女の作る兵器には勝てないのでアルメリアはうなづいた。

洗濯を終わらせて千鳥の部屋に行くと、天井まで届いた機械の材料が一杯積んであった。

「……どれをどうかたづけろつて？」

怒りマークが増える。

「はあ」

しばらく頑張つたが、諦めた。

家を出ると、うざい姉マリーがやってきてこう言ってきた。

「アメリカス！私の服知らない？」

「知らない・・・あとアルメリアだから」

「そんなことより、ミニスカートワンピースよ！？本当に知らないの？」

「知らない」

「なんで知らないのよ」

「いや、知らないから」

わけの分からない怒りを押し付けられ、アルメリアは怒りを抑えるのに拳を握り締めた。マリーを片手で消し去れる自信はあるが、腐っても姉妹。

リンは何故か兄弟の殺し合いを激しく嫌っていた。

自分も兄弟に命を狙われたから・・・？

「じゃあ探しておくから・・・それでいいでしょう？」

「最初からそういいなさいよ！」

マリーの傲慢な態度にイラつく。

リンはマリーの傲慢で我侷で不遜な態度については何も言わない。悪魔らしいといえば悪魔らしい性格をしているが、力社会の魔界でそれはどうかと思う。

あの博愛であるクリスマスですらイラつかせ、一度消されそうになつた・・・てか消えた。

でもリンが息がえらせた。

『クリスマスを怒らせるなよ？』

そういつて頭を撫でたらしい。

「・・・・・・・・」

イライラがズキズキと痛みに変わつた。頭が痛い。口元がひきつるのが分かる。ドロドロとしたねっとりとしたどす黒い何かがたまつていくのが分かる。

「アルメリア」

名雪がそつと声をかけてきた。

「気が・・・禍々しい。どした？」

「……なんでもないわ」

心配そうな名雪に心配かけまいと微笑んだ後、嫌々マリーの服を探しに家に戻り、彼女の部屋を空けた。・分かつちやいたけど散らかっていて、無駄に大量の服が錯乱していてどこになにかあるのか分からない。

「探さなくていいや」

扉を勢い良く閉めながらアルメリアはリビングに移動した。

「っ」

ずきずきと痛む頭を押さえながらアルメリアが溜息をつく、キッチンに立つと青い髪の毛をなびかせ、すらっと長身の女が横に立った。

「アルメリア様。ご病気ですか？」

「・・バード」

リンの使い魔。使役する使い魔のレベルをみれば使い手の器も知れるものだ。私も他の姉妹に負けたくなくてドラゴンを使い魔に契約したが

『無駄に強そうな使い魔を使役してたら、契約者のほうが弱いと思われるわ』
わかれて攻撃されるわよ？』

と、カルミアに鼻で笑われた。

「少し頭が痛いだけよ」

水を飲みながらそういうと、バードは微笑んでそっと頭痛薬をくれた。

「そついえば、この後クリス様のお家でお茶会するそつですわ。皆さんきつと集まっていますよ」

「おい、バード、そろそろ行くぞ」

「はい、リン様」

「ん？アメリカスどした」

「アルメリア」

ずきずきと頭が痛み、不機嫌になる。

「へえ？」

リンはふつと笑った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・っ！」

ぶちっつっ!!

怒りが頂点に達した。

「きゃ!?!」

バードがリンの影に戻った。

アルメリアの体が紫色のドス黒い霧に包まれた。クリス村全体が闇黒に染まっていった。

「クリス! コレ何事?!」

驚いたクリスチルドレンがクリスに問いかけた。クリスは特にあわてずにあっさりと言ったのける。

「アルメリアの力覚醒ね」

「力?」

「そう、アルメリアの力・・・それは」

突如カルミが血を吐いて倒れた。

「な、にこれ・・・」

血で濡れた手を見ながら呟くカルミアのすぐ後に、目や鼻や口から血を吐いてマリーは倒れた。

「うう、なんやコレ・・・い、いたい! 痛い!」

千鳥は頭を押さえて呻く。眼球が飛びそうなくらい大きく膨れ上がっていた。

「『呪い』よ」

クリスは欠伸をしながら言い、指を鳴らした。

リンの家にいたアルメリアとリンが外に出現した。ごごごとと紫色の炎に燃えるアルメリアに臆することなく笑っているリン。

「なんで・・・私がこんな目に」

地に響くような声。

「なんで、こいつらに」

憎くて堪らないというような憎悪

「なんで、お前はっ」

『呪い』が大蛇と姿を変え、威嚇した。村人はソレを見て大慌てで逃げ去った。呪いの邪気に当てられ何人かが体調を崩し倒れた。

「う」

天使であるクリスチルドレンも例外ではない。

「かるみーん、何怒らせたわけ？」

「あんたは平気そうねラブ・・・」

「出来が違うからね」

蛇がゆれた。

「苦しめ!!」

アルメリアの蛇がリンに襲い掛かった。

「は？」

「ぱぁん！」

「!!」

蛇が一瞬で消された。

「舐めんなよお前、俺を誰だと思ってんだ？」

「っ」

全身の力を使いきったらしいアルメリアはその場に倒れこんだ。

リンはゆっくりとアルメリアに近づいた。

裏切りは大罪。それがどの種族であろうと同じ、報復には『死』を

「お前には・・・死んでもらう」

リンの手が伸びた。

「っ!!」

きゅっと閉じたアルメリアの頭の上に、暖かい感触が乗った。

「・・・?」

目を開けると、優しく微笑んだリンが居た。

「なんてな」

にかつと笑うと指を鳴らし、傷ついた姉妹達が復活する。

「さ、パーティーね」

クリスが指を鳴らすと机の上のお菓子が増え、可愛い飾りも増えた。

「何これ」

「祝い」

「なんの？」

リンはアルメリアを持ち上げ笑った。

「アメリカスの『祝いの神』の称号授与祝い」

「・・・アルメリア・・・もう、いいわ」

そういつて、皆で笑った。

いつか祝い殺す。

クリス家でたった一人の体育系、『空^{そら}』
魔法が使えないわけでも、弱いわけでもないが、長い詠唱魔法は
じれったくて面倒だし、魔力を練るのはなんだか数秒だけど、時間
かかるからイヤだ。

そういった理由で相手を攻撃するなら、魔法より拳と考えていた。
「ふー」

今日の分の修行メニューをこなし、息を吐く。

「空、お疲れ様」

「ヒカリ」

長女であるヒカリは微笑みながら空に飲み物とタオルを渡す。

「ありがとう」

空は素直にお礼をいい、飲み物を飲み干す。

クリス家一の性格のよさをもつヒカリはよくみんなの世話をしている。基本、リンもクリスも『自分のことは自分でしろ』という精神なのだが、ヒカリのおかげで、たいぶ修行に集中できる空は彼女に頭が上がらなかった。

「そういえば、ヒカリってさ、最近クリス村をでて天界にいつてる
ってマジか？」

「ええ、そうよ」

「何しに行ってるんだ？」

「ただの散歩よ」

木の陰で休みながら他愛も無い会話をする。

「空は、そんなに強くなるうと頑張ってるけど、強くなってどっす
るの」

「んー？別に、意味は無いけどさ」

空は自分の拳を見た。

「どこまでいけるか、試したいんだ」

「えっらいことねえー」

「マリー」

アクそっくりのきわどい服を着たマリーが買ったばかりの宝石の腕輪を見てうっとりしながら空を見て、鼻でわらった。

「神といえば、髪の毛の長さ色の濃さでその強さがわかるというけど、あんたって男みたいな短い髪の毛にしてさ、弱いんじゃないの」

「黙れよマリー、お前だって髪の毛長さ最大で腰までしかねえだろ
フルパワー
うがよ」

通常の人はある程度魔力持つ人は髪の毛の長さを調整できる。

でもマリーはできない。弱いから

「女は色気よ」

いきなり話をかえたマリー

「あんたみたいな男勝りな女は一生結婚できないわね」

「うるせえな、俺にいちいちつかかってくるな」

「そうじゃないと、誰も相手にしてくれないのよ、きつと」

「ちよつとヒカリ！アンタ最近私に対してシビアじゃないの！？」

「気のせいよ」

微笑みながら親指を下に突き出すヒカリ。

マリーは地団駄ふみながら悔しがった。

(器ちつちええなあ、あいつ)

空気を切るような音が聞こえたと思ったら、マリーの頭に何かが直撃した。

「あ、鉄龍」

「今日は針龍クリスが使用するって話で、いなかったわね」

「マリー、運ねえな」

血をどくどくながすマリーを見ながら二人は納得する。

「さ、俺修行はじめるかな」

「頑張ってね」

空はマリーをあえて踏んで進んで行った。

「お？」

クリス村はずれの森の中に入ると、黒い翼の生えた獣やヤギのよ
うにとがった角を生やした骸骨、ホーリーベルを武器として携えた
天使がリンを囲んでいた。

「お前の『力の神』の称号を頂く」

「ん？」

リンは頬を染めながらとろんとした瞳でそいつらを見た。

「んふふふ」

手には泉水桃せんすいとうこの桃を水に入れるとそれが酒に変わるといっ、レ
アアイテム。それを使ってリンは一人宴会をしていたらしい。

大量に空になった弁当箱と、空になった泉水。

リンは横になると寝始めた。

(なんつう豪快な)

無視された敵は怒り狂った。

「死ね！」

空はリンの前に立ち、敵の攻撃を跳ね返した。

「おい、リンよお！こいつら本気みたいだぞ！！」

「んっふっふ」

「駄目だこりゃ」

「邪魔するなら貴様から殺す」

魔法弾を連発で打たれたが、空は拳ですべて跳ね返した。

「ち、仕方ねえな」

空はわくわくと笑いながら構えた。

「俺が相手だ」

下

「はあはあ」

空は数分で全員を倒した。

溜息つきながら尻尾を巻いて逃げていく敵を見送り、リンを起すために振り返ると。

「むしゃむしゃ」

ビール片手にイカ焼き食って横になってるオッサン（リン）がいた。

「……………」

にかつと笑った。

「お前まだまだだなあ、あんぐらいで息切れかあ」

「いつから起きてたんだよ」

「寝てねえし」

いや寝てたろ。

「じゃあお前が来てから」

「最初から起きてたのかよ!」

「いつてんじゃん」

なにこいつ、じゃあワザと寝たふりしたのか

「お前、おれを試したな!」

「試してねえし、勝手に戦ったんじゃん」

「んな」

リンは起き上がると、指を鳴らし宴会セットを消した。

「クリス村では自己能力三分の一まで下がるからあの程度でてこずつてたらお前、外出てもやられるぞ?へへへ。つっても向ここの能力も下がってたけど」

「何が嬉しいんだよ!」

「お前、俺が襲われてると思って助けたらう、あつめーなあ」

「イラ」

空はこおおつと怒りの炎を燃やし、リンに向かって襲い掛かった。

「もうゆるさねえ！ぼこっぼこにしてやる」

「なんで怒るんだよ！？」

リンはバック転で攻撃を避けると、先ほどまでリンの居たところには大きなクレーターができていた。

「ほほほほ！」

「笑ってんのか感心してるのかどっちかにしろよ！！」

リンは大きく飛躍する、そのまま地面に着地すると煙のように姿を消した。

（気配が無い、村か）

空も急いでリンを追いかける、このままでは気がすまない。

「クリス」

「あら、空」

洗濯物を干していたクリスに話しかける、事情を話すとクリスは困ったものを見るように笑った。

「そんなことで一々怒ってたら、身が持たないわよ？特にリン辺りには」

「シビアだな」

「そのうち分かるわ、で、リンならそこで子どもらと遊んでるわよ子供かよ！」

気配を消してリンに近づくと、会話が聞こえてきた。

「ねーリンって強いんだよね」

「おう、強いぞ」

「うっそだーいっつもクリスにやられてるじゃん」

「ソレとこれとは別なんだよ」

リンが唯一頭が上がらない存在は彼女だけだ、空は二人の関係性を良くは知らないが深い絆で無図ばれているような気がする、血が

繋がってないにしろ、少なくとも家族である我々よりも繋がっていた。

「じゃあさ、リンちゃん自信はどのくらい強いの？」

「ノミを指二本でつぶせちゃうぜ」

「ちいっさ！お前の強さちっさいな！！」

「おお、空か」

つい突っ込んでしまった。空はこうなったらと先手必勝で先に動いた。

地面が割れる。

りんは子供たちを魔法で移動させて、自分は上空に逃げていた。早い。空はにやりと笑い気弾を放った。それはひとつとしてあたらなかったが、りんの動きを止めるのには十分であった。

「もらった！」

こぶしを握り、りんの顔面を狙った。が

「お前って素直だな」

「！」

リンは背後におり、さっきまで狙っていたリンは人形だった。

「お前じゃ俺倒せないよ」

紫色の色を帯びた雷がリンの手の中でうなった。

「しまっ」

・・・これ食らったらさすがにやばい！

覚悟を決めて目を閉じると、リンがぶっ飛んだ。

「！？」

驚いた空の目の前を鉄龍がリンよりも遅くおちていった

「もう、リン」

それを投げたのだろう人物が微笑んだ。

「それはやりすぎでしょ？」

「はい」

一番強いのは、やはりクリスらしい

「ヒカリ、天界に出て行つたんだって？」

クリスにリンが問えば、クリスは頷いた。

「天界を知り尽くしたいんだって、いずれあの子には『知恵の神』の称号を与えるつもり・ああ、そういえばリン、空に『力の神』の称号譲つたんだって？ありがとう」

「いいよ、別に。これでやつかみに喧嘩うられないしな」

豪快に笑うリンにクリスはお菓子を渡してやる。

「ラブは『時の女神』名雪は『技術の神』空は『力の神』」

「カルミアは『酒の神』アメリアスは『呪いの神』千鳥は『機械の神』」

それぞれきちんと神の称号を手に入れた。

称号は身分証明のようなもの、称号もない神は思った以上にたいしたことない。

そして、それに当てはまるのが

「・・・マリー」

リンは哀れむような目でマリーを見た。

ノー称号。

「・・・ヒカリは言っとくけど、自分で辞退したから、まだ早いからって」

「分かってるさ」

リンはお菓子を口に入れながら悩んだ。

子の不始末は親の不始末。

マリーが弱いのは、リンのせい。あながち間違っちゃいないが対処しなければほかからちよっかいかけられるだろう、それも面倒だ。「さて、どうしたものか」

リンの悩みとは裏腹に当の本人は天界のアイドルになるの〜なん

て、大して美しくないのに着飾って毎日遊んでばかりいた。

「ニートの娘を持った気分だ」

「実際そうじゃないの？」

クリスは冷たく言い放つ。

「リンはね、放置しすぎなのよ、たまにフォローしなきゃ」

「だりい」

「即答かよ」

クリスは指をならすと、どこからもなく本が落ちてきた、それをキヤッチするとぱらぱらと本をめくる。

「称号リスト・長生きな神も隠居生活からそろそろくたばり始めてるみたいね、称号結構あいてるわよ・でも、そうね」

文章を追っていた目が閉じた。

「マリーが取れそうな称号はないわ」

「逆にすごいな」

「すごかないって、いや、すごいか『馬鹿の神』ですらできないんだもの」

「……」

リンはもはや、何もいえなくなった。

「私なら縁切るけど」

「お前ならな」

リンは紅茶で口を潤わせ、立ち上がった。

「マリーを少しの間アクに預ける」

「アクに？」

「ああ、あいつならマリーもまだ言うこと聞くし、運がよければアクの称号を譲ってもらえるかもだろう？」

「アクの称号だったって『魔界の貴婦人』じゃない、神じゃないし、アク自身の称号って正しくは『化粧の淫魔』じゃない」

「もう、この際なんでもいいだろう」

「リンも十分放棄してるって」

下

「てなわけで頼んで一週間たったが」

リンは牛の身体を洗いながらマリーを見た。

「なんで出戻ってんだ？」

しかも前にもまして露出度の高い服になっているし、化粧も濃くなっていた。そして態度が格段に悪くなっていた。

「リン様」

バードが空からゆっくり降りてくると、手紙をリンに渡した。

「アク様からです」

「どれ」

手紙を見る。

「・・・・・・・・・・」

「アクからの？なんて？」

お花の水やりを終えたクリスが顔をのぞかせ、手紙に覗き込んだ。

「・・・・・・・・・・やるわね」

『リンへ、無理だ。つかクスリがキレた。魔界の侍女をうんざりさせるなんてある意味才能だとおもっわよ。結論、無理。そもそもあたしや本当の祖母じゃないしな、無理。無理無理』

「・・・・・・・・五回の無理コールね」

「しゃーねえなあ、次はどうすっぺかな」

リンは頭をかいた。

「お手あげだ」

「はや」

リンはやれやれと次の牛の身体を洗う。

「マリーにやる気ないからな・・・何をやらせても無駄だろうっよ」

「そうね」

「こればかりは仕方ない。」

「……称号がなんでもいいんだけどな」

「ごしごし、ブラシをせわしなく動かしていたが、リンはふと思いついたようにとまった。」

「無能の称号は？」

「『怠惰の神』が兼用よ」

「……そっか」

ため息。

牛を洗い終わるとリンはマリーのところに行った。

「マリー」

「あら？何」

「お前なあ、このままだったら俺はお前を追放しなきゃいけない」

「なんでよ！」

親の七光りで生きてきたマリーにとっては死活問題なので、食いつくように飛びついてきた。

「称号はお前がおもっている以上に重要なんだよ。称号もないやつが俺の身内なんて知られたら、俺じゃなくてお前が狙われるんだよ」

「だったら守ればいいじゃない」

「そこは自分で守れよ」

「いやよ、だって私弱いんだもん」

「そこは自覚していたらしい。」

「はあ」

リンはマリーの頭をつかんだ。

「いいか？俺も善処する」

「どんなしよぼい称号でも、称号は称号だ」

「称号が入れば、今ままでどうりクリス村にいられる。でもな、もし手に入らなければ」

「っ」

「俺はお前を殺さなきゃいけない」

「ひっ」

マリーは顔を真っ青にさせて床に倒れこんだ。リンはその様子を無表情に見つめながら部屋を出た。「本気？」

部屋をでると、カルミアがいた。片手にはワイン。少しよっているのか頬が赤い

「ああ」

「やったね」

うれしそうに微笑み歩き出した。

「私嫌いなマリー。家族でも所詮あれでしょ？私たち、血のつながりなんてないじゃない？」

「カルミア」

「んー？ - - -っ！」

リンの手で顔をつかまれ、前が見えない。

驚きで落としてしまったワイングラスの割れる音が聞こえた。

「嘘でも本気でも、そういうことをいうな。・・死にたくなきゃな」

「わ、かったわ」

「ならいい」

リンの顔を見る前に、彼女は去っていった。

「・・・・なんなのよ」

「あら、びびったのカルミア」

「クリス」

カルミアは髪の毛を整えながらいつものように冷静を装った。

「なんなのよ」

「リンはね、そういうやつなのよ」

クリスは指を鳴らし割れたグラスを元に戻しカルミアに渡した。

「カルミア、家族で血もつながっていても、それが何の意味になるの？大事なものはひとつ」

「・・・・？」

「絆でしょ？」

クリスの微笑みに、カルミアは何もいえずため息をついた。

「カルミン、やられちゃったとかいうやつ？」
「ラブ」

クリスの去った後にラブは長い時の女神のみ持つことが許された
ロツトを持って現れていた。

「からかうものじゃないわね」

「そうだね、やぶへびなんとかってね」

「どうせマリーに称号なんて無理でしょう」

「ん〜そうだね、普通なら無理だね」

ラブのほうをカルミアはにらんだ。

「未来みてきたのね？」

「見たといえば見たし、見てないといえば嘘になるかな」
「なにそれ」

「時の調整中は断片的にいろいろ見えちゃうものなの」
「そういつてラブは舌を出して逃げた。」

『カルミアも、まだあんまりついちゃだめだよ』

「さて、どうしようか」

「リン・・・？」

名雪が珍しく悩んでいるリンに声をかけた。

「ああ、名雪・・・顔見せてくれ」

「いや」

「即答か・・・実はな」

「こののあらましを説明すると、名雪は頷いて指を立てた。
「だったら」

「え」

お菓子を食べていた空は口からクッキーを落とす。

「マリーが称号を手に入れた・・・？」

「ええ」

クリスは紅茶を入れながら空の前に座った。

「うひひ、何の称号か知ってる？」

「あ？ラブは知ってるのか」

「うん」

クリスは鼻で笑った。

「お、ちょうどいいところにマリー」

「げ」

いやそうな顔でマリーは走って逃げた。

「なんだよ」

「マリーの称号はね」

「………？」

『リンの娘』

「クリスさん、少しいいですか？」

「ん？」

ヴァニラがクリスに話しかける。

「かしこまって何？見合いならいやよ」

「いいえ、そうではないのですが・・・天界の天使をクリス村で保護してほしいとのことですよ」

「へえ、別にいいけど？」

「そうですか・・・」

ヴァニラは横にずれると後ろには淡いピンク色の髪の毛をふわっと伸ばしたエンジェルがいた。彼女はクリスと目が合うとにっこりと愛嬌のある笑みを浮かべた。クリスは好感を持ち歓迎した。

「ミルフィ・ハニーっていいですよ！クリス様に迎えていただき感謝でございます！！」

「あなたの家はここね」

地図を渡し村の条約について説明をした。

「あわわ、目が回りました」

「ゆっくり覚えていけばいいわよ」

「はい！がんばります！」

クリスは微笑んで見送った。

「さてと、今日はケーキでも作りましょうか」

クリスは冷蔵庫を開けた

「あ、ない」

イチゴが切れていた。

クリスは自分の自慢の農業畑に行き、イチゴを採りに出かけた。

「あ〜」

まだ採りごろではなかった。

とれないこともないが、クリスマスははまだというタイミングでない
とつみたたくない主義だった。

「クグリ」

クリスマスはクグリを呼び出した。

「天界でイチゴ買ってきて」

「はい」

すうっと消えた従者を見送ることもなくクリスマスは腕を組んで今日
の飲み物を何にするか考えていた。

「……ん？」

天界お見通し新聞紙を手取る。

「なぞの『イチゴ泥棒ついに逮捕』・イチゴ泥棒？」

天界にもくだらない泥棒がいたものだ。

「クリスマスなみてんの」

「あら、ラブ・新聞をちよつとね」

「ああ、それ？知ってるよー天界ならず地界人間界魔界幻獣界のイ
チゴというイチゴをとりつくすつていう、変な泥棒だよね」

「そうね、変ね」

ラブがクリスマスの畑のあるほうを見た。

「……」

「……」

クリスマスは新聞を投げ捨てた。

「何？」

「やー、クリスマスも気をつけたらいいんじゃないかな」

「何に？」

「泥棒」

クリスマスはラブを見て鼻で笑った。

「私を誰だと思ってるの？つというかイチゴ泥棒捕まってるじゃない
い」

「そうだけどねえ」

含みのある笑みを浮かべたラブはクリスマスが何か問う前に時空を移

動して消え去った。

(わが娘ながら、読めないわね)

それでも負ける気はしない。

「……一応魔法かけときましょ」

扉を開け外に出ると、申し訳なさそうな顔でクグリがたっていた。手には何も無い。

「クグリ？」

「申し訳ありません、天界にもどこにもイチゴが無くて・・・」

「ああ、新聞で見たわ泥棒のせいでしょ？仕方ないわ、明日にしましょ。戻っていいわ」

「はい・・・」

クリスはおやつ時間ごろに来るであろうリンに、何をかわりに渡すか考えながらキッチンに立つ。

「なんか用？」

クリスの背後にはクスリ。彼女は微笑むとクリスに紙飛行機を飛ばした。

「最近は大変な物騒なものでね。異次元に進出し、最高神として君臨しようとする輩も増えてきたのよ」

「時空^{トラバ}管理者がそのためにいるんじゃない」

「まだロットを扱えきれていないわ」

「そういうふりをしてるだけじゃなくて？」

「あら、そう思うの？」

「まあいいわ、で？」

クリスは紙飛行機の紙を広げた。

「この記録と私に何の関係あるわけ？」

「リンとお前はいわば表裏一体・あまり行き過ぎた行為を控えるように注意するのも相対の我らの務め。その記録にあるように、リンは異次元を飛びすぎてる」

「飼い犬をしつけるのも大変だわ」

「リンにかぎってはないと思うけれど、頼むわね」

「・・・リンねえ」

消えたクスリの残像を見ながらクリスはつぶやいた。

「私とは違うものね」

クリスは白い純白の翼を広げた。

「相對ね」

一枚の羽を残し、彼女は時空を飛んでいった。

この後に起きる事件も知らず。

「もうリンいい加減にしてよね、どこにいるのよ」

いろんな次元を探し回ったがリンは一向に姿が見えない。いらいらしながらもクリスは家に戻った。

「一日たっちゃったじゃない。戻ったらお仕置きね」

ふうつと一息ついて、ふと顔を上げる。

「おやつ作ったら勝手に戻ってくるか」

一応探したんだから、別にもう自由に行動してもいいでしょ

そう思いクリスは魔法で鉄をとりだし、自慢の庭園を進み、広大な畑に入っていく。その奥にクリスが大事に育てていたイチゴをとりにビニールハウスの中に入った。

「!!!」

クリスは空の籠と、鉄をその白いしなやかな手から力なく落とすた。

「イチゴが・・イチゴがとられてる!!!」

しかも食べるとき!つという時期のイチゴのみ

「.....だ〜れ〜が〜ああああ」

クリスは怒りに燃えて走り出し、12神を呼び出した。

クリス邸にて集められた12神（リンは欠席）はため息をついてあきれていた。

「ころすころすころすころすころころころこお」

「怖いっ怒り心頭だな」

「私の魔法かいくぐってイチゴ盗むなんてお前ら以外にいないのだよ」

「集めた理由それかよ!!!」

クリスはふんつと鼻を鳴らした。

「といつても、あんたらが私にそんな挑発的なことするような命知

らずだとも思わないわけよ」

みんなはじゃあなんで、という顔をした。

「お前たちがその気がなくても、必然的に手を貸してしまっている・
なんてこともあり得るでしょう?」

彼女たちは頭をひねって考えてみたが、首を横に振った。

「最近クリス村から出てないから、ないわ」

「せやな、わいもリンと・・あつ」

ラゴウは慌てて手で口を押えたがもう遅い。

すかさずクリスはラゴウの頭をつかんだ。

「リンと・・何?っていうかリンがどこにいるか知ってる?」

「し、知らへん、わいは別になんもいうてへんねん」

「へえ?隠し通せるとでも?」

クリスの笑顔が怖い。

「よお、みんなそろって何してんのさ」

「リン!!!」

手にはイチゴ。

「おまえかああ!!」

「え?なにになに??」

クリスは魔法で出したハリセンでリンを殴ろうとしたが、手を止めた。

「ん」

「どうしたクリス、やらないのか」

「リン、あんたいままでどこいったの?」

「スイート・スイート・フルーティアっていう次元世界で果物狩り
してた」

リンの腰にはたくさんのお菓子がいっぱいだった。

「どつりで、私のイチゴに劣ると思ったわ」

傲慢・・。

「イチゴがどうしたって?」

「誰かが私のイチゴを食った」

リンの手に持っていたイチゴをクリスは奪いながら憤慨した。

「あ・俺の」

「リンじゃないでしょ？私の恐ろしさ知ってるものね」

「まあな、てかあれじゃねえの？イチゴ泥棒」

「捕まったって新聞に書いていたでしょ」

「あれ、片方だろ？」

みんなはリンのほうを見て口をぽかんと開けた。

「え？しらねえの？うさわじゃ二人でつるんでいたらしいぜ」

こつこつ悪な情報は悪魔のほうが耳聡い。

特に女の子にもてるリンはそういう系のほうが知っている。

「そいつね、きつと・ふふ。私のイチゴに目と手をつけるなんてね」

みんなは犯人に同情した。

「でもそうね一回目は許してあげる」

クリスが珍しくおおらかなので、リンが笑った。

「なに？あのねえ、油断していたとはいえ、この私の結界をもぐりこんだのよ？そこは評価してやるべきだと思うわけ」

「確かに、クリスの結界に入れるやつなんてそうそついないもんな、で？二度目は？」

リンのコメントにヴァニラは疑問を述べた。

「二度はないでしょう、クリスさんも本格的に結界張るのでしょうか？」

「うん、でもまあ、私に考えがあるわ」

「考え？」

クリスはうなづくのと、にやりと笑った。

「簡単よ、一晩中見張るのよ！リンが」

「俺かい」

「長いお説教と、一瞬の死と、雑用どれがいい？」

「雑用」

「よろしい、じゃ、頼んだ」

自分たちが呼ばれた意味ないんじゃないだろうか、とそう思わずにはいられない12神であった。

「イチゴ泥棒がそんな二日続けてくると思うか？」

「さあ？どうでございましょう。クリスマス様の作物は本当においしいですから」

リンはバードと会話しながら闇に溶けていた。

「クリスマスはなぜ結界をおはりになったのに、リン様に警護につかせたのでしょうか」

「俺への嫌がらせと、犯人の可能性だな」

「といたしますと？」

クグリが木の陰からひよこつと出てきた。

「リン様、わが主からです」

「おお、おつかしー！」

いただいたお菓子を口にさっそく放り込みながらリンは続けた。

「12神はクリスマスの恐ろしさを知っているから無謀はしない、けれどクリスマスの結界に干渉できるほどの力を持つのはこのクリスマス村内では制限される」

クグリの入れたお茶を受け取りながら指を立てた。

「俺か、あいつか、どっちかの娘の仕業だな」

「子女様たちも、お分かりなのではないですか？子は親に逆らえぬものですわ」

「クリスマス様曰く、じぶんの力を試すため、かもしれないこのことですよ」

「ま、無謀なことしたくなるのも、若気の至りだよなあ」

リンは立ち上がり、その手から縄を出現させ構えた。

「連続してくるなんて、強欲なんじゃねえの！」

縄を蛇のようにしならせ捕獲しようとしたが、捕獲物は素早い動きでそれをかわし、ビニールハウスの中に入っていた。

「げ、まじか二重の意味でクリスに殺される」

リンはレポートし、ビニールハウスの中へ飛んだ。

「お前誰だ、ラブか」

闇を操り、逃げ回るやつを捕まえようとするが

「ゴキブリ並みに速いな・・・でも、闇の神たる俺に勝てるか？」

ビニールハウスごと闇に沈める。

（闇の結晶残ってたからクリスに絞められるな・・・ささっと捕獲を・・・
何!!!）

影で作った闇の檻の中には何も捕獲されていなかった。

「うそだろ」

「そうとうやるわね」

「あ、クリス」

「でも、犯人が分かったわ」

次の日。

「なんです、こんな朝早くから」

ヴァニラはクリスとリンの顔を交互に見ながらに首をかしげた。

「なんですじゃないでしょ、ヴァニラ。私に言うことあるんじゃないの？」

「クリスさんに言いたいことならたくさんございますが？」

「こいつよ!!!」

クリスは魔法で捕獲しておいた新人りを頼り投げた。

「ああ、やはり彼女でしたか」

「知ってるなら言えよ!!」

「いえね、確証もなかったのです。それにこの子は純粋にイチゴが好きただけですし・・・クリスさんはお強いですから平気でしょうと思いません」

「こいつのイチゴにかける情熱なめてたら驚くわよ」

「俺ら出し抜くぐらいだもんな」

ミルファイ・ハニーはわたわたと暴れた。

「追放は免れないわね」

「ご、ごめんなさい！反省しています、ですからそれだけは、私、私もうクリスマス様のイチゴ以外は盗りませんから！！」

「おい」

クリスは怒りマークをのせてバカ天使の頭をなくった。

「クリスマス様のイチゴほんつとにおいしかったんです、もうほかのイチゴ食べてもきつと満足できません！お願いしますクリスマスさま、イチゴ売ってくれないでしょうか！！」

「最初から商売にもっていきやいいのよ、なぜ盗むんだか」

「大事にしていたから売ってくれないのになつて、いろいろ間違ってる。」

「はあ、わかつた許してあげる、売ってあげるから。もう盗むんじゃないよ？」

「あ、はい！！」

イツケンラクチャク。

シバラクシテ……

「つてミルファイー！！お前だっきゃ！また盗んでるんじゃないの」

「お金がなくて」

「知るか、出ていけ！村から出ていけ！！」

「ああ、そんな、家を消さないでください、ああ！」

クリスにとっての最大の害虫ができたのであった。

「あ、ミルファイによって受けた私の被害はヴァニラが払ってよね」「え」

「クリス、結婚してくれ。君を愛している」

「ありがとうオーデイウス。でも私『純潔』の誓いをしているから、こたえられないわ」

答える気もないけど、っとクリスは心の中でぼやいた。

「関係ない。君を奪わせてくれ」

オーデイウスはそういつてクリスに襲い掛かったが。

「ごめんつてば」

クリスは魔法でひらりと逃げた。

ぶちのめしてもいいけど、そればっかしてたら評判悪くなって、またクスリやらが文句いつてくるし。

我慢した自分つて偉いとさえも思う。

「ふう」

あの手この手でクリスをわがものにしようとする輩は男女関係なく多い。もともと神に性別なんてないような気もしなくもないが、そこは気にしない。

「ああ、もうつつとおしいわね」

家に帰ればあの男から大量の白百合と情熱的な真つ赤な花束、これはもう一週間目になる。

「もつてもてえ」

ラブはそういつてクリスを茶化したか、睨まれて口を閉じた。

「どうせ送るならもつとこう伝説的宝なもの送ってこいつての」

「いやいや、無理でしょ」

空がクリスの家に入って、まずいやそうな顔をした。

「誰の趣味だ？」

「クリス」

「の、おっかけよ」

クリスは魔法で花束を消した。

「どこにやったの？」

「BOX」

クリスはため息をつきながら外へ出た。

今日一日は変わりのない日を過ごした。・・・今日は

「ふあああれ？今日は静かね」

鉄龍と針龍のぶつかる音も聞こえない。

「？」

窓を開ける。

「ぶー!!」

クリス村の外をみれば、どこかしこもクリスオンリー。

「き、きもー！ー！ー!!」

しばらくして、正気に戻ったクリスは頭を押さえた。

「なにこれ。夢？」

「そう」

後ろを見ればスリープがいた。夢の中で生きる神、スリープとムマ。

ということとは、ここは夢の中か。

「そういえば、ここクリス村じゃないわね」

よく見れば天界の貴族街じゃん

「なんで私ばつかなのさ、何のいじめ？」

いくら美人でも大量にいたら気持ち悪いでしょう。

「私たちがしたわけじゃないわ」

ムマのコメントにスリープが「そうよ、気持ち悪い」と続けた。

自分で言うのはいいいけど、言われると腹が立つ。

「で？誰の仕業？」

「あなたは身に覚えあるはず」

「自分で解決して。私たちは手をださない」

「夢と幻の神なら、どうにかしなさいよ」

「断る」

即答でかぶんなし。

「この元凶は夢に取り込まれたの」

「取り込まれれば悪夢しか見ないのにね」

珍しいことではないので、気にしないらしい二人はバカだね」と顔を見合わせうなづいた。

仲がいいのはいいけど、それ担当なんだから解決してくれてもいいのではないだろうか・・・。

一応二人のほうが上だからそんな言わないけどね！

「でも、そうね。いざとなったらこれ」

「券？」

渡されたチケットにはでっかい太文字で『夢園へご招待一回分』とかかれていた。

「いらないし」

「もらえるものは」

「もらつとけ？」

「そういうこと」

スリープのかけ声にかえしてしまった。

「はあ、もううざったいからささっと終わらせよう」

「ああそうそう」

ムマがクリスを呼び止める。

「夢の中は初めてだろうから、先に言っとくけど。この世界では現実世界の力が30%も出ない上に、あくまで夢の中だから夢主が絶対」

「？」

「魔法は期待しないでってこと」

そういつて二人はどこからかやってきた馬車に乗ってからからか

らと去って行った。

「・・・は？」

わけわかめ。

「発祥地はここかしら」

いろんな服を着たクリスマスが忙しなく出入りしている館が一つ。そこに足を踏み入れれば、啞然とするしかなかった。

大量のクリスマスがいるのにもかかわらず、触れることさえもできないガラスの花瓶の中に入ったオーディンがいた。

「何してんの」

彼のまわりには白百合と赤いバラが大量に置かれていた。おいているのはクリスマスでも、オリジナルクリスマスには全く理解できない。

「おいこら」

切なげに呆けていたオーディンのいる花瓶をける。

こちらに気が付いて驚いた表情を見せた。

「こつちが驚きだつての、なにしてるの」
オーディンの口が動く。

本物の君が、来てくれるなんて、夢のようだ

「夢の中よ、夢に飲まれたオーディン」

彼は何とも言えない表情をして、こちらに食い入るように見つめてきた。

夢でもいい、君から来てもらえるなら、本望だ

「！」

がしゃん。

クリスマスのまわりに柵がはえたとおもえば、それは鳥かごのような牢屋を作ってクリスマスを閉じ込めた。魔法で壊そうとしたが、魔法が使えなかった。

「……『夢主が絶対』ってこのことね」

あくまで夢。されど精神。これはまたやっかいな……。

君と、いつまでも見つめあっていたい。

なんて。

こいつ莫迦？

下

「もしかして、こいつどうにかしないとずっとこのままなのかしら」
クリスは檻の中でつぶやいた。

オーディウスは恍惚とした表情でクリスをうつとりとした目で見つめていた。

その目を潰してやりたい。

こいつと心中だなんて、死んでも御免だわ。というか死ぬなら一人で逝け！

天使らしからぬことを考えながらクリスはオーディウスをどうするか策を練り始める。まずは、状況確認をしよう。

オーディウスによって夢の中にムマとスリープに引きずり込まれ、今度は夢主であるオーディウス自身により夢の中に縛られる結果となった。理由は現実ではクリス（つまり私）と一緒になれないことへの欲求不満による現実逃避。

（はつきり断ったって無駄か……そもそも断ったからこうなったもんね）一緒にいる気ないけど）

「オーディン」

手をヒラヒラさせて意識を確認するが

（いっちゃてるわー）

クリスはイライラしてきた。

（いざとなったら、夢主ごと破壊しよう）

本気を出せばオーディウスごとき、夢であるつとどつってことない……はず

（まずはここから出ないとなー）

夢主を起こしたくても（武力行使）触れることすらできないのだ。

（馬鹿な男ねオーディウス。あなた自身が私に触れることを拒んでいる……）

純粹故に敬愛過ぎたか……クリスは胸を掴んだ。

夢主オーディウスの願いは、死んでも一緒にいたい。

その呪いがクリスの身体を蝕む。

(自分だって苦しいはずなのに笑いやがって……マゾか)

どうにか身体を自由に……せめてオーディウスの目をそらしたい。

「オーディン」

クリスは微笑んで彼の方へ手を伸ばした。

「あなたに触れたいの。さあ」

彼の目は大きく見開き、手を伸ばした。クリスを閉じ込めていた空間が割れた。

(よっしゃー!)

クリスは懐から夢と幻を司る二人から貰ったチケットを取り出した。

「招待するわ！おいでませ！リン」

名を呼ばれたリンが登場した。何故か片手にはカップラーメンが「ん」

驚いた様子でも分かっている風でもない、言うなれば……いつも
のトラブルかっていう反応。当たっているだけに腹立つ。

「リン」

クリスは素早く命令した

「そこにいる男捕まえて」

「おう」

呆気にとられているオーディウスをカップラーメンもったまま羽
交い締めにするリン

クリスはずかつかとオーディウスの所まで行くと拳を握って力い
っぱい殴った。

そのついでにリンのカップラーメンも落ちたけど、自分のじゃな
いので全く気にしない

「馬鹿者！！私が欲しいなら私に見合っ、神界1の男になりな
さい……」

「っ」

ハツとしたオーディウスの顔を見たと思つたら、世界が歪んだ。

「目を覚ましたら、自分を磨きなさい。オーディン期待してるから」

その言葉を最後に夢から意識が戻るような重い感覚に陥った。

「おそようクリスさん」

ヴァニラが皮肉気にそういった後、花束をおいた。

「取り忘れですよ。いい加減身をかためてはいかが？面倒事に巻き込まれますよ」

そう言い去っていった。クリスは花束を見ながら呟いた。

「どうせくれるならもつと使えるものをちょうだいよ」

心や花は、すぐ移ろい変わりやすい。私は変わらないものが欲しい。

「流れる時の中を、変わらないでいることが難しく、愛しいのよ
オーディン」

神だからこそ分かつて

分からないなら、その程度よ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0597m/>

クリス村

2011年10月19日03時10分発行